

# VIII

かいこ  
回顧と前進～旅行記



## 8-1 回顧と前進 目次

8-1-1	生い立ち	339
8-1-2	慶応普通部以後	342
8-1-3	柏木の頃	346
8-1-4	小国に住む	361
8-1-5	応召	368
8-1-6	入獄	371
8-1-7	新制高校創立	375
8-1-8	無教会について	383
8-1-9	平和と政治	387
8-1-10	訪ねて下さった先生	391
8-1-11	学校の経営	396
8-1-12	心のふれ合う教育	401

1977年5月・6月

於<sup>(1)</sup> 学園内校長室  
 聞く人 ひぐらし かつひで こせき みつる  
 日暮 勝英、小関 充

## 8-1-1 生い立ち

—— 1978年5月は<sup>キリスト</sup>基督教独立学園高等学校が創立され満30年です。これを機会に先生のお書きになった文章を纏めて一冊にしたいという声が、卒業生はじめ周囲の方々から上がりまして、それに先生の自伝をつけたいわけですが、先生はあまりお書きになって居られません。そこでお話し願う形で私たちが自由に（ひろ先生<sup>(2)</sup>にも）お伺い致しますのでよろしくお願い致します。

—— 先生のご生家と<sup>キリスト</sup>基督教との関係は。

鈴木 私が私の一族でいちばん先に<sup>キリスト</sup>基督教を信じましたので私が最大の手柄者だと考えているんです。親の残した財産は無くしましたが、しかしいちばん偉いものを一族に持って来た。それによって親族の中に信仰を与えられる者が出ましたから。

—— ご実家は<sup>かいき</sup>甲斐絹<sup>(3)</sup> <sup>どんや</sup>問屋さんでしたね。

鈴木 <sup>かいき</sup>甲斐絹を東京で売る仕事でしたが、<sup>じしよ</sup>山梨の家は昔からの家で、地所も多く農業も少ししておりましたので母が留守を守って居りましたが、長女に婿をとりそちらの管理を委せるようになってから、家族は東京に住みました。<sup>じんじょう</sup>尋常<sup>(4)</sup>五年のはじめ頃でした。

—— その頃ですが、ゲーテの「魔王」のようなお話がありますが。

鈴木 いいえそれは私が七つの時の事です。私の「<sup>すけよし</sup>彌美」という分りにくい名前は<sup>ご</sup>御<sup>てんば</sup>殿場<sup>(5)</sup>の近くの竹の下のお地蔵さん<sup>(6)</sup>が付けてくれた。どういう訳か私の家では女の子はよく育つが、男の子は育たない。それを親類の人が心配して竹の下のお地蔵さんに名前を付けてもらおうとよく育つからといって名前をつけて貰ってくれた。そこで母は自分の心のうちで誓って「この子が七つまで無事に成長できたらお礼詣りに参ります。」と決めていたんです。七つまで死ななかつたのでお礼に行くことになった。

その頃父は毎月三回ぐらい<sup>か</sup>山梨県下の<sup>いちば</sup>市場に絹の買い付けに出て来ていた。市は<sup>いち</sup>吉田、<sup>か</sup>谷村、<sup>か</sup>猿橋<sup>(7)</sup>などで、私の生まれた<sup>か</sup>葛野<sup>(8)</sup>には無かったのを父が立てるようになりましたので、順に回っては東京に帰ることになっていた。それで父が<sup>いち</sup>吉田の市に出るときに<sup>と</sup>東海道線を通して私も連れて行ってもらうことになった。どういうわけか品川から汽車に乗ったんです。その頃の品川は<sup>そば</sup>駅の側まで海で、波が寄せては返しているのが汽車の中から見えました。当時は<sup>しんばし</sup>新橋が始発でね、そこから品川までは海の上を、

堤の上を走る。芝浦のあたりは舟を出す料理屋が並んでいて、鉄橋の下を通過してすぐ海に出られるようになっていた。その日、国府津<sup>(9)</sup>に着いて御殿場行きの汽車を待つ間にもすぐそこが海岸でね、砂浜で小石や貝殻を拾ったことを覚えています。その日は山北<sup>(10)</sup>で泊まりましたが、宿で生まれて初めてお刺身というものを食べた。山の中で魚といえば塩鮭ぐらいだったから珍しかった。翌朝は汽車が無く、父におんぶして御殿場まで歩いたんです<sup>(11)</sup>。途中、鋸状の屋根をしたへんな建物があって、異様なものに見えましたが、今考えると駿河<sup>(12)</sup>にある富士紡<sup>(13)</sup>の工場だったんです。目指す竹の下のお地蔵さんの所に着くと小さなお寺ですから和尚さんは野良仕事をして居りまして、呼んでいただいて御布施を差上げたわけです。そこですぐその日のうちに吉田まで行くことになり、鉄道馬車<sup>(14)</sup>に乗った。ところが籠坂峠<sup>(15)</sup>の上まで登ったところで嵐が来るから馬車はこれから先には行かないということになった。しかたがないから峠の茶屋で身仕度をし、それから父におんぶして雨の中を歩き出した<sup>(16)</sup>。「ふきぶり」<sup>(17)</sup>と言いましたが、ひどい嵐になった。梨ヶ原<sup>(18)</sup>を通過して山中湖のあたりでは暗くなり、湖水が海の様に見えましてね、国府津で海を見て、山を越えてまた海が見えたんですからとても不思議に思いました。男ですから父はおんぶなんか下手でね、窮屈で、苦しくて、背中で「吉田はまだか」「吉田はまだか」と繰り返しながら暗い嵐の中を雨に打たれて行く。ですからそれが丁度「エル・ケニツヒ」<sup>(19)</sup>みたいだと思ってね。とにかく初めての一大旅行でした。

—— ご生家は千年以上も続いた旧家で大きな家だったと伺いましたが。

鈴木 大きい方ですけど、ほんとはもっと大きな家があった。でもそこは火事でよく焼けるからといって 300m ぐらい離れた私の生まれた所に移ったんです。先祖からの屋敷には大きな樗<sup>(20)</sup>の木がありましてね、千年近く経ったと言われたものでした。そんな古い木が屋敷の中にあっただんですから、その村の開祖みたいなものだったんでしょうね。

—— お父さんをバカと言って叱られたのはその頃ですか、ご兄弟は何人ですか。

鈴木 兄達は生まれてすぐ亡くなりましたが残ったのは弟一人と姉三人です。

私の弟が生まれたときに一時私は天野<sup>(21)</sup>の伯母の家に預けられましてね。天野の家は比較的自由的な雰囲気だったものですから生意気なことを言っても叱られない、そこでその真似をして父親に「バカ」と言ったんです。父はこんな時から親のことをバカと言うのではいまにどんな者になるか分からないと言って、私を瓜畑に捨てたんですね。三歳の頃でしたが、まあそういうふうに道徳的訓練をしてもらったことは有り

がた  
難いことでしたね。

—— 小学校は五年の時に東京ですね。毎年優等をおもらいになったそうですね。

鈴木 五年の初めに日本橋の十思じっし小学校<sup>(22)</sup>に転校しましてね、その学年の終わり頃「何回優等とった人」と言って生徒に手をあ挙げさせたんです。二回三回と手をあ挙げて、四回は私だけで、田舎から来たんですがその年も優等賞をもらった。

## 8-1-2 慶応普通部以後

— 中学は慶応の普通部ですね。三田<sup>(23)</sup>にあったんですか。

鈴木 三田の山の上にあった。私が出てから大学の方が拡張されて下に移りましたが、今は日吉<sup>(24)</sup>ですね。その頃日本橋に住んでいまして、呉服橋から田町まで定期を買って国電<sup>(25)</sup>で通いました。葛野の小学校では袴を付けませんでしたが、日本橋の小学校は着物に袴で慶応は制服でした。

普通部には1912年(大正元年)に入学したんですが、一番生意気な頃だったでしょうね。弁論部に入っているいろんな事を言ってね。その頃普通部で「頑猛<sup>(26)</sup>」という言葉がはやりましてね。頑健<sup>(27)</sup>で猛烈なという意味で「あいつは頑猛なやつだ」というふうに使って、ある場合には誇りに思っていました。久保という先輩が「頑猛諸君」という演説をして「昔の頑猛精神は今日は駄目になった」と嘆いたことを覚えています。岩波の哲学叢書<sup>(28)</sup>が出たのもその頃で「認識論」が発刊され、認識論を見なくちゃだめだとみんなで買ったものでした。大学生よりもむしろ普通部の方が慶応の精神をちゃんと持っているんだというようなつもりでね。その時普通部の主任は川合<sup>(29)</sup>という相当の哲学者でしたが、この先生の影響もあったわけです。認識論など哲学をかじったような事を言っては大騒ぎしたものでした。

— やはり教師の影響は大きいですね。

鈴木 岡村周諦という先生がおられましてね。苔の研究がご専門でその時既に博士でした。昔は博士というのは大変でした、今みたいな博士ではない。その先生の講義が面白くて、未だに覚えていることが沢山ある。おかげで私は今でも昆虫の分類ができるんです。ある日先生はゴムマリを持って来られましてね、マリの下半分を凹ませて風鈴の形をこしらえ、中に短冊をぶら下げて、先生は三重県の出身でしたから「よう見て」「よう見て」とおっしゃる。そこで黒板に「マリソコハチラダ」と書かれた。この句が昆虫の分類を表わしている、しかも高等な順にとおっしゃる。特徴を羽根の形で分けまして、マは膜翅目<sup>(30)</sup>、蜂のようなものですね。リは鱗翅目<sup>(31)</sup>、蝶などです。ソは双翅目<sup>(32)</sup>、アブの類。コは甲虫目、こがね虫などですね、ハは半翅目<sup>(33)</sup>、セミの類など。チは直翅目<sup>(34)</sup>でバッタ。ラは羅翅目<sup>(35)</sup>でトンボですね。あとはダですから弾尾目<sup>(36)</sup>、これはよく古い本などの頁の間にいる銀色のシミという虫の類ですね。それに昆虫の特徴は幼虫、蛹、成虫というように変態<sup>(37)</sup>が完全か、不完全か、口の形が吸収口か噛む口かで分けるんですが、それを先生は「マリソコは変えて、ハ

チラは変えにくい、マコチラ<sup>か</sup>噛んで、リソは吸いとる」と歌で教えて下さった。マリソコは変態<sup>へんたい</sup>完全でハチラは変態<sup>へんたい</sup>不完全というようにね。そういうことを65年以上たった今でも覚えているように教えて下さったんだから偉い先生でしたね。学問がよく分かった先生で、歌でもって教えて下さった。

—— 熱心な先生ですね。しかし鈴木先生もよく覚えていらっしゃる。物理を<sup>こころざ</sup>志されたのはやはりその頃ですか。

鈴木 ええ普通部の頃から物理をやろうと考えました。私の一年上に渡辺という物理を熱心にやる先輩が居って、物理の実験室に行っては特別の機械を借りて実験するようなことをしていた。私もその仲間に入りまして、自分で物理の実験をやったり、化学の分析<sup>ぶんせき</sup>をやったりして、その頃大変面白くやった。化学の先生もいい先生で、桐生<sup>きりゅう</sup><sup>(38)</sup>の工専<sup>こうせん</sup><sup>(39)</sup>から来られた方で、あとで小西六<sup>こにしろく</sup><sup>(40)</sup>に移り、感光材料の研究をおやりになりましたがね。その頃は物理学が非常に発展したときで、X線やラジウムが発見されたり、相対性原理<sup>そうたいせい</sup>が発表されたのは七、八年前でしたから。それで私は普通に出世してもつまらない、学問の研究こそが永遠のものだから、学問をやろうと考えましたね。そして学問の中の学問と言われている物理学を選んでこれを研究することが自分の天職だと思っていた。

—— その頃で思い出に残る方は<sup>かた</sup>。

鈴木 三年先輩に藤山愛一郎氏<sup>ふじやまあいちろう</sup><sup>(41)</sup>が居りましたね。その同級に松本信広<sup>まつもとのぶひろ</sup><sup>(42)</sup>という歴史学者になったのが居った。一級上に先程の物理に熱心な渡辺先輩がいて、彼の影響で彼が進んだ八高<sup>はちこう</sup><sup>(43)</sup>に私も行ったんです。

普通部には生徒隊というのがあって、渡辺さんは本部の<sup>ちゅう</sup>中隊長、私も同じ<sup>ちゅう</sup>中隊長をやりましたが、その頃<sup>だい</sup>大隊長をしていた中島という人が、先頃、私の毎日新聞に出た「この人と」という連続コラムを見てお祝いの手紙を下された。去年亡くなられて、未亡人<sup>もちゅう</sup>から喪中だからという知らせがあった。訪ねればよかったと思ひましてね。残念でした。

一昨年は普通部の先生方が独立学園のことを聞いて見学に来られましてね。その折、実は私は普通部を出たんです、と申しましたら、あとで古い名簿を調べてくれて同窓会名簿<sup>おもしろ</sup>などを送ってくれましたが、ほんとに普通部の頃は面白かった。精神的な意味でいろいろとあばれたから。

—— その後八高<sup>はちこう</sup>に進まれたんですね。

鈴木 1917年（大正6年）の入学でね。その頃私学では物理をやれるところが無かったから八高に入った。当時大学や高校では夏休みが学年の境でしたから入学試験は7月にあるわけです。話に聞くと100点満点のところ30点取れば入学できるというものだから、上がっちゃうからいい点が取れないんだ、というわけで度胸を養うのが受験準備でしたね。入学して初めの一年は寮に、あとは下宿に移りました。

八高でもいい先生が居られましたね。いい先生を校長が集めたんですね。大島義修<sup>(44)</sup>という方が初代校長で、手腕のある優れた方で、新機軸を出すことで有名でした。その中で指導教官制度というのは八高が始めたことです。遠くから来る生徒が多いから、各自が指導教官というのを定めていろいろ相談相手になってもらう。私は柏木好三郎<sup>(45)</sup>という物理の先生に指導教官になっていただいた。ある時指導教官のお宅に遊びに伺ったら、テーブルの上に綺麗な花瓶が置いてあった。「これなんですか」と尋ねたら宝探しのお礼だ、とおっしゃる。その訳は、県立病院でラジウムを紛失したという。どうやってそれを探したらいいかわからず、困って先生に相談に来た。キュリーがラジウムを発見したのと同じやり方でね、金箔検電器<sup>(45)</sup>といって、どこの田舎の小学校にもあるような簡単な器械でね。頭でエポナイト<sup>(45)</sup>をこすって電気をおこして検電器につけると二枚の金箔が開く、ラジウムがあるとその近くの空気が放射線のためにイオン化されて電気を伝えるようになるので、そこに金箔検電器を近づけると電気が逃げて開いた二枚の金箔が閉じる、閉じる早さでラジウムの近さがわかるわけです。およその場所がわかればいいと思って頼まれたとのことですが、非常に早く閉じる所があったので、ここを掘りなさいと廊下にチョークで印をつけてあげた。間もなく、先生が病院のお風呂に入っている間に、見つかりました、と報告されたとのことです。その宝探しのお礼にとその花瓶が贈られたわけです。

八高時代でも私は勝手なことをしていたんですが、一度みんながアメリカ人の先生の授業をエスケープしたことがありますね。そのとき私だけ「やらない」といって一人で教場<sup>(46)</sup>に残って居りましたが、皆と一緒に同調しないような奴は同級生がなぐるといような話がありましたが、でも実際にはなにもありませんでした。

—— 東大でも先生らしい勉強をなさったそうですが、いつ頃のご入学ですか。

鈴木 1920年（大正9年）に入学して、1922年（大正11年）に家の都合で一年休学しましたが、1924年（大正13年）1月に内村鑑三先生のところに行くようになってから、物理の真理より信仰の真理の方がなお偉いことがわかりましたから、それを勉強しようと思った。ですからあと二年間は勝手なことをして、大学という所は資格をもらいに行く所でなく、学問をする所だと思ったものですから、文学部の講義を聴



いたり、勝手なことをしておりましたら、どうもあまり長く大学に居<sup>お</sup>っては困るから、という訳で 1926 年（大正 15 年<sup>(47)</sup>）に追い出されてしまって、いつの間にか理学士<sup>(48)</sup>にされていました。

—— 先生は理論物理でしたね。

鈴木 ですから物理をやらないで聖書の勉強をするのですから、物理のコースはなるべく楽に通<sup>ほう</sup>る方<sup>ほう</sup>をと思って、実験しないで本を読めば済む理論を主とするコースを取ったわけで、当時発展した理論物理学の尖端<sup>せんたん</sup>をやったのではないのです。地球物理学の本を勉強いたしました。

### 8-1-3 柏木<sup>(49)</sup>の頃

—— 先生が内村先生の柏木集會に初めて行かれました頃のことをお聞かせ下さい。

鈴木 ヴォーリスさんから勧められて、1924年（大正13年）の1月末に、友だちの會員券を借りて初めて柏木に行きました。その日は内村先生がご病気で、畔上先生だけのお話だったんです。コリント前書1章の講義でしたが、今まで聞いていたキリスト教の話とは違い、これは偉いものだと思います。この方が内村先生かしら、思ったより若いなと思いつつ聞いていましたが、最後に先生も大へん良くなったからこの次は集會に出られるだろうとおっしゃったので、内村先生でないことがわかった。だから次回にはじめて内村先生のお話を聞いたんです。

畔上先生の前講<sup>(50)</sup>のあとに、講壇に羽織はかまの和服で出られて、「大先生の病氣だからどんなに高尚な病氣だと思っても知れないが実はお正月のご馳走を食べすぎたんだ」とおっしゃった。それが私の内村先生から伺った最初の言葉です。「久し振りで病床に就いていると札幌時代のことを思い出し、札幌時代に歌った讚美歌を英語で口ずさんでその頃を偲び、ほんとうによかった。病氣をした事も大きな恩恵だった」ということをお話しなされた。

—— でもそれで先生は内村先生を偶像化せずに済みましたね。

鈴木 かえって聖書のお話を聞いて感激したというより良かったと思いますね。

それから2月、3月と通って、キリスト教の真理が素晴らしいものとわかりましたので、3月の末に先生にお会い致しまして正式の會員にして頂いた。

—— 日曜学校をなさいましたのはその頃ですか。

鈴木 ヴォーリスさんがよく若い人は日曜学校の仕事をするとよいと言って居りましたので、柏木日曜学校の手伝いをさせて下さいと内村先生にお願い致しましてね。石原先生<sup>(51)</sup>が校長をして居られ、福田ジョン君<sup>(52)</sup>とか、宝田さん<sup>(53)</sup>、久米さんとスタッフは揃って居ったので、組を受け持つとかいうことなしに、出て居れ、と言われて手伝うことを許されたんです。

—— では午前と午後と柏木で。

鈴木 朝 9 時に柏木<sup>かしわぎ</sup>に行き、日曜学校に出まして、そしてまた 10 時から内村先生の集会に出席したんです。当時今井館<sup>て ぜま</sup>が手狭<sup>ため</sup>だったので、青年の為に午後も集会をして居<sup>お</sup>られましたから午後にも出させていただいて、夕方帰宅するという状態で、日曜日と言えは朝から夕方まで柏木<sup>かしわぎ</sup>に居<sup>お</sup>って内村先生のお話を二度も伺<sup>うかが</sup>って、実に恵まれた一日を送りましたね。

—— ギリシャ語の勉強もその頃ですか。

鈴木 聖書の研究を自分でしなければと思い立ちましてね。ハデルストンの文法書<sup>(54)</sup>を買<sup>ひと</sup>って独りでギリシャ語の勉強を始めたんです。三ヶ月たって辞書を引ながら新約聖書が読めるようになった。その頃政池<sup>まさいけ</sup>から桜新町<sup>さくらしんまち</sup><sup>(55)</sup>の塚本先生のお宅でギリシャ語の勉強をしていると聞きまして、じゃ私もと毎週火曜の夜にあったギリシャ語で聖書を読む会に加えて頂いた。毎火曜の夜、新町の停留所から先生のお宅まで桜並木<sup>なみき</sup>の下を精神<sup>こうよう</sup>の高揚をもって往復した喜びは忘れられないですね。

—— 組が分かれていたそうですが。

鈴木 組がない初めの頃でした。だんだんギリシャ語を学びたい人が増えましたので、この会が中心になってギリシャ語の会の A 組が出来、B 組も出来た。また、内村先生<sup>もと つど</sup>の下に集った青年達の横の交わりができて、やがて柏木青年会が出来たんです。

—— 政池先生とはその頃から。

鈴木 いちばん初めはとにかく内村先生の集まりで、政池<sup>まさいけ</sup>は受け付けのような仕事をしていた、私は早く来て日曜学校のことをやっておりましたからそんなことで。しかしとにかく同じ大学の理学部で教室も隣りだった。それで政池<sup>まさいけ</sup>が化学実験室で毎週昼休みに二、三人の集会を持っていた。

—— メンバーはどなたですか。

鈴木 片山徹君<sup>かた やまとおる</sup><sup>(56)</sup>と久原寿君<sup>く はらひさし</sup>ですね。片山君は物理で久原君は化学でした。二人一緒に六高<sup>(57)</sup>で三谷<sup>み たに たかまさ</sup>(隆正)先生に教えられて、東京に来たので紹介されて塚本先生の集まりに出た。その頃はギリシャ語の集まりしかなかったが、そのうちダンテの会が出来て、ドイツ語で読む人、日本語で読む人、原語<sup>(58)</sup>で読む人がそれぞれ集まっ

て、ダンテの会は月一回でしたが楽しかった。塚本先生が「神曲<sup>しんきょく</sup>を勉強するのに祈りをして始める、そんな勉強会はないだろうね。ダンテも喜んでいるだろう。」なんておっしゃった。

とにかく私達が化学実験室でやっていた集まりが理学部聖書研究会で、1925年（大正14年）に矢内原先生<sup>やないはら</sup>を中心に大学に關係のある内村聖書研究会員で帝大聖書研究会が作られた。そこで理学部<sup>ほう</sup>の方を解散してその研究会で毎月集会を持った。

—— それでは先生は帝大聖書研究会の最初からのメンバーだったわけですね。

鈴木 ええ、しばらくは私が書記役をやっていました。

1924年（大正13年）から1930年（昭和5年）に先生が亡くなるまでの間は私にとっても、内村先生の下<sup>もと</sup>に集った青年達にもみのり豊かな年月でした。

—— ひろ先生にもその頃の楽しい思い出を。

ひろ 柏木<sup>かしわぎ</sup>で私たち女の学生だけ集まっていたとき、内村先生が札幌農学校時代のお正月のお話をなさいました。お餅<sup>もち</sup>の食べ競争のお話でした。先生もかなりあがった<sup>(59)</sup>ようですが、一等の人は24個でしたか、数ははっきりは覚えていませんけど、一等になった人は超満腹で苦しくて寝てしまった所へ、皆がお祝いに行ったそうです。応待<sup>おうたい</sup>の声を出そうものならお餅<sup>もち</sup>がのどへ出て来るもんだから、苦しそうに手を振っているばかりだったと内村先生が笑い笑い愉快<sup>ゆかい</sup>そうに話して下さいました。先生はいくつ召し上がったんですかと尋ねますと、「17しか食べないんだ。」とおっしゃったんです。

鈴木 その話はたぶん女高師<sup>じょこうし</sup><sup>(60)</sup>の人を相手にしたときのことだろうね。

—— 内村先生の晩年には集まりに来る女高師<sup>じょこうし</sup>の学生を大へん可愛がって下さったそうですね。

ひろ 文科<sup>(61)</sup>の人は感情的に信仰を受け取っているから理科<sup>(62)</sup>の人が解<sup>わか</sup>ってくれると頼もしいんだ、とおっしゃって理科系をほめて下さいました。

鈴木 だから私たちはみんな、政池<sup>まさいけ</sup>と久原君<sup>くぼら</sup>は化学、私と片山君<sup>かたやま</sup>が物理、湯沢君<sup>ゆざわ</sup><sup>(63)</sup>と鱒崎君<sup>ひれさき</sup><sup>(64)</sup>が医学、そのほか横山君<sup>(65)</sup>、梅田君<sup>(66)</sup>も医学でした。私たち皆が集まっていると、「みんな理科か。」とおっしゃって喜んで下さった。1929年（昭和4年）

に先生がご病氣なされたからというので私共若い者も前講<sup>ぜんこう</sup>をさせられたことがありましてね。その時のことが内村先生の日記<sup>(67)</sup>に書かれておりまして、「塚本、三谷、鈴木（理）の三学士<sup>さんだん</sup>が講壇<sup>こうだん</sup>を引受けた。」と偉い先生方と並べて書かれて、そして鈴木だけは括弧して（理）と書き足してあるんです。

—— 先生はその時どんなお話をなされたんですか。

鈴木 それはコリント人への第二の手紙の 4 章の 7 節の話でね。「しかしわたしたちは、この宝を土の器<sup>うつわ</sup>の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものではないことがあらわれるためである。」

それで土の器<sup>うつわ</sup>に信仰を与えて下さることに対するパウロの解答は、偉いことは神様がなさるので、人間がするのではない、ということが明らかになるためだと言うのです。パウロのそれはゼネラルソリューション（一般解）<sup>(68)</sup>だ。微分方程式の解には、ゼネラルソリューションとパーティキュラーソリューション（特殊解）とあるわけですね。私の場合のパーティキュラーソリューションというのは、私がイエス様から離れないためのものだ。つまり私たちは信仰を持ったんだから、この世的なものはつまらないという事は分かっているから、この世的才能などは欲しくないが、しかし肝心な私の信仰が駄目<sup>だめ</sup>だと感じている。情けないとも思うが、しかしこれが恩恵<sup>おんけい</sup>なので、そのおかげでイエスに依り縋り<sup>すが</sup>、離れられないでいることが出来る。それを私の場合のパーティキュラーソリューションだと言って、そんなところに微分方程式を持って来たものだからね、私の後に塚本先生がお話しなされたんですが私のことを褒めて批評<sup>ひょう</sup>しておられてね、私が予言寺<sup>(69)</sup>の方で休んでから戻ってみると、まだその話が続いているんですよ。困ってしまいました。

—— 柏木の予言寺<sup>かしわぎ よげん</sup>って続いて建っていたんですか。

ひろ すぐそばでしたが、下駄<sup>げた</sup>をはかないと行かれない。

—— ひろ先生はいつ頃内村先生の集まりに行かれたんですか。

ひろ 女高師の学生時代で、ほとんど四年間ですね。兄（政池仁）<sup>まさいけじん</sup>が連れて行きましたね、私が 1928 年（昭和 3 年）に女高師を卒業して東京を離れましたから、内村先生の亡くなられた 1930 年（昭和 5 年）まで、あと二年間お話しをお聞きできなかったわけです。

—— おくに 小国伝道はその頃から始まったんですか。

鈴木 いいえ、1924年（大正13年）からですね。内村先生がご自分の仕事として、御自身はいらっしゃらなかったけれども若い者を毎年夏派遣して始められた。最初の年には政池と横山君<sup>(70)</sup>が行き、同時に岩手の方には湯沢君と鱒崎君が行ったんです。若い者を毎年夏、山形県と岩手県に派遣して始められた。

—— その後政池先生と鈴木先生がコンビで来られたんですか。

鈴木 1928年（昭和3年）に私は初めて政池と一緒に来ました。それより前、1925年（大正14年）には横山君のみ一人で来、1926年（大正15年）には誰も来なかった。

1927年（昭和2年）に政池は小池君<sup>(71)</sup>と二人で来て帰りに沼沢<sup>(72)</sup>で別れて、政池は一人で初めて桜峠を越えて市野々<sup>(73)</sup>に下り、市野々の分教場<sup>(74)</sup>に寄った。当時その先生は伊藤哲之助先生<sup>(75)</sup>で、何処かに泊りたいと頼んだが、「人を泊めるような所はない、それじゃあ私の家に泊まりたまえ。」というわけで伊藤先生のお宅に泊まった。分教場から伊藤先生のお宅まで行くみちみち、政池はめずらしい植物を採って行ったら、「食べるものでもない、薬草でもない草を体にぶら下げてやって来た。この人は頭がおかしい<sup>(76)</sup>かと思った。」と後日伊藤先生のお母さんがおっしゃっていました。

—— その頃の活動のセンターになるような所はほかにどこがあったんですか。

鈴木 おくに 越後屋<sup>(77)</sup>という宿屋でしたね。その女の子と隣の染屋という家の子<sup>(78)</sup>が政池と仲好しになり、手紙を寄こして居ったものですから今年も行こうという訳で中断しないで続いてきました。

—— どの位の日程ですか。

鈴木 二週間ですね。でも1924年（大正13年）にはじめて来たときは政池だけ長く居りまして、越後屋では費用がかかるからとそこの紹介で少し程度の低い宿屋に泊まって一ヶ月位居ったんですね。

—— 内村先生はどういう方法で村の人へ伝道するようにおっしゃったんですか。

鈴木 友だちになれとね。そしてなんでもいいから土地の様子を調べろとおっしゃいましたね。だから子供と友だちになったり、植物を調べたりして帰ったんです。

—— 「聖書の之研究」の頒布はんぷ<sup>(79)</sup>とか、文書伝道などはなかったんですか。

鈴木 始めからそういうことはしないで、讚美歌だけは置いて来いとおっしゃいました。讚美歌を教えて、聖書の簡単なお話をする。

—— 内村先生からいくらかサポートがあったんですか。

鈴木 内村先生は汽車賃、宿泊料等全部を出されました。横山君が一人で、自費で行ったことがありましたが、「横山はけしからん、俺の金で行かないから。」とおっしゃった事もあるんです。先生が当時の金で 15 円か 20 円位<sup>(80)</sup>ですけどちゃんと負担された。

—— 翌 1928 年（昭和 3 年）には先生も来られたんですか。

鈴木 1926 年（大正 15 年）に大学を卒業して 1927 年（昭和 2 年）には兵役で来れず、1928 年（昭和 3 年）から来たわけですが、1929 年（昭和 4 年）には政池まさいけの父が亡くなったので、政池まさいけは来れませんが、私と鈴木俊郎君すずき としろう<sup>(81)</sup>とで来た。政池まさいけに案内してもらっていた土地だから、毎年寄るところに寄って叶水かのみずにも来た。

叶水かのみずでは上叶水かみかのみず<sup>(82)</sup>の小学校<sup>(83)</sup>で聖書の話をしたんです。他では青年や子供だけでしたが、ここでは大人が話を聞きに来た。山崎集落の巡査か何かになって台湾に行つて帰つて来た、土地の人としてはインテリだった人もよく話を聞きに来たり、渡部弥一郎わたなべ やいちろうさんも聞きに来ていた。

弥一郎やいちろうさんは私たちの話を非常によく聞いて、それから言うにはほんとはお寺の坊さんが精神的支えになってくれるはずなのだが、ちっともそうになってくれない。「僧そうは勝友しょうゆう<sup>(84)</sup>なるが故に帰依ゆえす（南無なむ帰依きえ仏ぶつ、南無なむ帰依きえ法ぼう、南無なむ帰依きえ僧そうの説明）」<sup>(85)</sup>と言うが、お寺の坊さんは勝友しょうゆうの役目をしてくれないから、私達の話をよく聞くということを言ってましてね。そしてその翌年伊藤先生が転任したので弥一郎やいちろうさんのところに泊まろうというのに弥一郎やいちろうさんの名前を忘れちゃったけれど、あの「僧しょうゆうは勝友しょうゆうなるが故に帰依ゆえす」と言った人、なんと言ったかと聞いたら、俊郎君としろうが手帳を見て確かめて、弥一郎やいちろうさんの所<sup>(86)</sup>に泊まることにしました。それからは弥一郎やいちろうさんの所にばかり泊まるようになった。

—— わたなべ 渡部さんはその頃から知識欲が旺盛おうせいでしたね。

鈴木 それはあの人は小学校四年しか出ませんが、よく本を読んだから、僧しょうゆうは勝友なるが故ゆえに帰依きえするというようなことまで知っていた訳です。

—— 一週間ぐらい滞在なされたんですか。

鈴木 いいえ、そういう所は一晩泊まりですね。中心おぐにほんそんの小国本村では前後一週間位居りましたね。そこを中心にして、そこから北小国(87)、南小国(88)、津川村(89)とね。叶水かのみずは津川村叶水でしたから。

—— その頃かしわざの柏木の青年達は伝道心おうせい旺盛おうせいでしたね。

鈴木 内村先生からそういうことを言われましたから一生懸命になってね。

—— その頃おぐに小国で教えられた人たちで残っている人は居りますか。

鈴木 それはもういろんな人が昔先生の話まさいけを聞いたという人が出て来まして、政池先生やその他の先生の話などもね。

この辺おぐにの人は実に純真なんですね。小国町から川を渡ってこちら側たねざわの種沢(90)を通って峠(91)を越え、ここに合流するんですが、途中高等小学校(92)の生徒と一緒に来まして、木陰こかげで休んでいたら、前の道を百姓のような人が通った。すると青年がね、「あっ、あれは小島先生のお父さんだ、知らないで失礼した。」と通り過ぎた後ろ姿ていねいに おじぎおじぎをしているんですね。私はこんなにこの辺おぐにの人は純朴なものかと思ってね。そう思っても後ろ姿おじぎなんかには礼をしませんね。過ぎてしまったら、おじぎしないで悪かったと思うくらいでね。その生徒はそんなわけで信仰に熱心になってくれたんですが、高等小学校を卒業して、小松(93)にあった農学校(94)に入った。そうしたら、小松よねざわに米沢の教会から牧師が伝道おに来ている、その話を聞こうというのです。お居ったんですが、そのうち洗礼を受けろということを使う。それで洗礼を受けることについては鈴木先生まさいけや政池先生に相談すると言ったら「相談なんかしなくたっていいから受けろ。」と言ったとね。そういう事を聞いて、私達ふんがいは憤慨ふんがいしたんですがね。それは洗礼を受けることも、本人が洗礼の意味を解わかって受けるならそれは大いにいいことだから、それこそ祝電ぐらい打ってやってもいいのに、相談するなと言うことはけしからんと怒りました。その牧師さんとは 15、16 年後まで会わなかったのですが、その後山形の教会に移って教会で幼稚園などをやっておいて私立学校の会合のときに会い



ましたが、これが陰<sup>かげ</sup>でけんかしておった人かと思いました。

—— 1929年（昭和4年）は何月頃でしたか。

鈴木 私と鈴木俊郎君<sup>としろう</sup>とで来ましたが、その年は9月になってから来たんです。帰りは9月15日頃<sup>(95)</sup>ですが、軽井沢<sup>くつかけ</sup>の沓掛<sup>お</sup>の星野温泉<sup>お</sup>に居られる内村先生のところをお訪ねして帰ることにした。その頃上越線はありませんから夜行で直江津<sup>(96)</sup>、長野を廻<sup>まわ</sup>って軽井沢に出た。丁度、榎本誠一君<sup>(97)</sup>のカメラを借りておまして、内村先生の写真を撮りたいと思った。でも撮らして下さいと言ったら「俺<sup>ぐうぞう</sup>を偶像視しやがって」と怒るだろうな、と二人で話していた。すると内村先生が「君、それコダック<sup>(98)</sup>だろう。」とおっしゃる。コダックではないが、携帯写真機<sup>ほう</sup>のつもりでそうおっしゃるのだろうと思い「ハイッそうです。」と言ったら、先生の方から「写真を撮ってくれないか。」とおっしゃる。それはその夏暮らしたその家は由緒のある家だと言うんです。星野温泉の人はその家がゴードン将軍<sup>(99)</sup>が住んだ家だと言う。内村先生はゴードン将軍は日本に来たことが無いので調べたら、グラント将軍<sup>(100)</sup>が来た時、将軍を接待するために日光に建てた家で、それを沓掛<sup>くつかけ</sup>に移したものであることをつきとめた。それで少し得意になられて、玄関で奥さんと二人で並んでいるところを撮れ、しかも後ろに浅間山が見えるように撮れとね。ネガでは浅間山は見えてはいるが薄いので、ただ焼き付けたのでは映らないから、家の所だけ隠して、浅間山<sup>あさまやま</sup>を濃く焼き付けましてね、うまく出来た写真でした<sup>(101)</sup>。それにこれも先生のご希望で、書齋<sup>しょさい</sup>で本を読んでいる所を撮ってくれとね。それが内村先生の最後の写真でした。ただ素人の現像<sup>しろうと</sup>でしたから、顔<sup>わづ</sup>から僅か離れたところに傷がある。それが無かったら全集にも載った写真でした。

—— 先生はそこでご報告なさったんですか。

鈴木 話は聞かない、東京に帰ってみんなと一緒に聞くからとおっしゃって、その日は日曜でしたのでご家族と一緒に聖日<sup>せいじつ</sup>を守って帰京しました。

これは私、あまり人に話さないことですが、ある意味においては、私が内村先生を殺したと言えるんですね。

—— それはどうしてですか。

鈴木 それじゃあその話をしますがね。9月22日から集会が始まりましたから、その報告をしろという訳です。その日、塚本先生の前講<sup>ぜんこう</sup>を止めて私と俊郎君<sup>としろう</sup>が小国伝道<sup>おぐに</sup>

の報告をした。俊郎君は上手に報告したけれど、私は上がっちゃったからあまり上手に報告できなかった。それである方があんな変な話をさせるよりも塚本という立派な後継者があるのだから、それにさせなくちゃいけない。「先生は世界的偉人だから、こういうふうにしななければいけない。」と内村先生に手紙を差し上げた。内村先生は大へん怒られて、その方はそれから集会に出ることを止められ<sup>(102)</sup>、それから塚本先生の独立問題が起こりまして、そのご心労が元で内村先生は心臓を痛められて、亡くなられたのは翌年の3月です。だから私が下手な報告をしたことが先生が早くお亡くなりになる元になったから、だから殺したのは私だという訳で、一人で胸の中に秘めているんですけどね。

その内村先生と塚本先生との間の問題では一番苦しまれたのは内村先生ですね。その次に塚本先生です。それで私共のような側にいた者達は次の次ぐらい苦しんだ訳ですが、何故神様はそんなに苦しませたのかと思いますが、そのおかげで無教会というものが教会にならずに済んだ。そのために与えられた恩恵の答だったのです。

—— そのとき鈴木先生はどんな事をお考えだったんですか。

鈴木 私も塚本先生によく可愛がられていました。ギリシャ語を教えるお手伝いをするし、塚本先生はダンテの研究では日本一の方で、私もダンテを読みたいためにイタリア語を勉強したぐらいでダンテ研究家として尊敬しました。それに無教会的な信仰を内村先生よりもハッキリと塚本先生に教えられたと思うぐらいでした。「法王も何もいらない、人間は神様だけに頼って立派な信仰を持つことができる。」と内村先生よりもハッキリ教えて下さった。その塚本先生が、内村先生から分離する際に、私達をご自分のほうに、「来い、来い。」とおっしゃる。神様だけに頼れとあんなに良く教えて下さったのに、悪く言えば神様と私との間に塚本先生が入るような形になる。私にとってはこの事がショックでした。私は塚本先生の所に行かれた人々の事を批評はしませんし、それにはそれぞれ意義があると思います。でも私は塚本先生の所のお手伝いをすることを辞退し、自分でひとり立って歩こうと考えた。

—— 一時は塚本先生の方に集まる人の方が多かったそうですね。

鈴木 婦人では多かったですよ。

12月に、クリスマスの集会が済んでから内村先生のところに遊びに行った。先生はお加減がよくないようなので、私も遠慮しようと思いましたが、奥さんが「気のおけない人と会うほうがいいんたから。」とおっしゃって。その時に内村先生がおっしゃったんですが、塚本先生の集まりに出るようになった女子の会員が、無断で退会

しないで挨拶<sup>あいさつ</sup>に来て、皆が同じように「あるものを掴<sup>つか</sup>ましていただきまして有り難<sup>ありがと</sup>うございます。」<sup>(103)</sup>と言った。福音<sup>ふくいん</sup>を伝えたのに、あるものを掴<sup>つか</sup>ましていただいと云うのでは内村先生はご不満だったでしょう。

—— それはクリスマスの後のお話だそうですが、その年のクリスマスはどんな。

鈴木 帝大聖書研究会は例会を毎月大学の御殿<sup>ごてん</sup>と称する集会所でやっていたんですが、クリスマスの月だから、ひとつ柏木<sup>かしわぎ</sup>でやって内村先生にも出てもらおうということになりまして12月20日にしました。その幹事役を私と湯沢君<sup>ゆさわ</sup>がすることになって、内村先生は青梅街道<sup>おうめ</sup>の「鳥繁<sup>とりしげ</sup>」という店の親子丼がお好きだとの事で、それで会食することにして注文しておいたが、なお確かめる<sup>ため</sup>為に「鳥繁<sup>とりしげ</sup>」に寄ろうとして新宿からお菓子と果物の箱を湯沢君と二人で持って柏木<sup>かしわぎ</sup>まで歩いた。雨がどしゃ降りだね。私はゴム長靴というその頃出始めたものを履いておりましたからそれ程でもなかったが、湯沢君は普通の革靴<sup>かわぐつ</sup>でしたので、かなりぐしゃぐしゃになっているんでしょう、私の後ろから声をかけて「鈴木君、僕はほかのどんな先生のためにもこんな思いはしないよ、内村先生のためだからするんだ。」とね。もうじき博士<sup>はかせ</sup>にもなろうという湯沢君<sup>ゆさわ</sup>がね。

—— 結核研究所の所長になった湯沢健<sup>ゆさわけん</sup>さんですね。

鈴木 その時の会には床<sup>どこ</sup>に就<sup>つ</sup>いて居られて内村先生は出られませんか。矢内原<sup>やないはら</sup>先生だけが先生<sup>あいつ</sup>に会ってご挨拶<sup>あいさつ</sup>申し上げた。その後23日に柏木聖書研究会<sup>かしわぎ</sup>のクリスマスがありまして、そのあと私が訪ねたのが先程の話です。

—— 塚本先生は大へん優<sup>すぐ</sup>れたお弟子でしたが、それだけに何か内村先生の心臓には大きな負担<sup>ふたん</sup>がかかりましたですね。

鈴木 それに鋭<sup>すど</sup>く無教会の問題を徹底させました。塚本先生と論じませんでした。塚本先生はカトリックが「教会の外に救いなし」と言っているのに対し、「教会の外に救いあり」と言いまして、教会外だけに救いがあるように言っておられた。無教会でなければだめだというと「無教会」という教会を作ることになる。このことを数学的に考えるとハッキリします。地球上に円を描くと、円の内と外がはっきりしているようですが、円を大きくして行って大円<sup>だいえん</sup>になると、それからは内<sup>ほう</sup>の方が外より大きくなって内外がわからなくなりますね。だから内も外も同じなんです。それで数学では境界に沿って動いて右側を内にする、というように約束で区別します。ですから

救いは教会の外にだけあるというのは、教会の内にだけあると言うのと同じで、間違いです。つまり内と外という区別をはっきりつけることは結局別に一つの教会を作ることになるんですね。どうも法律的理論で科学的な理論でない点を残念に思います。

—— 科学的理論と法律的理論の<sup>たんでき</sup>端的な違いはどういうことですか。

鈴木 十分に真理を検討しないという事ですね。どうしても法律学ですと少しぐらい真理から<sup>はず</sup>外れていてもそのまま通るものですから真理に対してあまり<sup>えいびん</sup>鋭敏にならないが、自然科学の<sup>ほう</sup>方は真理から<sup>はず</sup>外れていると機械も動かず、実験も成功しませんから真理に従うことを真剣に考える、それによって理論もよくなります。ですから比較的<sup>ほう</sup>に理科の方に信仰を持っている人が多い。

—— その頃<sup>まさいけ</sup>政池先生はどうな<sup>お</sup>さって居られたのですか。

鈴木 <sup>まさいけ</sup>政池は卒業後二年水産大学の前身の水産講習所の講師をしておいて、1928年（昭和3年）に静岡高等学校教授になり静岡へ移りましたが、何かという<sup>お</sup>とよく東京へ出て参りました。

—— じゃあ先生とご一緒<sup>おぐに</sup>で小国にいら<sup>お</sup>っしゃったのはほんのわずかですね。

鈴木 ですから小国<sup>おぐに</sup>へ私と来たのは1928年（昭和3年）と1932年（昭和7年）だけです。

—— ひろ先生の紹介を受けたのはその頃ですか。

鈴木 1930年（昭和5年）12月に高等師範の受験のための生徒を連れて上京して<sup>かしかぎ</sup>柏木青年会のクリスマスの集会に出たものですから。

—— そこで<sup>まさいけ</sup>政池先生からの紹介があったんですか。

鈴木 それは内村先生の集まりに、ひろは学生の<sup>ころ</sup>頃出ていたわけですから顔はちょっとは知っていた。でもよくは知らなかったから「あれは君の妹か」と聞いたら「そうだ」と言うことだった。前から結婚の話はあったんですが、私自身は知らないで<sup>お</sup>居りまして、その気もなく<sup>お</sup>居りましたが、それから話が進みまして翌1931年（昭和6年）4月3日に名古屋さん<sup>(104)</sup>の<sup>なこうど</sup>仲人、山本泰次郎君<sup>(105)</sup>の<sup>たいじろう</sup>司式で結婚した。

—— 内村先生がご存命なら<sup>(106)</sup>、先生はよろこばれて、司式もしていただけたところでしょうが。挙式はどこで。

鈴木 東京駅前の工業クラブ<sup>(107)</sup>でね。その頃では一番ブルジョア<sup>(108)</sup>的なところでしたね。

ひろは3月で学校の方を辞めて、母と二人で広島から静岡の政池のところに移って居りました。

—— その頃先生が住んで居られたのはヴォーリズさんの設計のヴィラ風の家ですか。

鈴木 東京のその家は売って1925年（大正14年）にそれより小さな家を作って住んでいた。それが世田谷の代田に今でも残って居りましてね。私がある頃考えて植えた樺の木ですが、夏は日陰を作り、冬には陰にならないようにとね。それが大きな樹だったので都条例でむやみに伐ってはいけない木に指定されているんです。

—— それはどのあたりですか。

鈴木 小田急の世田谷代田駅の近くで、周りは雑木林だったんです。駅まで行くのに落葉を踏んで行ったものでした。1933年（昭和8年）にはその家を売って、東中野の方に移り、私だけ12月に小国に移り家族は翌年小国に移った。

—— ではひろ先生は1931年（昭和6年）、1933年（昭和8年）、1934年（昭和9年）と住まいが変わりましたね。政池先生も鈴木先生と同じ頃の結婚ですか。

鈴木 政池は1932年（昭和7年）です。政池の姉（奥様）はひろの友だちで二年先輩の同室だったので、ひろが話して、政池にすすめたんです。1932年（昭和7年）の4月6日に結婚しました。その夏、私と政池とが小国に来た。その時小国で平和の話かなんかしたんだらう、と校長に言われて、「しました。」と言ったら「官立学校の教師がその国の施策に反対のことを言うのはよくないから、その方を止めるか学校を辞めるかどちらかにしてほしい。」と、それなら学校を辞めますとね。しかし来年の3月までいないと生徒が困るから、とそれまでいて、3月に辞めて、7月に東京に来た。西田町<sup>(109)</sup>という荻窪駅の近くに初めは住んだ。山本泰次郎君<sup>(110)</sup>が体を悪くして鶴沼<sup>(111)</sup>の実家の方に行かれた留守の間だけ政池はそこに住んで、山本君が良くなっ

たので、今の本天沼<sup>ほんあまぬま</sup><sup>(112)</sup>に移った。

—— その頃政池先生<sup>まさいけ</sup>はすでに独立伝道をなさって居<sup>お</sup>られたんですか。

鈴木 東京に来て、とりあえずは本を書こうと、「リヴィングストーン<sup>(113)</sup>伝」を書いたんです。あれは俊郎君<sup>としろう</sup>（鈴木）がリヴィングストーン<sup>ぼつご</sup>没後百年だから記念に何かしようと発案されて、それじゃあ政池君<sup>まさいけ</sup>にやってもらおうとね。

—— 政池先生<sup>まさいけ</sup>は必死の覚悟で書かれたのですね。なんでも月 200 円が高等学校の給与だったとかで。

鈴木 だから内村先生<sup>さんべんがし</sup>は三遍餓死する覚悟をした<sup>(114)</sup>から、三遍餓死する覚悟をして欲しいと言って結婚したそうですから。結婚してすぐ静岡高等学校<sup>や</sup>を辞めた。1932 年（昭和 7 年）の 4 月に結婚して、8 月に小国<sup>おぐに</sup>に来て問題を起こし、1933 年（昭和 8 年）の 3 月に辞めたんですからね。

—— 小国<sup>おぐに</sup>で問題の話<sup>や</sup>をなさったとき、鈴木先生はご一緒だったんですか。

鈴木 別にそうたいして問題じゃなかったんですがね。農民運動<sup>(115)</sup>家たちと同じ旅館<sup>ぐうぜん</sup>に偶然泊まり合ったものだから同じ仲間だと思って警察が静岡の学校<sup>ほう</sup>の方に身元調査をした。政池<sup>まさいけ</sup>が高等学校教授なんて偉い人かどうかというようなことでしょう。

—— お仲人<sup>なこうど</sup>は名古屋さんですね。

鈴木 私の場合は名古屋さん<sup>なこうど</sup>に仲人を頼んだんですが、政池<sup>まさいけ</sup>の場合は名古屋さんが熊本まで行って申し込んでくれたんで、ほんのお仲人<sup>なこうど</sup>ですね。

—— ご卒業後先生はどんなご予定だったんですか。

鈴木 1926 年（大正 15 年）3 月に理学部物理学科を卒業しましたが、その頃は理学部出の就職口は少なかったんですがボツボツ求人があった。しかし、聖書の勉強をすることにしていましたから、みな断わって、近江兄弟社<sup>おうみ</sup>の仕事を手伝うつもりでおりました。創立者のヴォーリズさんとは 1921 年（大正 10 年）頃に私が家を建てるためにヴォーリズ建築事務所をお訪ねして以来のお付き合いなんです、ヴォーリズさん<sup>ふくいん</sup>の福音的な働きに心をひかれておりまして、先生が東京に出られる時などはいつもお

会いしておりましたから、すぐにも手伝いに行くつもりだった。しかしちょうど先生は米国アメリカに行って留守るすでしたから、お帰りになるのを待って、夏中、軽井沢で兄弟社の人達と一緒に暮らし9月から近江おうみへ行ったんです。近江兄弟社で三ヶ月間働かしまして、11月末ちゆうへいに徴兵のため東京に帰りました。12月1日に入営で、十ヶ月制度の初めでしたが、大学の時にたった一週間軍事教練を受ければ十ヶ月で除隊になるわけです。

—— あれはなんと仰いましたかね。

鈴木 入営した時は一年志願兵でしたが、途中から幹部候補生と変わりましたね。1927年（昭和2年）9月に帰ったわけですが、父が1919年（大正8年）に亡くなってから義兄ぎけいが家業を継いでいてくれましたが、召集の間に家の事情が変わったものだから、休暇をもらってヴォーリズさんを訪ねた。今までは給料を貰もらわなくともいいから手伝うと言って居りましたが、家族を養やしなわなければならないので除隊したら給料を貰もらえる仕事をさせて下さるよう相談に行った。丁度ヴォーリズさんが琵琶湖びわこの北ほくの方まで伝道に行かれるところに同行いたしましてね。いろいろお話ができた。そのとき洗礼の話が出まして、洗礼を受けること自身は悪いとは思わないが、兄弟社への就職のために洗礼を受けるのはおかしいと思って、別に働こうと思い、「それでは私、東京に帰りましょう。」ということになった。除隊した時には東京に帰り、内村先生の集會に出るようになったんです。

それから大学に行って就職の口を世話してくれと申しましたら、「聖書の勉強はどうする。」と言われる。「勉強しますが、働かなくてはならないようになったから世話して欲しい。」「お前のような者は、ほかで使もちって貰もらうわけにはいかないから、大学で使もちってやる。」というわけで1928年（昭和3年）5月から大学の物理学教室つとに勤めた。

—— 助手ですか

鈴木 ええ助手という職名は大学に残る正式な職制でしたから、ちゃんとした給料で、その頃百円もらっていました。大学を出たばかりの青二歳のくせに、部屋一つもらって用が無ければ上の先生にも会いもしないで、仕事をして帰るといような、ずい分ぜいたく贅つと沢な勤めをしていたんです。

—— どんな勉強をなさったんですか。

鈴木 聖書の勉強をしますと初めから言っておりましたから、仕事は数学物理学会の

仕事で、英文の論文雑誌の編集などです。でも物理の教室に居りましたのでよく学問上の輪読会<sup>りんどく</sup>(<sup>116</sup>)などにも出まして、おかげで物理学の進歩にもついて来ることが出来ました。



#### 8-1-4 小国に住む

—— 大学を 1932 年（昭和 7 年）にお辞めになって伝道を志されたのですが、そのあたりのご心境を。

鈴木 内村先生は講演と「聖書之研究」という月刊雑誌とで伝道された。そしてそれによって教会にも行かず、雑誌を毎月読んで立派な信仰を持った人が沢山居りました。内村先生は雑誌による伝道という、今まで誰もしなかった事をなされた。私も先生の真似をして、そういう事をしてもいいんですが、私は内村先生の独創的なところを真似るべきだと思った。もう一つ先生は教育をやろうと随分考えておられた。米国から帰って方々の学校で教師をなされた。しかし長く居れない。どうしてもほんとうの教育をしようとするとうちと学校当局と衝突しなければならなくなった。それで結局著述で伝道なさるようになったわけですから、一つ私は内村先生がやりたくてもおやりになれなかった教育を通して伝道しようと考えたんです。それから信仰の母体が教会ですと、教会に信仰がなくなった場合に困るんですね。中世のヨーロッパの教会はそのため非常な害をしました。信仰のなくなった教会はほんとに困ることになりますから、学校を信仰の母体にするということは非常に意味があると思いました。つまり、キリスト教は真理である、学校も真理なる学問を教えて教育する。だから真理を求める学校が、同じく真理であるキリスト教の伝道にはふさわしいと考えたわけです。

—— それで先生は農村に入って学校をやろうとお考えになった。

鈴木 そうですね。山の中の人でも勉強すれば教養や学識のある人に負けずに信仰を持っていけるということを実証したいとね。そして信仰は普通牧師や偉い先生の指導を受けて、はじめて保っていけるものだと考えがちですね。しかし誰でも直接神に従えば立派に信仰を持っていけるんだというのが内村先生の信仰の真髓ですから、そういう意味でどんな人でも勉強でき、一人で信仰を持っていけるような学校を信仰の母体にしようね。信仰の一つの在り方だと思って始めました。

—— 内村先生のあとに従うことのほんとうの意味を考えられたわけですね。

鈴木 私、リンカーンのゲティスバーグでの演説が好きでね、国民墓地の献納式で語ったんですが、ゲティスバーグの戦闘は歴史を作ったばかりでなく、優れた文学をも作ったと言われるほどの名演説なんですね。

『(前略) ここで戦った人々がこれまであのように気高くも進めて来た未完成の事業が私達の前に残っている。むしろ私共こそ、残された大きな課題に身を献げるべきなのです。その課題とは、これらの名誉ある戦死者が、その最後の力の限りをつくして献身したその目的のために、彼らから引き継いで、それにもました献身をすることです(後略)。』

この演説は僅か二分間の短いものでしたが、リンカーンはその草稿をゲティスバーグに来る途中で書いた。それもメモかなんかに。このリンカーンの前に国務長官をやったことのある雄弁家で名高いエヴァレット<sup>(117)</sup>が二時間にわたる大熱弁をふるって聴衆を圧倒した。その後立って短い、調子の低い演説でしたから、リンカーン自身も失敗したと思った。ところが翌日になって新聞は、エヴァレットの話より、何よりリンカーンの言葉を大きく取り上げて報じた。今ではそれが英文学<sup>(118)</sup>でも重要な偉いものとなった。

内村先生が、どんな人でも信仰を持つことができるということを明らかにして下さったんだけど、どうも内村先生のお弟子さんは学問のある方が多く、教養の高い人でなければ信仰を持てないと思われがちですから、そうでないことを実証することが私共に残された課題だと思ってね。それからリンカーンの言葉で「神様は凡人がお好きに違いない、だからこんなに沢山凡人をお作りになったのだ。」というのがありますが、内村先生の文章の中にリンカーンの言葉として出ていましてね。如何にもリンカーンでなくちゃ言えないような言葉ですからいつか原文と、そしていつ、どこで述べたかを知りたいと思っています<sup>(119)</sup>。私の好きな言葉ですから。この言葉によるとナポレオンやアインシュタインの様な人は出来そこないで私達みたいな平凡な人間の方が神様の会心の作だということになります。

—— 内村先生の志<sup>こころざし</sup>を継いで実際に小国<sup>おぐに</sup>に移住なさったのはいつ頃ですか。

鈴木 1932年(昭和7年)12月から1933年(昭和8年)の1月にかけて、初めて雪の小国<sup>おぐに</sup>を訪れました。それで叶水<sup>かのみず</sup>に移住することに決めて、土地を買い、家を建てる準備をしました。

—— 叶水<sup>かのみず</sup>にお決めになったのはどういうことで。

鈴木 小国<sup>おぐに</sup>のほかの所はみんな青年や子供たちが知り合いましたが、ここは渡部弥一郎<sup>やいちろう</sup>さんと山崎<sup>やまざき</sup><sup>(120)</sup>の渡部久エ門<sup>わたなべきゅうもん</sup>さん<sup>(121)</sup>など大人に知り合いができたこと、どうせ小

国なら、町に近い所より山の中の方がいいと思ひましてね。建物は市野々に大工さん所有の建てかけのもので、そこが用水路の水の上なので汚すからと建築に反対されておったものを買って移築したんです。翌 1934 年（昭和 9 年）9 月に献堂式をして基督教独立学校を創設しました。

— ひろ先生はどういう所にいらっしゃるかお分かりでしたか。

ひろ どういうところか知りませんでしたけれど、私、あまり世の中を知らないから雪国といえはこんな所だと思ひだけで、よそと較べることがないんですから。米沢のかたなどはここを山奥の文化のない仙境<sup>(122)</sup>のようで、人の行くところでないように思ひていたらしい。

鈴木 私がはじめて来た時には手の子駅<sup>(123)</sup>まででしたが、ひろが来たときには沼沢駅まで、翌年に小国まで開通し、伊佐領駅ができた。

ひろ 私たちは昭和 9 年 5 月に、和子<sup>(124)</sup>が五ヶ月でしたが老母と一緒に来た。沼沢駅で降りて渡部伊佐次さん<sup>(125)</sup>に迎えられて、沢中<sup>(126)</sup>で泊まって、翌日叶水に着いた。その年は大雪でまだ道に沢山雪が残っていました。桜峠を越えて山道を歩いたんですが、その頃の道は人が歩くだけの道でしたから道の悪いところは主人が母をおんぶして荷物は馬の背に乗せて歩いた。その年は雪が多く、その年からずっと終戦まで雪が多かった。4m は普通で 5m も降ることがあった。伊佐領からの道は、駅ができてからリヤカーの通れるほどの道が出来た。その前はほんとうに人だけが通る山道に登ったり降りたりして、中の橋<sup>(127)</sup>を渡らないで、手前で山の間を通過して箱の口<sup>(128)</sup>に抜ける山道でした。

— ウルを出たアブラハム一家<sup>(129)</sup>のような思ひでしたでしょうね。

ひろ そんなに深刻にも考へませんでした。

鈴木 でも普通の移住は経済的移住ですが、私どものは経済的移住でなく信仰的移住という点ではね。

ひろ 都会の人が来るのには儲けが目的だと思いますからね。でもそうでないことがだんだん分かって来た。さっぱり儲けがないんですからね。

鈴木 ついでに村の人も儲けさせてもらえるだろうと思っていたが、ちっとも儲けにならないものだからね。

—— 先生が発電なされた電力は村の人に分けてあげたんですか。

鈴木 分けることは出来なかった。つまり低圧ですから、変圧しなければ太い電線が長くいるわけで費用がかかり過ぎる。だから自家用だけに使った。ペルトン水車<sup>(130)</sup>を自分で設計して、山形の鉄工所に作ってもらったんです。いまも橋の近くに 1m 四方のコンクリートの水槽の跡<sup>(131)</sup>が残っています、そこから水をパイプで地下室に引き込んでノズルを四つ付けた。風変わりなペルトン水車が出来ましたが電力は使えた。発電機はむろん買ったものです。

—— 電灯も無い村に発電は画期的なことでしたね。

鈴木 初めから精神的な問題や魂<sup>たましい</sup>の問題で来たんだと言っても分からない。私たちの仕事が産業の発展の基<sup>もと</sup>にでもなるかと、村の人の期待もあつたろうが、そうはならなかった。でも初めはそうしようと考えた。村の人は炭焼きをやっていましたから、炭焼きより、その豊富な材料を使って木工がいいと思った。動力に水車を使えば炭を焼くよりも経済的に有利ですから、初めはお椀の木地<sup>(132)</sup>を作った。

—— 関山<sup>(133)</sup>の大江さん<sup>(134)</sup>もその頃でしょうか木工をなされたことがある。

鈴木 ここの機械を一部大江さんに譲<sup>ゆず</sup>ったんです。大江さんが糸巻を作ることを考えたから、私も教えてもらって糸巻を作って出荷した。いい物を作ることは難しい、いい売り先を見つけることも難しい、ちゃんと代金を取ることも難しい話で、士族の商法<sup>(135)</sup>よりまだ下手な学校の先生の商法ですから、なかなかうまくいかなかったんです。でもそういうことはやれなくとも、教育の方<sup>ほう</sup>をちゃんとやっていけば学校経営はやれるんです。

—— 初め生徒は何人ぐらいですか。

鈴木 二人か三人でした<sup>(136)</sup>。いまから 40 年前の山村<sup>さんそん</sup>といえ、誰も勉強する者は居りませんから、雇<sup>やと</sup>った人に教えるという形で授業料など出せない人を入れるわけです。

—— まず授産<sup>(137)</sup>的な仕事と教育ですね。

鈴木　そうです。機械を設備することにより、仕事が楽に沢山<sup>たくさん</sup>できるようになる。普通の場合のように機械など設備投資に対する利潤<sup>りじゆん</sup>をみなければ、半日働いただけで一日分の給料を出せる。それで半日勉強し、半日働いて一生勉強できるような、そういうシステムにしたいと始めた。

—— 独立学校の「独立」の中には経済的独立も含んでいますね。

鈴木　内村先生の考えですが、経済的独立をしなければ思想的・信仰的独立はできない、と。それは確かな事ですね。どんなしっかりした人でも自分の考えを経済的事情にひかれて決めてしまうような事になりかねない。

それから日本のある社会主義者がイギリスに行ってワット<sup>(138)</sup>の像を見て考えた。蒸気機関やアークライト<sup>(139)</sup>の紡績<sup>ぼうせき</sup><sup>(140)</sup>機械が発明されて、産業革命が起こった。しかしそれによってかえって労働者に苦しみを与えることになってしまったのではないかとね。それらが発明されて人類に便利をもたらし、人間全体が楽になり、働く時間を少なくし、余った時間を教養のために使うようになればいい。しかし実際はそうならず、少数の人が儲<sup>もう</sup>け、大部分の人がかえってそのために苦勞するようになったと非常に考えたということが書いてあった。機械によって、人間が幸せになれるならよい、しかしそれを資本家が自分の儲<sup>もう</sup>けに悪用して品物を無分別に大量に作って儲<sup>もう</sup>ける。利益本位に考えるようになったので機械の発明はかえって害を及ぼした。機械によって無駄<sup>むだ</sup>を省<sup>はぶ</sup>き、生活のために働く時間を少なくし、それで余った時間を自分の教養や信仰を高めることに使わなければならない。だから信仰を持って仕事をするのがほんとうで、ただ儲<sup>もう</sup>かる仕事をするのでなく、世のためになる事を考える、自分の金がたまったら勝手に使わず、良い事のために使うという事になれば、下手な共産主義統制経済<sup>(141)</sup>よりも良くなりますからね。いまは儲<sup>もう</sup>けることを目的にやるものだから、いくら統制してもその裏をかいて儲<sup>もう</sup>けることを考えるようになって世のためにはならないで、一部の人が儲<sup>もう</sup>け、大部分の人が苦しむ経済になってしまう。

—— 機械を人間がどう考えるかという基本的な考え方の反省ですね。

鈴木　機械化貧乏ということで機械化してかえって困っている。機械を売る方も、売り上げを上げることを考えるだけで、わずかなところを変えては新型と称して需要をあおる。経済的独立ができないと、その経済的事情に引きずられてしまいます。ですからこの学校の運営では借金をしないということが大事なことになっている。ところが多くの私立学校は借金をして施設を増やし、借金が平気になっている。また銀行も

学校には貸すんです。それで経済的独立によって人間的なものに頼らないで神に頼っていく。

—— そして学園は神に頼らないではやって来れませんでしたね。

鈴木 みんな常識に反対の事ばかりやっていますからね。

—— 学校をもう少し雪の少ない所に、町に近い、周辺の人口のある所にと考えますが。

鈴木 <sup>や ない はら</sup> 矢内原先生もヒンターラント<sup>(142)</sup>がなければためだと心配しておられましたが、今は日本中がヒンターラントになりましたからね。

—— 先生は学校の立地を<sup>あ</sup>取えて困難なところにとお考えになられたんですか。

鈴木 いいえ、そうじゃなくて、かえってこういう所の方が<sup>ほう</sup>楽だと思ったんです。

ひろ でももともと<sup>せんきょう し</sup>宣教師の伝えたキリスト教が入っていない所に<sup>ふくいん</sup>福音を伝えたいという内村先生の意志を継ぐためですからね。

—— 離れた所<sup>(143)</sup>に山をお買いになられたのは。

鈴木 売り手があったので山を買った。学校のために必要な投資だった。離れていたがやがて交換したんです。<sup>おぐに</sup>小国に私財を移した。移せるものはね。だから残りのものが時々売れましてね。金が無い時に入って来たりして助かった事がありました。一昨年も洪水で荒れていた土地がサイクリング道路を作るということで売れて、和子のヨーロッパ旅行に使いました。

—— 和子さんは<sup>かのみず</sup>叶水小学校に入学なさったわけですが、<sup>ふくしき</sup>複式<sup>(144)</sup>の授業でしたか。

ひろ 和子は<sup>ふくしき</sup>複式ではないんです。和子の前の学年は<sup>ふくしき</sup>複式でしたが、和子の学年から人数が増えたんです。その後一学年 30 人位で続いたのは近くの<sup>こうざん どうざん</sup>鉾山が銅山だったので<sup>おおじ かけ</sup>戦争で大仕掛なものになって、<sup>こうざん</sup>鉾山で働く人が<sup>よ そ</sup>他所から来て、その子どもたちが入って来たからです。小学校を卒業すればどこかの寮に入って進学しなければなりませんから、<sup>よねざわ</sup>長井や米沢の寮よりは<sup>ほう</sup>東京の寮の方がと、<sup>けいせん</sup>恵泉<sup>(145)</sup>にやりました。恵泉の<sup>けいせん かわい みち</sup>河井道

先生<sup>(146)</sup>は戦争が始まる時に戦争を阻止<sup>そし</sup>するために、アメリカに賀川<sup>かがわ</sup>さん<sup>(147)</sup>など  
行かれたんですね。私達は戦争反対主義ですからそれに惚<sup>ほ</sup>れて入れてもらったんです。

鈴木 なによりも当時教会が戦争に賛成して、軍に飛行機<sup>けんのう</sup>の献納<sup>けんのう</sup>をやった時に、そう  
いうことはしませんでしたからね。

8-1-5 応召<sup>(148)</sup>

—— 先生の応召<sup>おうしょう</sup>の頃の独立学校は。

鈴木 糸巻を作ったあとに東京の友人が心配してくれましてね。松前重義さんですか、電線の工場に知り合いがありまして、細い電線を巻くりールを作ることをご勧めしてくれました。いい物さえ作れば売先の心配もないし、金の取れない心配もないからということでごそれをするにしていましましたが、試作してこれでいいというときになって日中戦争<sup>(149)</sup>が始まり、1937年（昭和12年）9月に応召<sup>おうしょう</sup>しましたから、学校も開店休業のようになってしまって、1943年（昭和18年）9月まで6年以上も応召<sup>おうしょう</sup>しておりました。けれど家内が留守を守ってくれたので、福音の旗を降ろさないで済みました。

—— 戦地へ行かれたのですか。

鈴木 東京におりました。技術将校として航空本部監督官という仕事をさせられていました。軍人というのはバカなものでしてね。日本の工業力を三倍に勘定<sup>かんじょう</sup>していたんです。つまり、陸軍の砲兵<sup>ほうへい</sup>工廠<sup>(150)</sup>でみたものと、航空本部でみたものと、海軍でみたものと、一つのを三ヶ所でみていたものですから三倍に勘定<sup>かんじょう</sup>していたわけです<sup>(152)</sup>。いざ戦争してみたら工業力が足りないことがわかって、慌てて技術者をたくさん召集した。

—— 先生の兵科<sup>へいか</sup><sup>(153)</sup>は何だったんですか。

鈴木 いちばん初めは砲兵<sup>ほうへい</sup>です。砲兵少尉<sup>ほうへいしょうい</sup>から砲兵中尉<sup>ほうへいちゅうい</sup>になって、中尉<sup>ちゅうい</sup>の間に三度名前が変わった。砲兵<sup>ほうへい</sup>でありながら航空の仕事をしておりましたから航空兵中尉<sup>ちゅうい</sup>になりましたね、それから航空技術将校の航技<sup>こうぎ</sup><sup>(154)</sup>中尉<sup>ちゅうい</sup>になった。

軍隊の中ではバカなことを感心するものでね。「うちの上官は偉い。」という。内容を確認しないで押す印章<sup>(155)</sup>の押し方がうまい。たくさん書類を押すとだんだんうすくなるので、ひと目で内容を確認せずに押した印章とわかる。だがうちの連隊長は一ぺん一ぺん朱肉<sup>しゅにく</sup>をつけて押していく、だから偉いとね。役所は形式主義ですが、軍隊がいちばん形式主義でした。ですから師団長の検閲<sup>けんえつ</sup>があると補佐官が来て、いろいろな所を見て講評する、その時に「命令簿<sup>ぼ</sup>に印もれがある」と言う。命令簿<sup>ぼ</sup>を読まない者があるからいけないと言って講評するならいいが、そうでなく印もれがあると



言う。命令簿<sup>ぼ</sup>を読まなくとも印<sup>いん</sup>さえ押しとけばよいと言っている。そんなおかしな講評があったんです。

学校でも卒業式を卒業証書授与式<sup>みぎそうだい</sup>と言う。右総代<sup>(156)</sup>で渡していたが、それではいけないと言って近頃は一人一人に渡していますが、いくら一人ずつ渡しても形式的であることは同じですね。だから学校は学力をつける所ではなくて学歴をつける所になってしまった。

軍隊の中にいる間、こんどの戦争は日本の方が悪いから負ける、と言っていました。将校の間では、そういうことは分かっていますから、そういうことを言っても問題はなかった。

—— 良心的兵役拒否<sup>へいえき</sup><sup>(157)</sup>についてはどうお考えですか。

鈴木 良心的兵役拒否<sup>へいえき</sup>と言っても、戦時には直接戦闘でない様な、つまり病院の仕事などをやらせる、だから同じことなんです。ただ自分は良心に従うということでスタンドプレー<sup>(158)</sup>をやりやすい。内村先生が齋藤宗次郎さん<sup>(159)</sup>を戒<sup>いまし</sup>めたのもその意味ですね。一種のスタンドプレーをやるような意味でやってはいけないとね。だからすべて分かってから君がほんとにやろうと思ってやるんならやりたまえとさえ内村先生はおっしゃった。

—— スタンドプレーとは先生のおっしゃる信仰の英雄になるなということですね。

鈴木 とくに偉いことをしてるぞ、とそういう意味でね。それはまたファリサイ<sup>(160)</sup>的な考えにもなるんですね。つまり断食<sup>だんじき</sup>を年二回するところで、毎週二回やって百回以上やっているから偉いと思う<sup>(161)</sup>。ですから同じ気持になってしまいますからね。ですから私は兵役については徴兵令<sup>ちようへいれい</sup>には日本人として従う義務があるから従う、けれどもそれより高い法律に抵触する場合には従わない。だから徴兵<sup>ちようへい</sup>には出るが、人を殺すということはしない。だから敵に向かって鉄砲を撃て、大砲を撃てと言ってもそれはしない。それを明らかにして後方の仕事をした。とにかく敵に向かっては大砲を撃たないとね。だから撃たないと困るような地位につければ、地位に命じた人が悪いんだからね。

—— 先生がそういう態度をとられたら上官はどういう対応をしましたか。

鈴木 私のそういうことは承知していましたから航空本部監督官のような仕事をした

わけです。実は後から平山清さん<sup>(162)</sup>に聞いたんですが、あいつは少し反戦だから、必ず戦死するような所にやった方が<sup>ほう</sup>いいという話があったそうです。私の上官は菊地という少佐で私をかばってくれました。その人が東大久保の平山さんの近くに住んでいまして平山さんに話したのです。

—— でも生きてお帰りになりましたね。<sup>こんにち</sup>今日の社会はみな有機的<sup>(163)</sup>にすべての人が関係していますから、たとえ軍隊に入らないでも戦争にかかわってしまいますね。

鈴木 国家総力戦ですから、日本の国に生きているということが何らかの形で戦争に参加しているようになりますから、<sup>ちょうへい</sup>徴兵を拒否しただけで国家の罪悪から逃れることはできませんね。だから無理に<sup>ちょうへい</sup>徴兵を拒否しないで、とにかく自分の信念の通るように「人は殺さない」と私は神の与えた法律<sup>ほう</sup>の方を<sup>いっそう</sup>なお一層高いと思うから「殺すなかれ」<sup>(164)</sup>というのは守る。それに抵触しない範囲では<sup>ちょうへい</sup>徴兵でもなんでも従う、そういう態度<sup>へいえき</sup>を兵役に対する態度にして通して来ました。

## 8-1-6 入獄

—— 反戦なんでしょうが、どういうことで警察に連行されたんですか。

鈴木 軍部の中ではそういうことを言っても問題はなかったんですが、特高の方は帰還軍人の動静<sup>(165)</sup>調べをよくやりましてね。軍人が戦地から帰って来て、ほんとうのことを言うと困る、日本は悪いことをしているし、負けそうになっているということが国内の人にわかると困るから、ほんとうのことを言うな、といって帰還させるわけです。それをその通り守っているかどうかを特高が調べるのですが、私のところにもやって来た。そんな時に特高の人に説教してやる必要はないと思いましたが、調べに来たのが「私はクリスチャンです。」と言いまして、その頃の県警察の長老株にクリスチャンの長岡万治郎さん<sup>(166)</sup>が居りまして、その方に教えられて信仰を持っていると言うわけで、信仰を持っているならほんとの事を知らないのは気の毒だから「こんどの戦争は日本の方が悪いから日本が負ける。」と言ってやったんです。さすが青い顔をして帰りました。

—— どういう容疑ですか。

鈴木 「治安維持法違反被疑」でした。弥一郎さんも同じです。それは私の前に新庄<sup>(167)</sup>に雪害調査の機関があって、その調査官が共産主義の人で、それを発見して特高がいろいろ話をして転向させたんです。だから特高は手柄を立てたわけで、なんとかこの伝<sup>(168)</sup>で叶水のキリスト教もやろうという意気込みだった。その調査官は私が行ったとき、同じ監房の中に囚われていました。京都の出身でしたね。

ひろ 容疑はあったわけですが、憲兵<sup>(169)</sup>が主人を連れて行きそうになったから、その前に警察が逮捕したんです。

鈴木 そう言うのは向こうの言い訳ですね。憲兵の調べは非常に厳しいからそうさせないように特高ですというのですが、私はむしろ憲兵の方がいいと思っていた。憲兵なら私は上官だから、私のキリスト教の信仰を非難するならば、軍人に賜うた<sup>(170)</sup>勅語<sup>(171)</sup>を暗誦してみろと言います。「朕が上天<sup>(172)</sup>の恵みに応じ祖宗<sup>(173)</sup>の恩に報いまいらせることを得るも得ざるも汝ら軍人が、云々。」と書いてある。明治天皇は「上天の恵みに応じ」と言っている、その上天を信じているので、神を信じるのが悪いことではない。軍隊に居る間にも「キリスト教はいかん。」ということと言っ

てくれれば、そう言ってやろうと思っていたのに、軍隊の中ではそういうことは言わないですからね。

—— 警察でも先生にはいんぎん<sup>(174)</sup>であったとか、獄中証言などを読むと先生のお人柄からだと思えますが。

鈴木 ていねいでしたね。長岡さんの関係もあった。でもだいたい日本も私の言う通りになりましたからね。私が行ってからサイパンが陥ち、東条が辞めました。

ひろ 無教会の人が捕らえられる前にホーリネスの人<sup>(175)</sup>が捕らえられ、米沢から来ていた女の牧師さんでしたが、とてもいい人で警察の人がついに敬服していたということで、主人が行ってもその牧師さんのいい評判を言っておったそうですから、そういうことでキリスト教に対していい印象を持っていたようですね。

—— 渡部弥一郎さん<sup>わたなべ や いちろう</sup>もご一緒でしたが、大変だったんじゃないでしょうか。民間人でしたから。

鈴木 それほどひどくありませんでした。

ひろ やっぱり大尉<sup>たい い</sup><sup>(176)</sup>だということで待遇は違ったんです。

鈴木 それは違いました、私は畳のところでしたが、弥一郎さんはコンクリートの床で鍵のかかる所でしたからね。

—— ひろ先生、ご面会のときにはだいぶご心配をされて。

ひろ いいえそんなことはありませんですよ。主人はけろっとしておりまして。弥一郎さん<sup>や いちろう</sup>の方ははじめ興奮<sup>ほう こうふん</sup>したような顔でしたがね。

—— 面会にはここを朝早くお出でになる。

ひろ はあ、乗り物がないんですからね。歩いて、弥一郎さん<sup>や いちろう</sup>のお嬢さんを誘って一緒に伊佐領<sup>いさりょう</sup>に出ましたね。一日かかりましたから夜おそく帰って来ますと、母がね、その頃<sup>まさいけ</sup>政池の母と一緒に居<sup>お</sup>りましたから「おいはぎに会わなかったか。」と言うんです。母は東海道五十三次の宿場<sup>つぎ しゆくば</sup>の一つ赤坂宿<sup>あかさかじゆく</sup>の人ですから、あちらはおいはぎやな

んかで夜というとてもおっかないんだそうです。

—— 留守中のご苦勞も大へんおありだったと思いますが、村の人たちからの<sup>あっぱく</sup>圧迫なども。

ひろ 娘の和子はいつものとお元気そうにしていますが、主人が<sup>かんぼう</sup>監房から出て来るまでずっと下痢していました。黄履鰲先生<sup>(177)</sup>がお薬を下さいましたが数日しか効き目が無く、次から次へと別のお薬を送って下さいましたが、<sup>つい</sup>終には一日位しか効きませんでした。それなのに主人が<sup>かんぼう</sup>監房から出て来ましたらお薬も飲まないのに<sup>なお</sup>に治りました。

鈴木 子供たちの間では和子の前でみかんなんかを食べるようにして「スッパイ」<sup>(178)</sup>「スッパイ」と言って悪口を言った、という話がありますがね。

ひろ ふざけてそんな事を言うぐらいで、面と向かってはそんなひどいことはしませんでした。

—— しかし自由を<sup>こうそく</sup>拘束された八ヶ月は大へんでしたね。

鈴木 <sup>ひざ</sup>膝が弱くなりましてね。だから 1945 年（昭和 20 年）2 月 12 日に帰り、3 月になってから東京の人が心配しているから会いに行きました。3 月 10 日の大空襲のあとでね。東京中を歩かなければならず、<sup>しみず あまの</sup>清水の天野と<sup>やどや</sup>軽井沢のヴォーリズさんのところに寄って帰ったんですが、<sup>しみず ひざ こぞう</sup>清水では<sup>ひざ</sup>膝小僧が痛くなってしまいとうとう歩けませんでした。

—— で、どういうことが<sup>しゃくほう</sup>釈放の理由ですか。

鈴木 どうも<sup>きそ</sup>起訴することもできないということで<sup>しゃくほう</sup>釈放するということになった。<sup>こうりゅう</sup>拘留状はひと月毎に切り換えなければならないのに、その月は 12 日になっても切り換えないので<sup>さいそく</sup>催促しましたら、夜になってから「もう今晚出ろ。」と言う。「夜になって出ろと言っても困るから今晚だけ置いてくれ。」と言ったけれど「置かないことになっているから出てくれ。」ということで、しかたがないから 10 時過ぎに<sup>やどや</sup>山形の宿屋を探して泊まり、ようやく翌日<sup>や いちろう</sup>弥一郎さんと二人で一日がかりで<sup>おくに</sup>小国に着きまして、<sup>(179)</sup>松岡にある<sup>や いちろう</sup>弥一郎さんの奥さんの親類に泊めてもらって翌日家に帰ったわけです。

— ひろ先生は、びっくりなされたでしょうね。

ひろ 電話はないし、でも警察の方から大まかな事は知らせてきました。

— でも終戦前に釈放されたというのは一つの勝利ですね。

鈴木 それで10月にすっかり調べが済んでいましてね。起訴することも出来ず、面目上釈放も出来ずそのまま検事が12月に転任して行ったんです。私に言わせれば逃げて行ったんです、どうしようもなかったからね。そして1月になってから福島と仙台から検事を臨時に出張させて、福島から来たのが私を調べ、仙台からの検事は弥一郎さんを調べたんです。約一ヶ月かかって調べが済んで2月12日に釈放ということになった。判決を示すからと言うので3月になって行きましたら「起訴猶予だ。」と言うんですね。「起訴猶予というのは悪いことしたんだけど後悔しているから勘弁してやると言うんだらう、でも私は悪いことをしたと思っていないから、今と同じことをしますから、起訴猶予にしたらあなたがたが困るでしょう。」と言ったら、「起訴猶予が不服なのか。」と言う、「不服もなにも無い、私はどちらでもかまわなけれど貴方がたが困るでしょう。」と言ったら「私もまだ転任したばかりで良く調書を読んでないから。」ということでした。福島から来た検事がはじめて会って調べた時に「いまどきキリスト教や神様を信じて国のことを憂うとかそんなことを言うのは精神病<sup>(180)</sup>だ。」とひどいことを言いましたから、ひどい検事だと思いましたが、二日目から大へんよくやってくれましてね。そのかたの名前も知らずにいましたが、いま最高裁の長官になっております。1970年（昭和45年）の12月に日本経済新聞の「交遊抄」という欄にその方が寄稿されて、私のことを書いておられた。戦争の末期に転任した検事の代理で調べた。思想問題は大へん難しかったけれども、一生懸命やって不起訴にするようにした。話に聞くと山形で学校をやっているそうだけれども、私のことなんか忘れちゃっているかも知れない。というようなことでした。その記事を見て、そのときの検事だとわかりましたから、私も手紙を出しましたが、私より先に向こうから手紙をくれました。（「獄中証言」本書3-1参照）

### 8-1-7 新制高校<sup>(181)</sup>創立

—— キリスト教独立学校は先生の<sup>おうしょう</sup>応召で途絶えましたが新制高校としてキリスト教独立学園の創立のあたりを。

鈴木 終戦のときには若い友人が戦死したり、<sup>じょうせい</sup>情勢が変わりましたから、新規まき直しにしなければと考えておりました。そのときに新制高等学校の制度が出来ましたものですから、一つそれでやろうということになった。その頃になりますと、山の中の人でも勉強したいと考えるようになって、生徒も来るようになりましたから新制高等学校のスタートと同時に、1948年（昭和23年）4月から始めたわけです。実際始めたのは5月からでした。

—— 校舎もそのままですね。

鈴木 初めは独立学校のつもりで建てたものを使うんですから、三畳か四畳半ぐらいの部屋も教室にして、一番最初は15人<sup>(182)</sup>来ましたんですが、二回日は、5、6人でした。三回目は10人くらいでしたが、それから、また3人、5人なんていうときもありました。ですから教室も小さなところで間に合ったんです。それがだんだんふえてきましたものですから校舎をふやすことになった。

—— ですが、文部省の認可がなかなか出なかったとか。

鈴木 ええ、高等学校の認可は県でするのでしたから、県の認可は受けてやっていた。ただ経営は<sup>しじん</sup>私人でなく財団法人でなければならず、それは文部省の認可だった。ところが認可しないものだから文部省に認可されなくってもよい、大学へ行きたい人は検定試験を受ければよいと思って、廃校届けを出した。それが知事への願いでしたから、当時の知事であった<sup>みちお</sup>村山道雄さんがそれを知りましてね。それで村山さんが文部省に行ってそこで認可をとり付けて下さったので廃校しないことになった。

—— はじめから一学年25名という定員でご計画だったんですね。

鈴木 ええ、池田<sup>きよし</sup>潔さん<sup>(183)</sup>の「自由と規律」<sup>(184)</sup>に英国のパブリックスクール<sup>(185)</sup>の校長が、学生の定員を増やして収入の増大をはかろうとした意見に対して、自分としては150名が理想でありそれを増やしては一人一人に対し責任のもてる教育は出来な

いって、この提案を<sup>しりぞ</sup>退けた話がありますが、私は私たちの能力を考えて 75 名としました。

1962 年、1963 年（昭和 37 年、38 年）頃、高校生急増で日本中が困っているから少し協力する意味で定員を増やしましたがね<sup>(186)</sup>。5 名増やしても私のところでは 20% です。それでも大いに協力的でしたが、どうも 30 名ではやっぱり具合が悪く、また戻しました。

—— 先生方は何人でしたか。

鈴木 12 人必要だというわけで、私たち夫婦と西村先生<sup>(187)</sup>夫妻、後に弥一郎<sup>や いちろう</sup>さんの娘さんと結婚した八木君<sup>や ぎ</sup>、馬槽会<sup>ま ぶね</sup><sup>(188)</sup>の管野君<sup>かん の</sup>など、それに<sup>おお が</sup>大賀先生<sup>(189)</sup>と湯沢<sup>ゆ さわ</sup>（健）君には一ヶ月おきに集中講義をしてもらおうなどして 12 人ちゃんと揃<sup>そろ</sup>えてやりました。

—— 西村先生ご夫妻は何年ぐらい。

鈴木 三年です。はじめ世田谷で厚生省関係の仕事をしておられたんですが、矢内原先生<sup>や ないはら</sup>が<sup>おぐに</sup>小国にこういう学校があるんだが、と西村先生にすすめて居<sup>お</sup>られたということを私、村山さん<sup>(190)</sup>から聞きましてね。西村先生も希望しておられたので、それはいいと、来てもらうことになった。

—— <sup>ますもと</sup>榎本ご一家も間もなく来られたんですね。

鈴木 西村先生が行かれてから<sup>(191)</sup>二ヶ月か三ヶ月<sup>た</sup>経ちましてから、<sup>ますもと</sup>榎本先生は私が<sup>かしわぎ</sup>柏木の頃に日曜学校で教えた生徒でしたが、当時筑波山<sup>つくばさん</sup>の麓<sup>ふもと</sup>で開拓農業をやっ<sup>お</sup>て居られてね。その年は洪水の被害で私がお訪ねしたときはお宅には<sup>うめこ</sup>榎子先生<sup>はなこ</sup>と<sup>(192)</sup>華子先生<sup>ただ お</sup>だけで、<sup>ぬまた</sup>忠雄先生は沼田<sup>(193)</sup>の方の親戚の工場<sup>ほう しんせき</sup>で働いて居<sup>お</sup>られた。お宅でお話をし、それから<sup>ぬまた</sup>沼田<sup>ただ お</sup>に行って忠雄先生に会ったわけです。

—— 終戦間もない頃の創立ですからいろいろと困ったこともおありだったでしょう。

鈴木 困ったことって無いですね。金が無かったから、金の工面はしましたけれど、その時に苦勞したから、もう借金というの<sup>わり</sup>はするものでないと考えました。銀行は割<sup>わり</sup>合<sup>あい</sup>に学校に貸すんです。学校は確かですからね。私が借金すまいと考えたのは、保証人を立てるということからです。聖書に保証人になるなど書いてある。たとえば自分が



貸しても、また借りるとも保証人になるなど書いてある。責任を他人に転稼<sup>てんか</sup>することがいけないんでしょう。ところが銀行はどんなに確かでも、例えば私立学校振興会<sup>しんこう</sup>のものを借りるのにも保証人がいる。額が少ない時は物件の抵当<sup>ていとう</sup><sup>(194)</sup>は入れなくとも保証人だけでいいと言う。聖書に保証人になるなど書いてあることも内村先生から聞いたんですがね。どうも保証人を立てなければならんというところに突き当たりましたね。

—— 先生は精神的には困らないとおっしゃいますが、財政的に大へんだったのはいつ頃でしたか。

鈴木 1952年、1953年（昭和27年、28年）頃には安定していましたが、始めた頃はね、生徒も少ないし、いろいろ施設をしなければならなかったし、ポロの建物の中に居<sup>お</sup>りましたし、そして収益事業がなかなか収益を与えてくれず、前に言った武士ならぬ、学校の先生の商法ですからね、うまく行かない。しかし、それはうまく行かなくとも、学校のほう<sup>ほう</sup>がちゃんと整ってくると、安定してくるわけですからね。だからそれは大へん面白い<sup>おもしろ</sup>ことです。表面的に大へんに思われて、財政的に安定する工夫をしても、その工夫はみんなうまく行かず、そんな事はかまわず、学校本来のことをしっかりやって行けば、いつの間にか安定してくるということになる。仕事そのものが整<sup>ととの</sup>い、役に立つ仕事だったら潰<sup>つぶ</sup>れない。世の中に必要なものは潰<sup>つぶ</sup>れませんからね。私に私学経営研究会に入れと言って来ますが、信仰を無視する経済学はおかしいですね。

—— ほんとに収支償<sup>つぐな</sup>い得た<sup>(195)</sup>のも先生方の信仰による協力があったからですね。

鈴木 先生方はみんな教育を天職と考えているんですから、暮らせさえすればいいわけです。山の中で暮らしているとそんなに費用はかからない、そして東京の暮らしより私たち<sup>ほう</sup>の方がよっぽど豊かです。きれいな空気を吸って、おいしい物を食べている。東京で20万円<sup>(196)</sup>取っている人は足らずにピーピーしていますが、私たち<sup>ほう</sup>の方は6万円でも物乞<sup>ものご</sup>い<sup>(197)</sup>のようなふうもしないで居<sup>お</sup>れますからね。私立学校は生徒の数を多くすればするほど経営は楽だといっておりますが、先生方がぜいたくするつもりさえなければ、生徒数が少なくともちっともさしつかえないから困りませんね。大きくすることはわけなくできますが。いま私立学校は経営難で日本中困っていますが、私たちのところは小さくしているおかげで困らない。

—— その頃の生徒の入学志望動機は今と違いますか。

鈴木 違いますね。戦後人間はみな教養がなければだめだと考えるようになって、教養を求めはじめた。いまはその教養がただ学歴ということになったから、教育がこんなに悪くなった。しかし、はじめから学歴だけでいいと考えたんじゃないで、なんらかの教養が必要だと考えるようになった。そして学校を出た者は教養があつて社会でも有利<sup>もち</sup>に用いられる。初めは就職条件がいいからというようなことでなく、経済的には漠然<sup>ぼくぜん</sup>としていても、ほんとの教養を求める意味で学校に行くことを考えたんですね。とにかく日本のいままでの考えが間違っているという事にぶつかったわけで、確かに戦後しばらくは入学志望にもそういういい動機があつた。それが次第<sup>しだい</sup>に学歴さえあれば、ということになって、受験勉強ばかりして、ほんとうの教養のための勉強をしなくなった。ますます受験勉強をすればいいような試験制度<sup>と</sup>を採るし、受験勉強はほんとの勉強でないことを知らないから試験のための勉強をする。

ところが世の中の人の中にはそれでは困ると気がついている人がずいぶんいるんです。仕方なしにそういう学校に行っているんです。ですから気がつく受験準備教育をしない学園に、入学希望者がことわりきれないように集まって独立学園では困っている。例えばジャーナリズムでもそうですね。わざとポルノを書いて、とっつきやすい快楽を売るような事をしているが、世の中にはそうでないものを求めている人もそうとうあるし、また最後にはすべての人がそうでないものを求めるようにならなければならないので、それが分かればそんなものを読まない。店でもそうで、食べ物屋なら、繁盛<sup>はんじょう</sup>するためには酒を売らなければだめだと考えますが、仙台に酒を売らない食堂<sup>はんじょう</sup>があつて繁盛している。そういうところに客が集まるのは、そういうものを求めている人が相当ある証<sup>しょうこ</sup>拠でそれは世の中がよくなれば、みなそういうふうになっていくはずのものですから、今、世の中に迎合<sup>げいごう</sup>することを考えるより、ほんとのもの、良いものを世の中に提供<sup>ほう</sup>することを考えれば、その方が早く仕事を発展させていけると思いますがね。今でも、うちの卒業生が大学に行って大学の友だちといろいろ話すと、そんな高校があつたのか、それならそこに行けばよかつたと話す学生が沢山<sup>たくさん</sup>いるということです。私たちはほんとのことを言うと教育だつて上手じゃないし、素人<sup>しろうと</sup>なんですけれど、悪い教育をしないで、ほんとの教育をしようとしているから、お役に立っている。だからある意味では、いまいちばん働きやすい時代と言ってもいい。これがほんとうに教育技術が上手で、それでいい教育をしなければ世の中のお役に立てないというんだつたら、私たちにはなかなかできないですが、ごまかさず、ほんとのことをするだけということで、結構役に立っているんですからね。

—— ほんとに第二、第三の独立学園ができて欲しいですね。

鈴木 今年（1979年・昭和54年）、桜井先生<sup>(198)</sup>のニュー・ライフ・カレッジが開校されました。

—— 桜井女塾<sup>(199)</sup>の系譜<sup>けいふ</sup>といえますね。

鈴木 そうですね。昔ほんとの教育をしようとして女塾<sup>じょじゅく</sup>を起こしたのがその後外形<sup>がいけい</sup>的には他に吸収されても、その思想を守り通していたために、ここでほんとに復活することができた。私も桜井女塾<sup>じょじゅく</sup>の話は聞いておりまして、ここに桜井先生が見えられた時も、彼の祖母である桜井ちかという名前まで覚えていました。特に宣伝されたことでもないのに、特異な存在として記憶に残っていたんです。

—— 実際の教育面のことをここで少し伺<sup>うかが</sup>いますが、生徒はどういう方面から来ていますか。

鈴木 前には半数はこの村から通学しておりました、あとの4分の1が山形県内で、あと4分の1が全国からでした。いまは村からの生徒が減ってまいりまして、8分の1以下になりました。家の数はそんなに減りませんが、何処<sup>どこ</sup>の家でも以前は子供が五、六人でしたが、今は一、二人以下になりまして、中学<sup>(200)</sup>卒業生も八、九人になりました。6分の1が山形県内、4分の3が全国から来ております。ですから8分の7の生徒が寮に入っています<sup>(201)</sup>。村からの生徒が少なくなると、よそから来る生徒で断わるのが少なくなりますから、その点はいいんですが、村からの生徒が少ないのは残念です。

—— 教育の特色、特に基督教<sup>キリスト</sup>教育などは。

鈴木 聖書の時間もありますけれども、よい学問、よい芸術は、みな信仰が基<sup>もと</sup>になっておりますから、ほとんどすべての学科を通して信仰を教えることができます。それで信仰は強制しないで、よく考えろということを要求しております。そして学問<sup>おも</sup>の面白<sup>しろ</sup>さがわかって勉強してほしいということを生徒に言っているんです。それから毎日授業の始まる前に朝礼<sup>(202)</sup>をいたします。月水金は先生が司会しますが、火木土は生徒が司会して、何でも考えていることを言わせるようにしております。

ひぐらし  
日暮 校長先生はどんな授業を担当なさっておりますか。

鈴木 物理を教えればいいんですが、いくらなんでも物理を教えるには準備がいり

ますからね。英語でしたら、ぶっつけ本番で教えられるもんですから、英語を教えて、聖書と国語も少しもらいまして週 12 時間教えております。ですから、たくさん教える校長だろうと思っていばっているんです。

—— 校長さんは教えないですからね。

鈴木 どんな先生でも、教師を 30 年していたとすると、初めの 15 年は生徒を教えておって、あとの 15 年は教頭だの校長になっておって、初めの 15 年が楽しいとおっしゃるんですね。そのくせ教頭や校長になりたがるんだから、ずいぶんおかしな話だと思うんですがね。

—— 文部省や県なりのお役人の方から何か叱られるようなことはありませんか。

鈴木 叱られませんね。叱るくらい熱心ならいいのですが。前には私のところだけいい教育をしていけばいいと考えておりましたけれども、中学校から私のところに入って来る者の学力が年々落ちるんですね。ですから近ごろは私のところも被害者だからといって、教育長なんか文句を言います。私の友人が最高裁の判事をやって居りました時に、「日本の教育行政が悪いために教科書が悪くて、よい教科書を得るのに苦労している。その実害をもって裁判してもらって、もっと教育行政をちゃんとするようにしてもらおう方法はないか。」と言いましたら、「教科書が悪くて骨が折れるくらいじゃ裁判にならん。お前のところのやり方が悪いから、廃校にせよと言われたら裁判できるだろうけれども。」という話でしたから、廃校にせよと言ってくれればいいと思っているんですが、なかなかそう言いません。いまの教育はだめだということは、どなたもおっしゃっていますけれども、真剣に教育をよくしようと考えないで困ります。

—— その他勤労教育<sup>(203)</sup>などをおやりですね。

鈴木 どうも勤労教育<sup>(203)</sup>というものはむずかしいものですね。集団作業をしますと、ずるけることを教えるようになっちゃうんで、なかなかむずかしく、うまくやれません。寄宿生は一週に三回一時間半の作業、便所のくみ出しとか、畑の作業とか、校地、校舎の整備といった作業をやります。クラブ活動で家畜の世話など喜んでやっております。

—— 畑は野菜の自給自足ですか。

鈴木 少しは足し<sup>た</sup>になっています。野菜の一番の生命は新鮮ということですから、自分のところで作ったのを食べれば、都会のどんな人よりもぜいたくできます。今は半分ぐらい自給できているでしょうかね。みんな自給できると大へんいいと思います。

— その他の教育上の特色は読書ですか。

鈴木 とにかく本が読めなくちゃだめだと読書の時間を設けております。本を読めるようになれば、教育はほとんど完成したといってもいいくらいで、何か困った問題が起こったときは、本を読んで研究すればいいんです。そして学問の面白<sup>おもしろ</sup>さがわかって勉強して欲しいと思うんです。十年ほどになりますがある生徒が舎生日誌（当番で生徒に書かせている<sup>(204)</sup>）に「英語なんて、ヘドが出る。」と書いた者がありましたから「いまに好きで好きでたまらんようにしてやる。」と言ってやりました。意味もない、つまらないことを試験のために暗記させられたらヘドが出るのはあたりまえです。私のところでは英語でなくちゃ味わえないような面白<sup>おもしろ</sup>いことを教えるようにしておりますので、みんな英語も好きになるようですね。その子も好きで好きでたまらないようにはならなかったかもしれないが、ヘドだけは出なくなって、卒業しても少しは英語の本は読んでいるなんて言っております。

— 生徒が自然に信仰を持つようになる例も多いでしょうね。信者の子弟<sup>しでい</sup><sup>(205)</sup>も多いし。

鈴木 都会の信仰者の家庭から来た生徒よりむしろキリスト教を習うために来たんじゃないなくて、山の中でほかに高等学校が無いから来たという、村から出た者<sup>ほう</sup>の方が勉強もよくできるし、よい信仰ももってくれますね。

— 卒業生はどういう方面に出て行きますか。

鈴木 農村に残って働いてもらいたいと思っているんですが、いまのところ農村では受け入れ体制がないものですから、どうしても大学へ進学して都会で暮らす者が多くなります。受験勉強をしませんから、入学試験のむずかしいところはいれませんかね。そういうところはこっちから入ってやるな、いまの大学でやっているようなことは、自分でその気になりさえすればどこでも同じようにできる。自分でほんとうの学問の精神を持って進学することが大切なのですから、それをよく理解して入れてくれるところへ入っております。

—— そういう一人一人について校長先生が相談に応ずるわけですか。

鈴木 係の先生が<sup>お</sup>居られるし、ほかの先生もいろいろやっております。

—— 職員会議などはどのように。

鈴木 学校経営のことは、すべて職員会議で民主的に決めます。炊事のやり方<sup>かた</sup>をどうするとか、そんなことでも何でもします。

—— 信仰からの使命感がなければとても6万円で生活はできませんね<sup>(206)</sup>。

鈴木 信仰がなければできませんね。しかし、みんなで共同生活をしておりますから、だから安く暮らせるわけですね。結婚している方は、奥さんにも何か学校の仕事を<sup>かた</sup>してもらって一人前の給料をあげられるようにしておりますから、結婚しても生活できますしね。子供ができれば、養育、教育のための特別の費用をあげるようにしております。こういうところで、すべてを犠牲<sup>ぎせい</sup>にして働くなんていったって、人間としてのちゃんとした生活ができなければ教育もできないわけですから。

## 8-1-8 無教会について

—— 十字屋<sup>(207)</sup>での聖書講義もなさいましたが米沢店<sup>よねざわ</sup>ですか。

鈴木 米沢店<sup>よねざわ</sup>と山形店<sup>ほう</sup>でね。山形の方は前野先生が東京に出られてから、その後をやりました。

—— 山形大学内の磐上会<sup>ばんじょうかい</sup><sup>(208)</sup>のご指導もなさいましたね。

鈴木 磐上会<sup>ばんじょうかい</sup>は私が責任をもっているときに止めになってしまいましたので、大いに心を痛めています。どうにか復活したいと思ってね。でも今どうやら黒沼先生がおやり下さっていますが、一人の人が責任をとるのでなく複数の先生に分担してもらったらいと思いますね。先生自身も勉強するという意味で、また一人の先生の好みが全体を支配するようになりかねない。

—— 無教会の将来について先生はあまり心配しないとおっしゃいますが、しかし反省点はどういうところでしょうか

鈴木 やっぱり「先生」ができてしまうことでしょうね。「先生」にならないように気をつけることです。山形でも前野先生<sup>お</sup>が居らなくなったら残った人が替わり番で話をするようになった。米沢<sup>よねざわ</sup>でも私が月に一度やって居りましたが、庄司源弥さん<sup>(209)</sup>が来られて、「毎週やりましょうよ。」ということになり、やがてみんなが順番を決めて勉強していくようになった。そういう形がいいと思います。先日東北新生園<sup>(210)</sup>に行きましたが、そこでも自分たちだけでやっているんです。ちょうど今年入った生徒の親が、田尻<sup>たじり</sup><sup>(211)</sup>という町の牧師さんでね、まえに「私のような者でもお役に立てばお手伝いします。」と言って、しばらく新生園に来てくれていましたが、「どうも牧師先生に来てもらおうと、先生に頼るようになるからおことわりした。」と集会の人が言っておられたので感心しました。どうも人に頼るようになってしまう。自分で聖書の勉強するよりも、牧師さんの話を聞く方が楽ですからね。

だから私は先生を作るまい、内村先生にも頼るまいと決心したんです。それでは内村先生をいらん人間と思うかということ、それはそうじゃない。実は内村先生に頼って、先生のお話を聞かなくちゃいけないというような人は牝牛<sup>めうし</sup>が乳<sup>ちち</sup>を供給してくれるから牝牛<sup>めうし</sup>を愛するようなもので、ほんとうの愛とはいえない。だけど神様だけに頼って立派な信仰を持っていけるという、ほんとの偉い真理を教えてくれた先生に対して愛

と尊敬との念が湧かないわけではない。先程の話で湯沢君がどしゃぶりの雨の中を重いものを下げて、「内村先生のためだから」と言ったその気持ちは、内村先生からお乳をもらったからでなくて、偉い真理を教えてくれたという先生に対する愛と尊敬からです。だから私も「先生なんかいなくなっても大丈夫だ。」ということを感じたことがある。ちょうど内村先生に塚本先生との問題があった時、内村先生はずい分心配なさいましたから、「そんなに心配しなくとも神様がいいようにして下さいますから、なんでも思う通りにして下さい。」と言ってあげたいくらいに思った。そんなことは申し上げはしなかったけど。内村先生がどんな失敗をしても、何をしても、とにかく内村先生から偉い真理を教えていただいているんだから、内村先生のことで私は動揺しない、そう思ったんです。人物崇拝はいけないということを、内村先生はよくおっしゃっておられた。先生はカーライルが好きでカーライルのことをよくおっしゃいました。でも「英雄崇拝論」だけは、あれはだめだとおっしゃるんです。その中でもただ一ついい事は「ムハンマド<sup>(212)</sup>は青筋を立てて怒る人だ。」とカーライルが書いている。そこが感心だと先生はおっしゃった。とにかく人を頼らないことを教えられた。だから私は内村先生からこの世的な事では心配してもらわないようにしようと思っておりましたら<sup>(213)</sup>、矢内原先生もそういうことをおっしゃいましてね。考えが同じだと喜びました。

—— 柏木の有名な「おはぎ」にあずからず<sup>(214)</sup>、ですね。

鈴木 私も柏木ではご馳走にならなかった。でも軽井沢でご馳走になった。あれは内村家の名物だったそうですからね。

—— 無教会は制度教会に帰属しないということですが、信仰の基準は何かといえば、先生がおっしゃることですが「聖書により、イエスによって慰めを得る。」ことですね。

鈴木 ただね。一人きりということではいけませんね。一人では愛を行うことができませんし、人間の交わりの中でいろいろな事を悟っていくんです。現実問題として集會に出ない人はだんだんと信仰を弱くしますからね。ただ集會に出て、集會の先生を崇拝してしまうと問題が起こると思うんです。私は内村先生によって、最も偉い先生に教えられたにかかわらず、先生崇拝にならないことを教えていただいた、その点が非常に有り難いことでした。

—— 無教会がこのままいけば消滅してしまう、と心配する意見もありますが。



鈴木 それは今の先生方の集まりは無くなるかも知れませんが、内村先生の教えられた真理だけは残って、また別の形でちゃんと続いて行くでしょうね。とにかく世間では組織がなかったら何もできないだろうと思った。そして内村先生は無教会主義を唱えてやっているが、内村先生が死ねば内村宗派ができると思っておった。メソジスト教会<sup>(215)</sup>でも、ウェスリーが教会が間違っていたから新しい改革運動を起こし、結局、また一つのメソジスト・チャーチができたわけなんです。それと同じように、内村派というのがいまにできると考えていたんですね。ところが、そうならないでほんとの信仰だけは、そのままずっと残っていますからね。そういうことが実証されたわけで、これは非常に大きなことです。

信仰はそういうものですが、ローマ皇帝の保護を受けるようになって形式化され、組織化されて墮落してしまって困ったことになったわけです。そのため中世の暗黒時代がきた。日本の歴史の本では、中世というのは、宗教がさかんになって、なんでも宗教にとらわれて暗黒時代が来たんだと言いますがけれども。それはウソなんです。ああいう暗黒時代になったのは、形式主義に流れて信仰がだめになったからなんですね。それをルターが元の形に戻した。それが宗教改革です。ところがルターは、全く元のとおりにしないうで、洗礼と聖餐式と教会組織と三つだけ残した。そのために、また基督教が無力的になってしまった。それを内村先生が再宗教改革をしたわけですからね。

そこでまた教会が残れば、ルターのとおりと同じことになって、また一つの教派ができるだけになってしまいますが、内村先生がなくなって 50 年近くたっても、そうならないで信仰だけが生きている。いまに世界を動かすような力になると思います。ほんとの信仰ほんとの真理はつぶれない。

—— 無教会主義はスピリットだと言われますが、見える形は何なのでしょう。

鈴木 形というのは聖書を読むという形でしょうね。みんなで一緒に読んだりすることですね。

そして十字架によって義とされるというのには「これには何等差別あるなし。」(ロマ書 3 章 22 節)<sup>(216)</sup>でね。それは先生と私だって違いますが、そんなことは問題じゃない、ただキリストの十字架にすぎるとのことだけ、それだけが問題で、大事なことなんです。だから私、いつも言うんですが、内村先生がおっしゃった。「積み上げれば自分の背の高さになるほどの本を書いて神様のために働いたけれど、これで救われるんじゃない、天国に行けるんじゃない。キリストの十字架によるんだよ。」とね。

ところが偉い先生になって、俺はこのくらい偉いと思うようになると、すぐ自分の功に誇るようになりますからね。だから功のない土の器が有り難いわけです。そ

れであの「平民内村鑑三」という話を新潟でしたんです。

—— 先生はポアンカレのことをよく話されますが。

鈴木 私はポアンカレの影響を強く受けていると思います。彼は「科学と仮説」「科学者と詩人」などを書いています。科学をやるには詩人でなければならないと言います。しっかりした物理学者は物理をやるなら小説を読みなさいと言う。ただ計算だけでは科学の研究はできない。インスピレーションがなければ科学はできず、信仰によるインスピレーションが科学をすすめるというのです。湯川さんが中間子を発見したときも計算だけであれだけのことができたのではなく、ある時インスピレーションによって思いついて計算でもって確めたわけです。ポアンカレは哲学者としても数学者、物理学者としても一流だった。学問の本質を見極めた人です。第一次大戦のときのフランス大統領はポアンカレの弟であった。ポアンカレは三次元の空間というものも絶対のものでない、二次元の空間の生物も考えられるとね。そして二次元の空間の生物にとっては三次元の空間というのはどうしてもわからないものだ、とちょうど私たちが四次元の世界が理解できないのと同じようなものだとね。

—— 先生の信仰の特徴<sup>とくちょう</sup>を一言で言えば、真理としての信仰ですかね。

鈴木 そうですね。それが内村先生の信仰だと思っているんですがね。内村先生は科学者だったからそういう特色があったんだと思います。カーライルが19世紀の科学<sup>ばんのう</sup>万能思想の時代<sup>あ</sup>に在って<sup>ふくいん</sup>なお福音的信仰を持つことができたのは、カントの哲学によって神は時間・空間を超越したものであることを知ったからですね。この世の時間や空間の概念<sup>がいねん</sup>に縛<sup>しば</sup>られるといろんな事がわからなくなって、不思議に思われるが、神は時間・空間を超えている。時間・空間はこの世だけの認識の形式だというわけですね。

—— 内村先生は優<sup>すぐ</sup>れていらっしゃるが、哲学については浅いと言われますが。

鈴木 それは私もそうですね。私は哲学はほんとにわからない。私は哲学に対して不信です。哲学は、どうも人間的<sup>ちえ</sup>智慧で神のことまで考えてしまうところに、大きな間違いがある。哲学には普遍<sup>ふへん</sup>性がないですね。ある哲学者の言うことが、他の哲学者にわからないというように普遍<sup>ふへん</sup>性がない。だから学問としては大きな間違いをしていることを感じます。だから哲学はアウグスチヌスかカントぐらいしか信用しない。そして哲学に浅いことが内村先生の偉いところだと思うんです。

### 8-1-9 平和と政治

—— 先生は平和の問題も FOR<sup>(217)</sup>の理事として実際的に取り組まれておられますが、憲法の第九条を変えさせないことがまず第一と思いますが。

鈴木 改憲主義者はとにかく今は憲法を変えたいが、変えられない。それでそれを変えなくとも解釈で行こうというわけで、統治行為<sup>(218)</sup>ということを行っている。高度の政治性を帯びた国家行為は司法監査の対象にならないという解釈を作ろうとしている。

—— しかし、その高度の政治性が国家を誤らせて来たし、今日も誤らせているんですね。

鈴木 そういう曖昧な解釈を打ち破って明確にしなければならないと思ってね。自衛隊は憲法違反だから、軍事費分だけ納税を拒否する、良心的軍事費拒否という運動が FOR にありますが、それをもっと強く押しすすめて行って、ハッキリさせる必要があると思う。政府はそれをさせたくないものだからごまかしているんですが、その手に乗ってはいけない。早く裁判に持ち込んでハッキリさせないといけないと思う<sup>(219)</sup>。今ですと、変な裁判をされるのもっと運動をしてからという意見もありますが、早いほうがいいと私は思っているんです。納税法にも従わなければなりません<sup>(220)</sup>が、より高次の憲法に従うべきですから、憲法に反することはできない。軍事費を拒否する事の方が、日本国民の務めですから、そういう自信を持っていけば恐がる必要はない。税務署で嫌がらせをされるから運動を遠慮しているのではないかと思う。

—— 外堀りを埋めてくる元号法制化<sup>(221)</sup>や靖国法案<sup>(222)</sup>もそうですが、何よりいつの間にか無軍備では国を守れないというような考え方になってしまった。

鈴木 そういうものを作ってしまったんですね。終戦後は絶対非戦<sup>(223)</sup>でできると思って来たが、だんだん反対のそういう考えを作ってしまったんです。国民は作らせないようにすればいいのに、それを黙っていたからいけないわけですね。

—— 先生は「戦争の愚かさ」で大へん論理的に論じて居られますが、正義の神の支配という信念がないと納得できないのではないかと。

鈴木 だから納得してくれと言っているのではなく、私に間違いがあれば、反対の理論を示して欲しいと思う。「軍備で国が守れるか」でも論じているんですが、誰でもいいから軍備で国を守れることを明らかにしてくれればいいんですが。それを守れそうもないという気分だけで決めてしまっている<sup>(224)</sup>ことがいけない。このたびの戦争ばかりでなく、歴史を調べてみれば、軍備があることで国がだめになり、軍備がないことで、一時の侵略は受けても国を守ることができたことがわかる。信仰のあるなしにかかわらず、神が全世界を支配していることは事実ですから、聖書に反することをしている者は滅びる。今日、世界が経済的にこんなに困っているのも聖書に反することをしているからです。

人は必ず真理を求め真理に従わなければならないことは確かだと思うんです。信仰があっても無くても真理に従わなくてはならない。「わたしたちは、真理に逆らっては何をする力もなく、真理に従えば力がある。」(コリント第二、13章8節)というその言葉通りですね。それは信仰あるなしの問題でない。またある意味ではそれだからこそ信仰を持たなくてはならないのだと思います。

—— 信仰を持たないと、世の幸福、自己の利益の追求に走ってしまうのが現実ですね。

鈴木 そういう人は自分で自分の滅びを招いているんです。そういう事に気がつかなければならないようになるでしょうね。真理に従わなければならないということはどんな人にだって話せば分かる。田中角栄だって、ごまかせば大丈夫と思っているから頑張っているんですが、それでは通らない。むしろ一時通るようになれば、躓きがかえって大きくなり、田中角栄にとっては不幸なことです。だからこれではだめだということに一時も早く気がつくことが幸いなことだ。

そこで内村先生が「キリスト教は真理だ」とおっしゃったそのことが大事なんです。誰かが信仰によって真理でないものを真理と思い込んでいるのではなく、これに従わなければすべての人がだめになる、すべての人にとっての真理なんだと、こういうことを分からせて下さったのが、内村先生の偉いところだと思うんです。だから私たちはこれを明らかにして、聖書の真理に従わなければ滅びを招くことになるのだ、ということはどうにかしてみんなに悟らせなければならない。それを知らせ、伝道するのに、なんとなくこれは自分が信じているからそうする、というような態度になってしまう。つまりそれが高じると聖書の真理より、自分の教会を大事にする、自分の教会の通りの信仰にならなければだめだということになる。信仰を持つということを何らかの一つの宗教に<sup>したが</sup>従って信ずるというふうを考える。そうではなくて真理に一生懸命従うように導いていくことが必要なんです。だからこそ信仰を持つことになる。

信仰というのはつまり真理の方が力がある、ということに信ずることなんですね。だからこそ自分の罪を自覚して赦しを求めるところになる。罪の赦しを求めるところにいかなくとも、真理を求めるところに誰にでも要求することができる。そしてそれを要求していけば最後には信仰にならざるを得ない。私は真面目に生きている人と議論をしてみたい。どんなに立派な事を言っているようでも、信仰の無い人はピリピ書にあるように、「己が腹を神とし、己が栄光を神として」<sup>(225)</sup> (3章 19節) いるんですね。真面目な人でキリスト教が真理でないから棄てる、信じられないという人とほんとに会って話してみたい。ほんとにそういう人がいるかも知れませんが会えたらこれも嬉しいと思うわけです。

—— 権力や財産など、自分の幸福を求めますが、それを犠牲にして真理に従う考え方は少ないですね。

鈴木 それはよく考えないからですね。考えれば豊臣秀吉のように「難波のことも夢のまた夢」<sup>(226)</sup> といって死んでいくんです。秀吉は利口ですから考えついた。しかしみなそれほど利口でない。企業も金さえ儲かればいだろうと思って働いて、儲かってもちっとも良くなりません。だから今、大企業の一番大きな問題は如何にして社員に生き甲斐を持たせるかということになる。楽をさせて、給料をたくさんやれば生き甲斐を持つだろうと思ったが持たせることができない。良く考えて欲しい。考えれば、これぐらいのことはわけなくわかることだと思いますがね。

—— 真理に従って生きる生き方もそうですが、先生から福音の愛を学び、先生の愛に生徒たちは打たれるんです。

鈴木 それは愛が真理だからですね。しかし愛を求めていると実際は愛でないものを愛と思って、信仰から外れても平気であるという心配があるわけですね。だから、ほんとうに信仰の真理に立っているかどうか、愛の真理に立っているかどうかを考えなくてはならない。愛の真理も物理学上の真理も同じことで、真理に従わなくていいということはない。真理ならば最大の真理と最小の真理と矛盾はしない。

神というのはみな考えればわかる。現象を見て実在を考えることもできる。しかしキリストの必要は理論だけではわからない。だからよく神の存在はわかるが、キリストが神であることがわからないと言う。ユニテリアンなどそうですね。それは真理の求め方に誤りがある。求め方に理論による方法と啓示による方法の二つがある。両方を活用しないと、神からの啓示か悪魔からの啓示かわからなくなりますから、それを常にわきまえるように、理論が必要ですし、また理論だけでは行き詰まってしまう

いますから啓示<sup>けいし</sup>によって助けられる。だから理論<sup>りろん</sup>と啓示<sup>けいし</sup>の両方から求めていかないと迷信<sup>まじん</sup>になったり、間違いをおかしたりしますからね。「科学<sup>ぼんのう</sup>万能<sup>あやま</sup>思想<sup>しゆきう</sup>の誤り」の中でも、頭のいい人が間違いをした例を書きましたが、誰でも考え違いをするものですから、批評<sup>ひひよう</sup>をしてもらって自分の考えを改めて行かなくては真理を求められない。

—— ほんとうに真理を求めず、自分の利益を求めに急ですね。

鈴木 民主主義の政治は、利益の代表であってはいけませんね。多数<sup>たうすう</sup>を擁して自分の利益を押し通そうとするから腐敗<sup>ふはい</sup>する。これはどうしても知能代表でなければならない。各方面の知能を集めて、日本のために一番よい政策を見出すようにしなければならない。学問上の真理が一つであるように、論議をつくせば必ず一致<sup>いっち</sup>する。自分の町ばかりよい道路をつくっても、他の道路もよくしなければ役に立たない。利益も、ほんとの自分の利益を考えれば一致するはずですね。選挙区<sup>せんきょく</sup>の利益のみを考えて、日本全体の利益を考えない議員は、選挙区<sup>せんきょく</sup>の利益より自分個人の利益を優先させるずるい政治家です。今の国会では、悪いことの明らかな選挙法さえ改正することができないのですから困ったものです。歴史を見ますと、クーデターや革命が成功するのは、その方法の上手、下手によらないで、倒そうとする相手の体制の良い、悪いによります。二・二六事件<sup>(227)</sup>は、クーデターとしては最も下手なもので、そのために不成功だったように見えるが、政党政治が腐っておったために、結局その後の情勢<sup>じようせい</sup>が二・二六事件を起こした人々の思いどおりになってしまった。今日も政党政治が腐ってしまっ<sup>こんにち</sup>て、政治家は自分の墓穴<sup>ぼけつ</sup>を掘るような愚かなことをしている。これでは軍国主義になって、国民を戦争に迫いやるようになってしまう。

## 8-1-10 訪ねて下さった先生

—— 昭和 39 年秋に南原先生なんばらが学園を訪ねられましたね。

鈴木 県の方で南原先生なんばらをお招きすることになったんですが、途中で独立学園に案内してくれるんなら行く、という条件を南原先生なんばらがつけてしまったものですから県の人には困ったらしいが、いちばん最後にここに来るように予定を立てて下さった。

—— 南原先生なんばらと鈴木先生とのご関係は。

鈴木 柏木かしわぎの先輩ですからね。また同じ大学に勤めて居ったわけですから、何かと心にとめて居おって下さって、私が監房かんぼうから出て、上京した際にお訪ねいたしましたら、大へん喜んで下さって、いい証しをしたと仰おっしゃって下さった。そう度々ではないが、何度かお訪ねしていました。南原先生なんばらがおいで下さる時に、山形新聞に投書たびたびしましてね。南原先生なんばらは背骨があった。南原先生なんばらぐらいの地位の人で、占領当時マッカーサーもう詣でをしなかったのは南原先生なんばらだけだったとね。しかし南原先生なんばらが教育使節としてアメリカに行くことになった時、打ち合わせと挨拶あいさつのためにマッカーサーを訪ねた。マッカーサーも偉いですね。「あなたは事ごとに私の占領政策について反対の態度をとられた、けれどもそれでいいから、アメリカに行ったらなんでも思うことを述べて来て欲しい。」と言ったという。そういう南原先生なんばらを迎えることは非常にいいことだと書いたんです。

—— 1962 年 6 月に坂田祐先生さかた たすく<sup>(228)</sup>がいらっしゃいました。坂田先生とのご関係は。

鈴木 それは私が内村先生の集まりの後輩ということ、同じ学校をやっていることもありました。それに坂田先生は山形県に関係が深いんです。坂田先生の一族は会津藩士でしたから、生活に困って秋田県の大湯おおゆ<sup>(229)</sup>に住んでいた。そこで坂田先生は生まれました。18 歳の時ですかね、東京に行こうと、歩いて旅した。途中旅費をつくるために、月山山麓がつさんさんろくに近い松永銅山さちう<sup>(230)</sup>の幸生で働いた。その時一緒に働いた青年から聖書を知らされ、和英辞典と彼の聖書とを交換した。それがはじめて聖書にふれるきっかけであったというんです。それに山形出身の宍戸半次郎という戦友から、叔父からもらったものだという、内村先生の「求安録きゆうあんろく」やその他の本を見せてもらった。それで感化を受けて坂田先生は日露戦争から帰ってから内村先生のところに行くように

なったんですね。いらっしゃった時は、弘前<sup>ひろさき</sup>に行かれた帰りに、秋田などを廻<sup>まわ</sup>られて、学園を訪ねて下さった。

—— 坂田先生は関東学院の創立者ですから、学校経営のご苦勞もよく知って居られるでしょうから。

鈴木 私の学校は小さな学校だからそんなに苦勞はしない。でも坂田先生は苦勞なされたから、私に大いに同情してくれて、維持会<sup>いじ</sup>を作ることをすすめて下さった。「資金があれば何も心配しないでやっていけるから集めよう。」などとおっしゃってくれた。

学校管理はいちばん汚<sup>きたな</sup>い所を見れば程度がわかるとおっしゃって、便所をキレイにすることなどを強くおっしゃってました。それで水洗便所にしようと思ってね。しかし水洗便所にすると肥やし<sup>こ</sup>(<sup>231</sup>)をみんな流してしまう。資本家はそれを流させてしまつて、金肥<sup>きんぴ</sup>(<sup>232</sup>)を買わせようとする。そういう意味で水洗便所<sup>しょうれい</sup>を奨励するから、水洗にしても流さないで利用することを考えています。

—— 先生とはおいくつくらい違ったんですか。

鈴木 22、23 歳です。それで日露戦争のときの部下に山形県出身の人が三人居<sup>お</sup>られるとおっしゃるので、それを私が調べましようと言って調べて差し上げた。大江さんの居<sup>お</sup>られる関山<sup>せきやま</sup>のところに人<sup>あら</sup>と、荒砥<sup>たかはた</sup>の人<sup>(233)</sup>の人でしたが、それぞれ私に関係のある所で調べることができました。

—— ハス博士の大賀<sup>はかせ</sup>一郎先生<sup>おおが</sup>もよくいらっしゃって下さったとか。

鈴木 大賀先生<sup>おおが</sup>は 1948 年（昭和 23 年）頃から一月おき位<sup>ひとつき</sup>に来て下さった。顕微鏡などもご自分の物を持って来られ、給料ももらわず、ご自分の持ち出しで来て下さった。生物を教<sup>おおが</sup>えて下さったんですが、大賀先生も講義<sup>かた</sup>は上手になさる方ではないが、身をもって植物学のいい事を伝えて下さったものだから、学園は生物学には強いという伝統ができた。娘の和子なども生物学をやるようになって、東京に行って研究をするについても大賀先生のご心配<sup>おおが</sup>をいただいた。先生は金持ち<sup>て</sup>だったから手弁当<sup>べんとう</sup>(<sup>234</sup>)で来て下さったんですが、戦後に出資していた事業が失敗してしまい、そのうえ、落合の家が火災<sup>おちあい</sup>にあつてしまい、府中<sup>ふちゅう</sup>の方<sup>ほう</sup>に越されて、ずい分苦勞なされたんです。そんなわけでご自分の費用では来れなくなった。そのうち先生は二千年前のハスの花を咲かせましたね。それでそのご講演<sup>よねざわ</sup>を山形や米沢や新潟でなさるように、こちらで準



備するお手伝いができて、その時はいくらかご恩がえしができました。

—— 山本泰次郎さんなどもいらっしゃいましたか。

鈴木 一度来られました。私たちが叶水かのみずに来た翌年の1934年（昭和9年）9月に独立学校の献堂式けんどうをするのに山本さんが司式ししかのみずをしてくれたんです。下叶水の村の人を呼んで式をしたんですが、そのお客様にご馳走ちそうをすることになってうどんを作ることになりましたね。何かの都合でうどんを作る機械まわを廻してもらったんですが、それで過労のために病気が再発したりして、大へん申し訳なかった。しかし病身びょうしんのようでも80近くなってもお元気でしたからよかった。

—— 矢内原先生やないはらは1949年（昭和24年）と1961年（昭和36年）の二回いらっしゃっておりますね。

鈴木 第二回目には日暮ひぐらしさんもいらっしゃいましたね。あの時はここから神町じんまち、作並さくなみ、仙台までご一緒しましたね。

—— あの時の鈴木先生のご配慮はいりよは私もそばにいて感じておりました。県庁のジープかなんかを待機させておいて、もし道にはまったら引き揚げあるとかなんか。

鈴木 旧道を使っていた頃でしたからね。宇津峠うつとうげの一部の土砂崩れの処理が遅れていたり、五月中ちゅうじゅん旬よなのに雪がまだ除けてなくて通れないというので土木部長に頼みましてね。

—— あの年ですからね、お亡くなりになったのが。「お世辞せじにもいい道だとは言えないね。」とおっしゃった道でしたね。

鈴木 この裏の桜がちょうど満開でね。朝早くなのに、お部屋に先生が居おられませんでね。先生がどこかへいなくなっちゃった、と大騒ぎしていたら、川原かわらの方に行かれて、川原かわらのところで非常に喜ばれて、戻りながら桜の木の下で花をgoranほうになって居おられたところを見つけて「あ、先生いたいた。」というわけで、それが5月16日の朝ですね。いつでもそのあたりに咲くんですが、今年は16日には散ってしまいました。

—— その日一本松いっぼんまつにみんなで登りましたね。

鈴木 上まで登られましたね。なるべく急にならない道を遠回りして登られた。

—— 弥一郎<sup>や いちろう</sup>さんは近道を登って来られたりして、昨日<sup>きのう</sup>のようですね。

鈴木 お風呂に二人で入って背中を流しながら話しをしておりましたら、先生は「来年は内村先生の歳だからね。長生きするばかりが能じゃないからね。」とおっしゃった。その年の8月に腫瘍<sup>しゅよう</sup>のために手術をなさった。東山荘<sup>とうざんそう</sup><sup>(235)</sup>での講習会のすぐ後でしたね。しかし、どうも悪性腫瘍<sup>しゅよう</sup>らしいとね。でも私、その話を聞いたとき樂觀<sup>らっかん</sup>していたんです。というのは陳<sup>ちん</sup>さんらが診<sup>み</sup>ておられ、定期的にゾンデ<sup>(236)</sup>を入れて居られる。いくらなんでもゾンデが途中でひっかかるでしょうから、大きなものでないから大丈夫だと思ったんです。

—— でも発見が遅れたために、先生は68歳を最後まで戦い続けたんですね。

鈴木 信仰的に見て御立派<sup>ご</sup>な最後でした。やっぱり一番よかったみたいですね。

—— あの時、夜シルエット<sup>(237)</sup>を見ましたね。

鈴木 「学園の歴史」ですね。あれから少し続きができました。

—— シルエットの中で感銘<sup>かんめい</sup>しましたのは失火<sup>しつ か</sup><sup>(238)</sup>に対する校長の責任のとり方<sup>かた</sup>ですね。表面的事象<sup>じしやう</sup>にこだわりがちですが、先生は神の前の罪を意識されて、へり下<sup>くだ</sup>った態度をとられた。

鈴木 政池<sup>まさいけ</sup>や矢内原<sup>や ないはら</sup>先生からもほめられました。直接には失火<sup>しつ か</sup>で、原因はこたつの火でしたが、当人は非常に責任を感じておった。けれども私はそんなに責めなかった。心配ごとがあったりしたその時の状況を考えるとね。その過失<sup>か しつ</sup>を責め<sup>せ</sup>ないからと言ってほめられたんですね。火事は私たちが罪を犯しているから神様が罰<sup>ばつ</sup>のためになされたんだ。ルカ伝(13章4節)<sup>(239)</sup>にありますね。櫓<sup>やぐら</sup>が倒れて死んだ人たちが悪いんじゃないんだ。イエス様はそこで二つの例<sup>あ</sup>を挙げておっしゃられますが、その例と同じに直接失火の原因になった人だけが悪いんじゃないでなくて、皆が悪いんだからということ<sup>こと</sup>を言ったわけです。

—— 野村実<sup>みのる</sup><sup>(240)</sup>さんもいらっしゃいましたね。

鈴木 二度いらっしゃいました。五、六年前に 19 年振り<sup>ぶ</sup>で来た、とおっしゃっていました。初めて来られた時には未だ<sup>ま</sup>この建物ができない当時ですが、橋のところを行ったり来たりして、旧校舎<sup>ほう</sup>の方を見ているんです。何をしているのかと思ってあとで聞いたんですが、野村先生は、「シュヴァイツァー<sup>(241)</sup>の病院は、病院らしからぬ病院で、ここは学校らしからぬ学校だ。」と言ってね、それで感心したとおっしゃる。でもそれはいいことを言って下さったんで、学校が形式的に学校らしくなってしまったからこんなに教育がだめになってしまったんですから、アフリカでああいうよい事をほんとはやるためには、病院らしからぬ病院でなければいけないわけですからね。

—— そのほか森本慶三先生<sup>(242)</sup>、黒崎幸吉先生<sup>(243)</sup>や韓国の方々<sup>かた</sup>など多くの方がご訪問下さった。いま浜田成義先生<sup>(244)</sup>がよくいらっしゃって居りますね。

鈴木 ちょうど横田先生<sup>(245)</sup>が東京に移られて生物をやる先生がいなくなりましたので、石原先生<sup>(246)</sup>の集まりに出られておった浜田先生にお願いしてこちらに来ていただいた。やがて和子が帰って来て、生物を担当するようになったんですが、その後も植物の採集などを指導なさるために、しょっちゅうそれこそ先生<sup>ほう</sup>の方が手弁当で来て下さいまして、種<sup>たね</sup>の採取を教えて下さった。種<sup>たね</sup>を採って家にお蒔<sup>ま</sup>きになって水芭蕉<sup>みずばしょう</sup>などもちゃんと東京のお宅で花を咲かせていらっしゃる。

## 8-1-11 学校の経営

—— これからの学園にはさまざまなご計画がおりますね。

鈴木 食堂も大きくしよう、炊事場も改良したいとね。独立学園維持会でいろいろ寄附して下さいますが、ぜひ必要なものは出来てしまったので返上してもいいと考えたんですが、そういうまだまだやりたい事があります。水洗便所にしたり、食堂を広くするのにもう一つ意味がありましてね。校舎の方に体操場<sup>(247)</sup>を作ったら、どうも女子と男子と分けて体育の授業をしなければなりませんので食堂の兼用<sup>けんよう</sup>を考えたいんです。食卓を寄せて広くできますから、有効に使えます。

—— あと職員の住まいの改良が必要でしょうね。与えられた金額で。

鈴木 とにかく必要なものからだんだん出来て行くと思いますからね。ただ計画<sup>けい画</sup>の方が追い付かない。報告ですとかなり繰越金<sup>くりこしきん</sup>があります。しかし借金をしない主義でやるにはこれぐらいの事は必要ですからね。

—— 生徒の作業にも技術的な問題がありましようが、誰か職人さんなどに。

鈴木 いいえ、それは職員が勉強<sup>べんきょう</sup>する方がいい、それでいろいろな面のいい勉強ができます。職員だって、労働をしなければほんとうの勉強ができない、ということは、同じですからね。だからもっと労働時間を多くしたいと思っています。職員も技術的なことをわかって生徒を指導できないと困る。そしてそれができるように学ぶことが学問をするにも非常に役立つ。そして仕事を通してほんとうの学問をするんです。仕事と教養についてですがね、職人でも教養があると仕事はずっと違って来るんです。上叶水<sup>かみかのみず</sup>の栄<sup>さかえ</sup>さん<sup>(248)</sup>という人が初めの頃、製材の手伝いをしたことがあった。丸鋸<sup>まるのこ</sup><sup>(249)</sup>の扱いは職人になって十年の年期を踏まなければ一人前にならないとされているんですが、半年か一年でどうやらできるようになった。原理を学ぶと早く覚えられる。鋸<sup>のこぎり</sup>が廻ると周囲が余計熱くなって膨張<sup>ぼうちょう</sup>する、それで波を打ってしまうんです。一葉双<sup>いちようそう</sup>曲面<sup>きょくめん</sup>という鞍状<sup>くら</sup>の面になって波を打つ。だからあらかじめ中心に近い方を叩いてふくませおけば摩擦で周囲が膨張<sup>ぼうちょう</sup>してもバランスがとれるわけです。作業も教養があって考えてするとよく出来る。今の学園の作業でいけない事は作業の始末をよくやらないことですね。作業は道具を作ったり直したり、それが上手にできなければ、作業がよくできたとは言えない。大工さんがカンナ<sup>のこぎり</sup>や鋸<sup>と</sup>を上手に研ぐようにね。

—— 家庭の手伝いなど働く習慣のある子は勉強もよくできるとおっしゃいますね。

鈴木 しなければならぬ事だからする、という心が養やしなわれますからね。そして働くのは賃金ちんぎんをとるためじゃない、仕事を通して自分という人間を教育していくためのものです。よくやることで自分が教育されるんですからね。

—— 家庭で子供がする当然の仕事もさせないで、勉強しろと言ってしまおう。

鈴木 そうですね。それが間違いでね、だから勉強もできない子ができてしまう。内村先生の言葉として、「読むべきものは聖書、学ぶべきものは天然、為なすべき事は労働」<sup>(250)</sup>というのがあって感心しているんですが、今は一般に労働を尊とうとばない。キリスト教の信仰があると労働を尊とうとぶようになる。アメリカでは、今はどうか知らないが、偉い人でもよく作業をします。アマーフト大学のシーリー先生<sup>(251)</sup>がお掃除をしておったので、「総長がそんな事しなくともいいでしょう、私がしましょう。」と言ったら、総長は「地球の表面を美しくしているんだ。」と言ったまま続けていたとね。面白おもしろいことをおっしゃる。このことは内村先生から伺うかがいました。

—— 集会なら、先生なきあと解散するということも考えられますが、学校の場合はそんなわけにはいきませんね。

鈴木 それで困るわけです。職員がほんとに信仰に熱心になってくれればいいんです。それさえあれば、あとの問題はどんな事でも、どうにでもなるからと思ってね。ただ信仰というのは自分自身が大丈夫だと思ってしまふとだめですからね。それから、そこで間違いをしないように、いつでも信仰の初心者のつもりでね。だから求める条件は自分の愚かさを悟さとってくれるということですね。それさえ分かってくれば、どんなに能力のない人でもかまわない。それが分からないとどんなに能力があってもだめですね。

—— 施設や設備の改善はこれからやらなければならないところが多いようですが、さし当たっての計画の予算がちゃんと備えられてうれしいことですね。

鈴木 借金しないで仕事をしようとするとしても繰越金くりこしきんが多くなります。事業予算だけでなく経常費<sup>(252)</sup>でも、年度の初めは収入は少ないが支出が多いので、繰越金くりこしきん

がかなりいるんです。県の指導では繰越金くりこしきんに限度があるようですからいま承認しょうにんを求めているところです。自己資金けんじつでやるのが堅実けんじつだと思っ  
てます。

—— 学校は事業家のように資本の運用をはかって儲もうけることを考えるところではないですからね。

鈴木 事業家だってそうだと思いますね。資本の運用をしなければならんというから、いまのような悪い経済成長をすることになってしまいます。儲もうかったものを資本の運用を考えるから生産に再投資して利潤りじゆんをあげようとはかる。それで生産が増大する。消費が追い付かなくなると最大の消費である戦争の準備をする。日本の再軍備も経済界からのつき上げで、軍備がなければ国が守れないように思わせて軍備をさせる。経済成長が神の刑罰であるいちばんの証しょうこ拠は、戦争をすることになることですね。だから経済成長しなくて済むような経済にすることが偉い経済学でなければならないんです。

—— この頃、若い者の中には、最も自然に近い農業の中に生き甲斐が いを求めるようなケースも。

鈴木 ほんとに大企業に行って機構きこう<sup>(253)</sup>の中に入った仕事をしてもつまらない。企業も賃金ちんきんを増すだけでは働く者に生き甲斐が いを与えられない。どうやって生き甲斐が いを感じさせるか、ということが大企業の一番大きな目標らしい。そういうところが、いちばん経済成長むなの空しさを示していますね。

—— 表面的には豊かな社会でも根源的には人間が奴隷どれいの生活にかえった。

鈴木 ほんとにそうですよ。なくてならぬものは一つもない。みな作った者たちから押しつけられた物ですからね。だから物質が豊かだといっても少しも豊かではない、言い換えれば金銭どれいの奴隷どれいになってしまっている。いろんな制度もみない加減になってしまった。だから拒否して従わなければいい。昔の人のように縛りつけられて奴隷どれいになっているわけでないんですからね。

—— 商品を作るんだって、誰のために作るというような自分の愛を傾けるような労働でない。

鈴木 それでいちばん贅沢ぜいたくなことは仕事それ自体が楽しみになる働きですね。仕事そ

のものが誰かのためになる。役に立つということは当然ですがね。ひとによく言うんですが、私が東京で和風の家を建てたとき、大工さんが「入母屋<sup>(254)</sup>の屋根にさせてくれ。」と言うんです。私は実用即美<sup>(255)</sup>なんだから、簡単な寄せ棟<sup>(256)</sup>でいいと言いましたが、「私は格好<sup>かっこう</sup>がいい家を作るのが楽しみで、そのために余計に金を請求することはしないからさせてくれ。」と、普通の<sup>おもしろ</sup>大工さんに言わせれば、儲<sup>もう</sup>かりもしないので余計な仕事をして、馬鹿<sup>やっ</sup>な奴だ、と言う。でもどっちが馬鹿か分からない。自分の仕事<sup>ぜいたく</sup>が楽しくてしょうがないと言うんならそんな贅<sup>ぜいたく</sup>沢なことはないので、そういう仕事<sup>ほう</sup>をしている人の方が賢<sup>かしこ</sup>い。

それでこんど私、スポーツを問題にしているんですがね。スポーツは、てっとり早くその事が楽しいものです、苦<sup>おもしろ</sup>勞してほんとの面白<sup>おもしろ</sup>さを味わうことでない。山に登るにしても汗を流して頂上に達して喜びを味わう。努力して勉強<sup>おもしろ</sup>すれば面白<sup>おもしろ</sup>いことがわかるんですが、そうやってはじめて勉強<sup>おもしろ</sup>の面白<sup>おもしろ</sup>さを分かる、というようにしないで、いますぐてっとり早い楽しみを求めてしまう。働いて物を作り出すということに創造の楽しみがあることを忘れてる。

それにスポーツをみんなが喜ぶのはばくち本能ですね。勝った負けたということにひかれる。トランプなどをして、つい勝負にひかれて、うっかりすると夢中になる。そういう面でスポーツは特に人を動かしている。ただ体を動かすだけで、体を動かすことが自分の愛の心<sup>かな</sup>に適<sup>かな</sup>っておってよろこびが出てくるというよろこびがない。

—— ほんとうのよろこびは何か、ということですね。

鈴木 てっとり早く楽しもうとする。テレビがいけないのは、てっとり早く面白<sup>おもしろ</sup>いものを楽しもうというものだから、益<sup>ますます</sup>々くだらないものに夢中になる。面白<sup>おもしろ</sup>いからいいと言ってもじきに飽<sup>あ</sup>きてしまう。いい喜劇は深く考えさせて、人生の中でほのぼのとしたものを感じさせる面白<sup>おもしろ</sup>さがほんとの喜劇でしょうと思いますが、今の喜劇はそんなことはできないものだから、普通に無いような、変<sup>な</sup>なくじりなんかやって見せて、笑わせようとする。笑わせる技術<sup>な</sup>を知らないのですね。そういう面では、今のテレビの喜劇よりも昔の落語などのほうがよっぽどいい。

人の為<sup>な</sup>すべきことをすれば、ほんとうのよろこびを神様が与えて下さる。そういうよろこびでなければならぬのに、たのしみのみを求めてやるからそれで困ってしまうことになる。だからよろこびとか楽しみというのは求めるものでなく与えられるもの<sup>な</sup>ということですね。ちゃんと為<sup>な</sup>すべきことをすれば神様が与えて下さる。それがほんとうのよろこびなんだと思います。求めようとする、いくら求めることができて、それがじきにつまらなくなるものですから必ずほかのことを求めることになる。だからよろこびや楽しみは与えられるものなんです。楽しむことを求めるものだから勉強

も嫌いになる。勉強という面倒くさいものを考えているよりも、スポーツに打ち込んだほうが面白いから、授業が早く終わってスポーツをやればいいなあ、と考えるようになる。

—— スポーツにも長所、短所がありますから、短所を改めて長所を生かす工夫は。

鈴木 でも悪い影響を受けないようにしても受けますね。一ばんの影響は、まともの勉強を嫌い、すぐ面白さを与えてくれない労働を嫌うようになることですね。スポーツのいい点というの、ほかの畑作業など、学校の作業などがあるのだから、それをやってスポーツの長所を作業に取り入れればいい。体操は号令によって手足を動かすが、球技は独創的な精神を養うと言う人も居りますが、実際はそれも養えない、結局、競争の中で一そう悪くなる。体を鍛え、精神を強くするいい事もあるが、今日のスポーツ全体の調子から見て、なかなか弊害を喰いとめることはむずかしい。昔イギリスがナポレオンに勝ったのは、イートン<sup>(257)</sup>その他のパブリックスクールで肉体と精神を鍛えていたからだといわれた。そういう面もありますが、そのイギリスも、スポーツがいまのように墮落すると、国をだめにしてしまいます。

—— とにかくよろこびは神様から与えられるもので、自分が得ようとして得るものでない。この学校生活の中でそれを覚り得たら社会に出てどんなにか益がありますね、人生の基本ですからね。

鈴木 皆そういうことを分かってくれますね。修学旅行の瀬棚<sup>(258)</sup>での酪農の労働は、ずいぶん重労働なんです、それでも生徒はよろこんで、もう残りのスケジュールを止めにしてもいいから、終わりまで瀬棚にいて働きたいということになる。それが賃金をくれるわけでもなし、楽な労働でもないのにね。学園は修学旅行の成功している少数の学校の一つだろうと思っています<sup>(259)</sup>。



## 8-1-12 心のふれ合う教育

—— 先生方の真理を愛して、ひたむきに生きる生き方かたに生徒たちは生きざまを学びますね。

鈴木 私は大学を出て教育者になろうとしている人によく言うんです。教育は教育技術でなく人格と人格の触れ合いだ、とね。すると立派な人格者にならないと教育ができないように思う。しかし、そうじゃなくて、自分が一生懸命になって真理を求めていく、そのひたむきな態度が一番大事で、知識たくわを蓄おもしろえてうまく、面白く人に教える教育技術でなく、人格の接触だとね。人間にはだれでも内にいいものがあるんだから、それを引っ張り出すのが教育です。内にあるものといえば人格ですね。人格的なもの、れいこん靈魂とか、そういうものですから、それを引っ張り出すには、やはり人格でなくちゃいけないわけですね。ちょうど鉄を引っばるのには鉄の磁石じしゃくでなければだめだというように、どうしても人格の接触が教育に必要なんです。求め方かたは下手でもひたむきな態度、その態度が人を動かす。

それでよく例にするんですが、寺田とらひこ寅彦先生のことですが、旧制高校時代に、私が東大の物理に行くんだというと、教室の先輩などが教えてくれて、寺田先生の講義はさっぱりわからん。わからんで困っていたら、「要するに」とおっしゃったので、これから先はわかるだろうと思ったら、「要するに」ということはわかったが、先がわからなかったとね。そんなことはなかったでしょうが、そんな伝説があるくらい講義が下手だった。けれども寺田先生ほど教育者としても偉い方はいない。それは身をもって真理を愛し、物理学を愛することを教えられた。先生は割れ目の研究をなさった。何の役にも立たぬと人に悪口を言われるようなことかねもうも、金儲けのためでなく、真理を愛するだけの態度がそういう所にも現われている。教育者としてほんとの事をなさった。私はあいにくその名講義も実験の指導もしてもらえなかったが、寺田先生ほどほんとの学問を教えられた先生はいないし、偉い先生でした。地震など地学の研究をやった坪井忠二つぼい ちゅうじ<sup>(260)</sup>など、実に立派な学者で、坪井先生に習った者も今は学者ですが、「自分つぼい ちゅうじは坪井忠二という偉い先生に教えられてほんとのよかつた。何故坪井先生が偉いかと言うと、そのまた先生の寺田先生が偉かったからだ。それがわかったので、この間と き、土佐(261)に行ったとき寺田先生のお墓をお参りして来た。」ということずいひつを随筆に書いていた学者おが居りましたがね。それほど寺田とらひこ寅彦先生は、その孫弟子までも動かして立派な教育をする。その先生が教育技術は下手だった。だから教育は技術でなく、人格のふれ合いだということですね。

や ない はら矢内原先生が、帝大聖書研究会の会合の時に、大学教授に三つのタイプがあって、

一つは世間に顔が広くて、卒業生の世話をよくするタイプ、二つは教授法がうまくて、講義が面白いタイプ、三つ目はよく研究するタイプだとおっしゃった。矢内原先生はどのタイプですかと伺ったら笑って答えられなかったそうですが、みんなの話でも研究をよくする先生が一ばん偉い先生だから矢内原先生は三つ目のタイプだろうということになった。とにかく真理を求める研究の態度そのものがいちばんいい教育をするんですね。

—— 和子先生の講義がおもしろい、勉強に乗らない時など化学の復習から始めると、とっかかりやすいという生徒が居りました。

鈴木 そうですか、それが教授法のおもしろいので人気があるという、真ん中のタイプじゃ困りますがね。

—— でも勉強心を起こさせる教師がほんとの先生ですね。信仰を持って生徒を愛し、自分も一生懸命真理を求める先生方の姿が学園にはありますね。

鈴木 今は信仰がないとほんとの教育もできなくなりますから、信仰がなくなつては困るんです。

日本の教育学も間違っていると思う。間違っているから教育がだめになった。社会を指導すべき学問がだめになっているから社会が悪くなっていく。教育学として、ペスタロッチのことも研究しますけれども、ほんとうのペスタロッチの精神はわからないと思うんです。少なくともペスタロッチの信仰がわからなければ、ペスタロッチの教育はわからないですからね。ただ信仰抜きでいくらペスタロッチの研究をしたって何もわかるはずはないので、結局だめになるんですね。

—— 無私<sup>(262)</sup>に働く学園の先生方に励まされますが、「自分を捨て、自分の十字架を負うて」という聖句を思いますが。

鈴木 自分がいちばん愚かだと思い、自分が罪人の首だと思っているところが「自分を捨て」ということでしょうかね。ですから藤井武先生の

打ち給え、御存分に打ちてすえたまえ、  
鞭の下よりただわれすがる。

という歌はほんとうに生きていますね。ほんとうに心からそれが言えなけれ

ば十字架を<sup>お</sup>負うことにならない。自分はどんな<sup>ばつ</sup>罰を受けてもそれは相<sup>ふ</sup>応<sup>さわ</sup>しいんだと思うようになって十字架を<sup>お</sup>負うことができる。私は藤井先生の歌は偉い歌だと思いますね。

まあ、信仰というものはそういうものだと思いますね。それ以外のものは信仰でないと思う。自分というものがあって、自分はこれ位の<sup>たいぐう</sup>待遇を受けてもいい者だということがあったら信仰というものではない。だからバニヤンの「この<sup>つみびと</sup>罪<sup>かしら</sup>人の<sup>あふ</sup>首に溢る<sup>おんちよう</sup>恩<sup>(263)</sup>寵」というのがありますが、<sup>つみびと</sup>罪<sup>かしら</sup>人の<sup>あふ</sup>首にとってみれば、どんな<sup>ばつ</sup>罰を受けてもいいのだから、どんな<sup>おんちよう</sup>小さな<sup>あふ</sup>恩<sup>(263)</sup>寵でも溢れるものになるわけです。

内村先生も<sup>きょうみ</sup>興味を起こさせる教師のことを「後世への最大遺物」の中で書いておられますね。アマースト大学の中には 30 数人の先生がいるがこれはみな宝物だと述べています。学問を教える先生は<sup>どこ</sup>何<sup>たくさん</sup>処にでも<sup>きょうみ</sup>沢<sup>きょうみ</sup>山いるが、その学問についての<sup>きょうみ</sup>興味を起こさせるのがいちばん偉い教授だ。それでアマーストの先生はみんなそういう先生だから実に宝物だと書いてある。

この学園も、学問に<sup>きょうみ</sup>興味を起こさせて、学問の<sup>おもしろ</sup>面白<sup>おもしろ</sup>さで一生懸命勉強するようにとやっているわけですが、少しは<sup>きょうみ</sup>興味を持ってくれるんですが、試験をしないと勉強しないで困る。そこを音楽の<sup>ほう</sup>方<sup>せけん</sup>は、世間と普通の割合で、音楽の嫌いな人も入って来るわけですが、やがてみんな音楽が好きになりまして、合唱というと全員が歌うようになる。いちばん成功しているのは音楽ですね。どうも英語をいくら頑張っても音楽ほど成功していない。おもしろさをわからせるよう一生懸命やっているんですけどね。音楽は一年より二年、二年より三年が上手ですが、今年の三年生はどうも充分でないなと思っておったら、修学旅行から帰ってきて歌ったら、実にすばらしいですね。合唱のいちばんいい勉強を旅行でしてきたわけですね。力強い歌<sup>かた</sup>い<sup>かた</sup>方<sup>かた</sup>をしていましてね。合唱もいい勉強してきたんだから、他の<sup>ほう</sup>方<sup>ひってき</sup>も<sup>ひってき</sup>キ<sup>ひってき</sup>ットそれに<sup>ひってき</sup>匹敵するようないい勉強をしてきてくれただろうと思って喜んでいますがね。

—— 文字通り修学旅行ですね。心と心の触れ合いというお話で石森延男先生<sup>(264)</sup>のお話を<sup>うかが</sup>伺ったことがあります。

鈴木 石森先生の「教育文学記念碑」を建てる話ですね。石森先生が<sup>まんしゅう</sup>満<sup>(265)</sup>州に渡る前に<sup>たかまつ</sup>高<sup>(266)</sup>松の<sup>しほん</sup>師<sup>しほん</sup>範<sup>しほん</sup>学校の教師をしておられたんです。その頃の教え子たちが、もう<sup>ていねん</sup>停<sup>(267)</sup>年になるぐらいの年齢になって、いま記念碑を建てなければ建てる時がないだろうというわけで、みんなで<sup>やしま</sup>屋<sup>(268)</sup>島の瀬戸内海の見えるところに建てた。

ある<sup>めいげつ</sup>名<sup>めいげつ</sup>月の夜、教え子たちとこの山に登る、という題で、

君たちも虫も歌って月はるか 石森延男<sup>(268)</sup>

それと並んで、

あれから四十四年 思い出をこめて、ゆかりの人たちこの碑<sup>ひ</sup>を建てる  
(昭和四十一年<sup>(269)</sup>秋)

これが碑文<sup>ひぶん</sup>ですが、先生と生徒たちの心の結びつきがよく現れ、先生と生徒が一緒になって美しいものを求めるのが見えるようですね。

—— その教師と生徒の心のつながりがこの学園の教育ですね。

鈴木 そうありたいと願っています。

## 8-2 ささやかにして偉大なるヨーロッパ旅行

### 8-2-1 東へ東への旅

小関 充 兄こせきみつるけいが多額の費用を自分持ちで私共に付き添そって下われらさり、我等三人羽田を 6 月 25 日午後 9 時 59 分離陸し、北東に向かって飛行する。大圏コースを直進するのであるが地球じくの軸しだいに対しては次第しだいに向きを変え、アンカレジたいけんに近づく頃は真東まひがしに向かい、約 7 時間かかって 26 日午前 4 時 45 分着陸、ただしアンカレジ時刻は 25 日午前 10 時 45 分、北極圏けんに近く昼でも薄暗うすぐらい。約一時間休み離陸し、ロンドンに向かう。進路は初めは北北東ほくほくとうであったがやはり進むしたがに次第しだいに向きをかえ、北極しだいに最も近くなつた頃は真東まひがしになり、それよりは次第しだいに東南向きになり、ロンドンに着く頃は南南東なんなんとうになった。北へ寄つたり、南へ寄つたりしたが常に東へ、東へと飛行したのである。ロンドンからオックスフォードと、インターラーケンからジュネーブと少しは西に向かったこともあるが今度の旅行は全体として東に向かつての旅行であった。地球じくの軸を中心にして地球を一周し、東へ東へと行って出発点に帰つたのである。昔読んだ小説であるが、ある国の王様が東の端はしには何があるかと、国政を大臣まかに任せて東へ向かつて旅に出たが、自分の国と同じ国に来たので気味悪くなり、引き返して留守るすの大臣に告げた所、大臣も不思議がり、実は西の方から王様と全く同じ人がやって来たが、その方は直かたに引き返してしまったと申し上げたとのことである。地球の丸いことは案外早くから人類は知っていたらしい。

### 8-2-2 北極圏の上空

アンカレジを離陸して間もなく 6,194m のマッキンリーが見えた。ヒマラヤは見なかったので今度の旅行で見た最高地点である。北極ほくいに最も近づいた時は北緯 80 度以上まで北に行ったのであるがそれでもなお北極から 1,000km 以上離れていた。

カナダの北の北極海諸島の北部やグリーンランドに入って初めの間は地上がよく見えた。珍めづらしい地形があり、長い氷河ひょうがと思われるものも見えた。グリーンランドに入ると次第しだいに雲が多くなり何も見えなくなった。雲の上から From Greenland's Icy mountains<sup>(270)</sup> を口ずさみながら通過した。アイスランドも見えると聞いたが、それも雲の下で見えなかった。

### 8-2-3 イギリス

イギリスに近づくと 10,000m の上空は北極圏の白夜けん びやくや<sup>(271)</sup> から引きつづいて明るい地上はまだ暗く家々の灯あかりが見えた。遊園地の道路に沿ってポンポリ<sup>(272)</sup> が並んでいるのかと思ったが、余り沢山遊園地の如きものがあるので変だと思った。次第しだいに明るく

なりかつ高度が下がるとそれが一軒々々の家であるとわかった。農村の住宅街も、ロンドンの住宅街も同じようであった。

ロンドン時間 6 月 26 日 6 時 10 分にヒースロー空港に着陸した。ロンドン時間は本来なら日本より 9 時間遅れる筈であるが、ヨーロッパの標準時に合わせる為に 8 時間遅れになっている。ちょっと計算すると 8 時間 20 分かかったようであるが時差の 8 時間遅れを加えなければならないので東京-ロンドン間に 16 時間 20 分かかった訳である。

入国手続をすませ、バスに乗ってロンドンに向かった。ハイパークの傍のロイヤル・アルバート・ホールとその向かいのプリンス・アルバート記念碑を見物する。プリンス・アルバートとはヴィクトリア女王の夫であって、臣下であり夫であるという難しい立場をよく果たして、ヴィクトリア女王の治世が近世史上稀に見るよき治世であったことの陰の功労者であり、イギリス国民から慕われて居ったのでこのような立派な記念碑とホールとが建てられたのである。ここで団体を離れてタクシーで宿舎ウォールドルフホテルに行き、案内して戴くことになっている千葉真<sup>(273)</sup>、藤崎修<sup>(274)</sup>の両兄を待ち合わせる。千葉兄は御妹直子さんの学園入学以来御家族一同と親しくして戴いている宮城県古川市千葉家の長男で、内村鑑三奨学生として二年間アマーフト大学で勉学し、引き続いて奨学金を得てオックスフォードで神学を研究して居られる方である。藤崎兄は九州の福岡市の天神聖書集会の方で現在オックスフォードで勉強して居られる。天神聖書集会の方々も何かと独立学園を援助して下さっている。両兄の案内でまず大英博物館に行く。新約聖書の最古のまとまった原本であるシナイ写本の複製本を見る。原本は特別な研究の為等の外は誰にも見せないで、厳重に保管されていて、複製本でさえ番兵が番をしていると聞いて居ったので、見られないかと心配して居ったが、複製本は見られた。私達は聖書によって信仰の真理を学んでいるので、そして勿論研究するには印刷された最近の校訂本<sup>(275)</sup>で充分であるが、それらの出来る基礎になった写本の中の最有力なものの一つを見ることが出来たことは、たとえ複製本であっても幸いであった。私達のしていることが架空のもの<sup>(276)</sup>でない、確かな根拠の上に立っているという確信を与えてくれる。

またロゼッタ・ストーン<sup>(277)</sup>も見ることが出来た。象形文字、デモティック、ギリシャ語の三つの言語で書かれているので、象形文字解読の手掛かりとなったものである。その他の重要文化財を時間の許す限り見て、午後はロンドン市内の観光バスに乗って一巡し、なおよく見る為に国会議事堂、ウェストミンスター・ホール、ウェストミンスター大寺院<sup>(278)</sup>に地下鉄で行った。写真では充分のみ込めなかったこれ等の建物の配置もよくわかった。ウェストミンスター大寺院の中に入ってデヴィッド・リヴィングストンの墓等も見た。ステンド・グラスもすばらしかった。議事堂の西南一隅の高い塔の下が正面入口である。北端にビッグ・ベンと呼ばれる時計台がある。

ウェストミンスター・ホールは議事堂につけられた建物である。議事堂南側に小さな公園がある。その<sup>あた</sup>辺りで千葉<sup>ふじさき</sup>・藤崎<sup>けい</sup>両兄と明日を約して別れた。ロンドン名物の二階建てバスに乗って<sup>しゆくしゃ</sup>宿舎に帰った。夕食後、時間があつたのでテムズ川岸<sup>がわぎし</sup>へ散歩に行った。二都物語<sup>(279)</sup>のテルソン銀行のあつた所という<sup>に</sup>テンプルバーや、よく足音を反響させるといふ<sup>しゆくしゃ</sup>ソーホー地区も<sup>しゆくしゃ</sup>宿舎の近くであるが200年前の<sup>ほんかがい</sup>面影はなく、<sup>ほんかがい</sup>繁華街になっている。

27日タクシーでパディントン駅<sup>けい</sup>に向かい、千葉兄と会い、オックスフォードに行く。一時間半の鉄道の旅である。9時頃オックスフォードに着く。オックスフォードは40近くのカレッジからなつていて千葉兄<sup>けい</sup>のマンسفールド・カレッジは200名で、大きなものでも500名を越えないとのこと、日本のようにマンモス大学でないことがよい。代表的カレッジを二、三見せて<sup>いただ</sup>戴いた。多くは広い中庭を<sup>しげ</sup>囲む建物で、通りに面した<sup>がわ</sup>側の中程に正面入口がある。休み中であるのに<sup>しげ</sup>繁つた<sup>たいじゅ</sup>大樹の下でセミナーのようなことをしている場面もあつた。全寮制であるが<sup>しげ</sup>休みになると寮を出なければならぬので、千葉兄<sup>けい</sup>のように外国から来ているものは臨時に下宿しなければならぬ。千葉兄<sup>けい</sup>の下宿で我々三人と前からいる無教会の日本人三名とで日曜集会を持った。ある意味でイギリスの霊的中心であるオックスフォードで、聖書の研究を主とした無教会的集会を持ったことは意義あることであると思う。昼食に暇がかかつた<sup>(280)</sup>が、午後は千葉兄のマンسفールド・カレッジの神学教授のサイクス先生のお宅のお庭で、先生と<sup>しんがく</sup>神学生グラアム・キース君と無教会的信仰のあり方について論じた。今日<sup>こんにち</sup>キリスト教が無力になつてしまつたのは<sup>おちい</sup>形式主義に<sup>ため</sup>陥っている為であり、世界を救う力を持つ<sup>ため</sup>為には初めのキリスト教の如く「神は霊であるから礼拝する者も、<sup>まこと</sup>霊と真とをもつて礼拝すべきである。」という信仰に帰るべきである。内村先生の信仰はこの信仰である。世界は<sup>しだい</sup>次第に内村先生の信仰の意義を<sup>さと</sup>悟つて行くであろう。時間がなくて充分論じつくされなかつたのが残念であつた。夕食までにロンドンに帰らなければならぬので、4時頃<sup>じ</sup>辞してロンドンに帰った。ロンドンーオックスフォード間は片道2ポンド68ペンスであるが往復だと2ポンド70ペンスで<sup>わず</sup>僅か2ペンスで帰りの列車に乗れるのである。

夕食後<sup>しんだいしゃ</sup>ヴィクトリア駅に行き<sup>えいふつかいきょう</sup>パリに向かう。寝台車<sup>しんがいしゃ</sup>のままカーフェリーで英仏海峡を横断する予定であつたが、カーフェリーの<sup>ため</sup>ストライキの<sup>ため</sup>為ドーバーまで国鉄で行き連絡船<sup>かいきょう</sup>に乗り換えて海峡を渡り、また列車に乗って<sup>ためあま</sup>パリに行った。その<sup>ためあま</sup>為余り眠れなかつた。

#### 8-2-4 パリ

6月28日朝9時過ぎにパリに着いた。フランスでは夏時間であるのでイギリスより一時間早い。団体のバスでモンマルトルの丘に登り、サクレ・クール（聖心）寺院

を見てその傍そばのテルトル広場で軽い朝食をとる。画家になりたくてパリに来たのにもかかわらず、画家になれなかったような人々が、食べる為ために観光客の似顔にがおを書いて売りつけたり、拙つたない絵を売っている所で、パリの恥部ちぶである。

オペラ座、マドレーヌ（マグダラのマリア）寺院の前を歩いてルーブルに着く。ルーブルを見るのがパリでの第一の目的であるので明日一日かけてゆっくり鑑賞したいと考えていたが、明日は火曜日で休館とのことで団体を離れルーブルに残り、閉館時まで出来るだけ多く見ることにした。残念なことにはミレーの絵はしまっていて、見せないとのこと、ミレーの絵の色調しきちようを確かめたいのが今度の旅行の目的の一つであったが出来なくて残念である。モナ・リザは明るい色調で、多くの複製画から想像していたのより遙かにすばらしかった。同じくダ・ヴィンチの洗礼者ヨハネは想像していたより暗い色調であった。塚本先生の依頼いしこみつやがはくで石河光哉画伯(281)の模写したものはもっと明るかったように憶おぼえている。塚本先生が南原先生に贈り、東大総長室かかに掲げられていたが、その後どうなっただろうか。ほんとに学問すればキリスト教の信仰に必ず到達するというのが私の確信であるから、キリストを指さす洗礼者ヨハネの絵が、東大総長室にあることは最も相応しいと思う。今はどうなっているか、日本の多くの学者が信仰けいべつを軽蔑しているので、現在の日本の学問の混乱が起こったのである。まことに嘆なげかましいことである。ミロのヴィーナスは初めに団体といっしょに見たのだが後でゆっくり鑑賞したいと思っていたところが閉館時間が来て外へ出されてしまった。オペラ座の近くのホテル・スクリーブに泊まる。

6月29日パリでの二日目はルーブルに行けないので団体と共にヴェルサイユへ行く。まず外側の庭園を見る。正面から見た所は建築物としては余りよくないが裏側あまの庭園ていえんの方から見た所は立派である。内部もぜいたくの限りをつくし、豪華ではあるが、果たしてこれで優雅な生活が出来たか疑問である。ルイ14世(282)は精神こゝろの伴ともなわない外形がいきいだけを求めたので、費用は膨大なものとなったが、その効果は得られなかった。それどころかこの為ために人民さくしゆを搾取したので、フランス革命のもとになり、ルイ16世(283)は断頭台上だんとうだいじょうでその一生を終えなければならなかった。ナポレオン3世(284)の第二帝政の時にプロイセンに敗れ、パリは包囲され、プロイセン王ウィルヘルムは独逸帝国皇帝ウィルヘルム1世としてこの鏡かがみの間で戴冠式まいかんを行った。この独逸帝国ドイツも48年後に滅亡した。人間的榮華は斯くはかないものであるのに、人間はこれを求むるのに憂うれき身をやつしている。愚かなことではないか。ヴェルサイユに野菜・果物の朝市があり、まだ売れ残ったものがあつたので果物を買った。ロンドンもパリも百年らい来の暑さとかで連日猛暑に苦しんだので美味しい果物が買えたことはよかった。サクランボは大変美味おいしかった。山形県ではアメリカから安い美味おいしいサクランボが輸入されると困るから輸入を禁止して欲しいと運動しているが、これは農愚民政策のうぐみんをとっている結果である。農民に教養を与え、研究させ、アメリカに負けない、よいサクランボを作



らせればこんなことで困る筈<sup>はず</sup>はない。昔は日本の農業は進歩していると思われていたのにこんな状態になったのは大学がちゃんとした研究をしなくなり、農民が愚かになったからである。

パリに帰り、凱旋門のあるエトワール広場、シャンゼリゼ通りを過ぎ、日本食の昼食をとり、団体と別れて地下鉄にて、セーヌ川の川中島<sup>かわなかじま</sup><sup>(285)</sup>であるシテ島に行きノートルダム<sup>こうほう</sup>の寺院を見る。建物もよく出来ていて、前の広場もよいし、後方のお庭もよい。ステンド・グラスもよい。鑑賞の対象物<sup>(286)</sup>としてはすばらしいものであるが、中味の信仰はどうであろうか。どうも私の持論<sup>じろん</sup>である内容と外形とは反比例する<sup>がいはい はんびれい</sup>という定理がこの場合にも当てはまるようである。ウェストミンスター大寺院に行った時感じたのであるが、寺院の建物が立派である程、その信仰は低くなってしまいうようである。今日のヨーロッパが墮落しているのはこの信仰の低調<sup>ていちよう ゆえ</sup>の故であろう。

地下鉄シテ島駅で乗車、バステューユへ行く。フランス革命の発端<sup>ほったん</sup>となったバステューユ要塞<sup>ようさい</sup>の跡はバステューユ広場となっている。「二都物語」のドファルジュの<sup>しゅてん</sup>酒店のあったサン＝タントワヌ通りも見て、また地下鉄でオペラ座前で下車し<sup>しゆくしや</sup>宿舎に帰った。

#### 8-2-5 ライン下り

6月30日9時に出発し、オルリー空港に行く。パキスタン航空でフランクフルトへ行く予定であったが3時間遅れたので、空港で無駄<sup>むだ</sup>に待たされた。パリ附近の空は濁<sup>にご</sup>っていて、地上が余りよく見えなかったがドイツへ近づく<sup>したが</sup>に従ってよく見えるようになった。遅れたのでライン下りは明日にして、フランクフルト空港から団体バスで市内に行きホテル・フランクフルターホーフに泊まる。

7月1日朝8時に宿をバスで出発。ヴィースバーデンを過ぎ、リュデスハイム<sup>いた</sup>に到着し、ライン下りの船に乗る。昔はヨーロッパで見たい所はラインとエディンバラと憧<sup>あこが</sup>れていたが、今どちらもそれ程行<sup>ほど</sup>って見たいと思わなくなった。しかしこんどの旅行団体のコースの中に入っていて、わざわざ抜けて、スイスへ先廻りする程のこともないので、ドイツにも来たのである。ライン河の水も濁<sup>にご</sup>っていることは残念である。ライン河はドイツの工業生産の大動脈である。工業材料を運ぶ船はひっきりなしであり、その上<sup>りょうがん</sup> 両岸に鉄道があり、これも貨物列車が沢山走っている。経済成長は神の刑罰という私の持論<sup>じろん</sup>から考えてドイツの為<sup>ため</sup>に幸か不幸か問題である。しかし工場増設で日本の如く自然を破壊することが少なく、工場の存在が目立たないことは日本より賢<sup>かしこ</sup>いことを示す。公害も日本より少ないであろう。両岸に古城<sup>りょうがん こじょう</sup>が沢山ある。いくら封建時代<sup>(287)</sup>でもこんなに沢山必要<sup>たくさん</sup>だったのかと不思議に思われる。しかし景色はよい。約二時間下ってローレライに到着<sup>いた</sup>。急な崖<sup>がけ</sup>の上に休憩所<sup>きゅうけい</sup>のようなものが建ててある。ローレライの歌をレコードで流す。ローレライを過ぎると直ちにザンクト・ゴアール

スハウゼンに着き、下船し、昼食を取る。休憩後チューリッヒに向かって出発。バスでラインと平行している高速道路を走る。高速道路の両側の樹木が大きくなってドイツの田園がよく見えない。ハイデルベルクの町や大学<sup>(288)</sup>は見えないで過ぎてしまった。ドイツのアウトバーン<sup>(289)</sup>はヒトラーの残した唯一のよいものと言われているが、速く行けて便利であるかも知れないが、沿線の景色の見えない旅等つまらない。

バーゼルでスイス領に入る。近い道を通るのかと思ったら、よい道路を通る為であろう、アール河の谷に出て北上し、チューリッヒ湖から流れ出る河に達して東に曲がってチューリッヒに着いた。スイスに入ってから景色もよく、美しい田園風景が展開されて来た。チューリッヒに着いた時はまだ明るかったが、バスが道に迷ってホテルに着いた時は暗くなった。

#### 8-2-6 ユングフラウ<sup>(290)</sup>

7月2日朝早めにチューリッヒを昨日のバスで出発、インターラーケンに向かう。チューリッヒ湖の見えない高速道路を通過してツーク湖畔に出て、続いてルツェルンに出て美しい湖の畔を走る。それより二つの小さな湖の傍を通り、ブリューニツヒ峠を登り切ると、通って来た湖を遙かに見下ろして眺めがよい。峠を越えて少し行くとブリエンツ湖が見えて、この景色もすばらしい。ブリエンツ湖畔を走って行くとインターラーケンである。インターラーケンとはブリエンツ湖とトゥーン湖との間にある町という意味である。ここでも道を間違えて、登山鉄道の出るインターラーケンオスト駅に着いたのは11時半発の列車にやっと間に合う位であった。登山列車に乗って出発し、二つの谷の合流点であるツヴァイリュッチネンで二つに分かれて登るのであるが、まず西の谷を登る。間もなくラウターブルンネンで一層急勾配の登山列車に乗り換える。ここにすばらしく高い滝が二つある。それで騒がしい(ラウテル)泉(ブルンネン)という名がついたのであろう。滝といい、山あいに見えるアルプスの嶺といい、すばらしい景色である。ウエンゲンを過ぎ雄大なユングフラウの山懐に次第に登山列車がせまって行く時の感じはすばらしい。クライネ・シャイデックで昼食を取り少し休む。ここはアイガー北壁の傍でユングフラウ、メンヒ、アイガーの三峰がよく見える。またアルプホルンという先を地面につけて吹く長いラッパを演奏して貰った。

三番目の登山列車に乗って、ユングフラウヨッホに向かう。ユングフラウとは処女、ヨッホは肩という意味である。最初のアイガー氷河駅まで地表を走るが、それから全部トンネルである。左に曲がって、まずアイガー北壁の真中のアイガー壁駅で止まる。列車を降りて岩をくり抜いた窓から見下ろし景色を眺める。列車に乗って右へ曲がって氷の海駅でまた止まって岩の窓から氷河を眺める。氷河をこんなに間近に見

られるとはすばらしい。トンネルはなおメンヒの下を通過して 3,454m のユングフラウヨッホ駅に達する。気温が低いので持参の衣類を皆身につけた。駅は岩の中であるが、外に出て、すぐ間近のユングフラウ、メンヒ、アイガーを始め、遠くのアルプスの嶺々を眺める。実に雄大である。アルプスの嶺はこれを見て 曙の星と共に声を放ちて歌い<sup>(293)</sup> という言の雄大さを目と肌で味わう事が出来た。

3,000m 以上では走り廻ってもいけない、大きな声を出してもいけないと言われていたが、成程空気が稀薄で動く息が苦しい。帰りはトンネル内の窓のある駅では止まらないで下った。クライネ・シャイデックでは少し雨模様になった。乗り換えて東廻りの鉄道で下る。急斜面まで牧場になっているスイス特有の風景を愛でながらグリンデルヴァルトでまた乗り換える。烈しい夕立で落雷もあり、電車も動かなくなった。別の電車に引っぱって貰って、白く濁った急流に沿って下る。インターラーケンに到着。ブリエントとトゥーンの二つの湖を結ぶ川の畔のホテルに泊まる。

7月3日朝早く散歩に出て、昨日登って行った谷の両側の高い山の間からユングフラウのよく見える所まで行った。美しい眺めではあるが、巨大なる山塊の懐に入っている雄大さは感じられない。自然破壊になるかも知れないが、山頂近くまで行ける登山鉄道は私のような老人にとっては有り難い。おまけに地下にしたので自然破壊にはならないからよい。

トンネル駅の展望窓は外からはさがせない位小さなものである。朝食後バスで出発、トゥーン湖の南岸を走る、シュピーツを過ぎ、トゥーン湖と分かれ、スイスの首都ベルンの側を通り、レマン湖畔<sup>(294)</sup>のローザンヌに出て、ここも湖岸を離れた高速道路を通るのでジュネーヴ湖はジュネーヴに到るまで見られなかった。ジュネーヴに着いてモンブラン橋を渡り、イギリス公園<sup>(295)</sup>で休み近くにつながれている船のレストランで昼食をとり、市内を見物する。ジュネーヴ大学構内の宗教改革記念碑が印象に残る。長い壁面で中央にカルヴァン<sup>(296)</sup>、ファレル<sup>(297)</sup>、ベース<sup>(298)</sup>、ノックス<sup>(299)</sup>の四人の像、西側にクロムウェル等のプロテスタントの偉い人の像がある。カルヴァンは、ルターも同じであるが、福音主義の信仰の基礎となる教義を多く明らかにしてくれたので私達の恩人であるが、一方医学者セルバトゥス<sup>(300)</sup>を死刑にするという誤りを犯している。せつかく宗教改革をして形式主義を壊したのに、教会制度と洗礼と聖さん式とを残したので、キリスト教が戦争を止めさせることも出来ず、唯物論的科学を破ることも出来ない程無力になってしまっている。ルターやカルヴァンの教えているよい事は直接聖書から学ぶことが出来るから、欧米の神学を学ぶよりは直接聖書を学ぶ方がよい。なおスイスはカルヴァンとペスタロッチとルソー<sup>(301)</sup>をスイスの誇りとする三大人物としているとのことである。バスをイギリス公園の側に一時間留めておいて、買い物その他の用足しをすることにし、一時間たってモンブラン橋を渡って対岸（ジュネーヴは湖及びローヌ河によって二分されている。）のパレ・デ・ナシ

オンや ILO<sup>(302)</sup>や WHO<sup>(303)</sup>を見る。そしてその近くのホテル、インター・コンチネンタルに泊まる。千葉真君ジュネーヴに來たり、打ち合わせに來て下さる。

### 8-2-7 モンブランとイタリア湖水地方

7月4日、日曜日、レンタカーで、小関兄の運転で、千葉君も加わり四名で早朝モンブランに向かって出発。直に国境を越えてフランスに入り、高速道路を一路シャモニーに向かう。フランスの平野の農村風景が終わると道路の両側に 2,700m 級の岩山がそびえ立ち、雪はないが白い岩石の山で美しい。シャモニーに近づくと谷が深いので遠くは見えないが、嶺の切れ目から雪を被った高山が時々見える。いよいよシャモニーの谷に入るとモンブランが見える。シャモニーの町の観光課を訪ねたが、前もって調べていた以上の情報は得られなかった。軽い朝食をとり、ロープウェーに乗る。シャモニーは 1,030m であるが、途中一度乗り換えて、終りは、エレベーターで、3,842m のエギーユ・デュ・ミディ（正午に光る針のように光った山の意）に登る。2,800m を二つのケーブルで登ることになる。ロープウェーの上部の端は垂直に近いので岩壁に沿って登るようであった。3,842m の高所よりヨーロッパ最高の 4,807m のモンブランを始め、それに連なる山々を見渡す光景はすばらしい。日曜日であるのでここで四人で集会を持った。さんびか 74 番<sup>(304)</sup>を思いきり大声で歌いたいと思ったが、3,800m の高地では息が切れて歌えないので小さな声で歌い、お話しも小さな声でしなければならなかった。最後に内村先生の初夢を皆で暗誦した。標高 3,842m の地点での無教會的集会は世界最初であろう。気温は低い、日光は強いので、傍には半裸体で寝ころんで日光浴をしている人が多かった。勿論日本語はわからないから、神の大能を讚美する集会とはわからないのであろうが、歌った讚美歌の曲がハイドンのオラトリオ<sup>(305)</sup>天地創造からのものであること位知っている人があってもいいと思う。大自然の中に没入する最大の恩恵は神を知ることではないか。エレベーターと二つの空中ケーブルによってシャモニーの町に降り、昼食をすまして、予定より三時間遅れてシャモニーを出発、フランス、スイス国境の峠を越えてマルティニーの町に下る。シオンを経てブリークに至り 2,005m のジンプローン峠に登る。降り道になって、ジンプローンの集落を通り、スイス、イタリアの国境を過ぎ、ドモドッソラを経てマッジョーレ湖畔に達した。湖畔の景色もすばらしいが、夾竹桃<sup>(306)</sup>の並木があり、低い夾竹桃の一直線の植え込みがあり、それが品種改良されて、葉が見えないくらい花が多く、それも白色や濃赤色<sup>(307)</sup>や、色とりどりのがあり、実に美しい。美しさを満喫する為に車を止めて休んだ。

マッジョーレ湖の西岸を北上し、再び国境を越えてスイス領に入り、ロカルノに達し、高速道路を南下して、暗くなったのでコモ湖に出ないでルガノの町と湖とを過ぎて、五回目の国境通過でイタリアに入りコモの町の予約しておいたホテルに着いた。

コモ湖の南端のイタリア独立の英雄の名をとったカヴール広場にある。ジュネーヴから 380km の強行軍であった。小関兄の優れた運転技術によって無事に完遂出来た。

7月5日、月曜日早朝、コモ湖の東岸を約一時間散歩する。少し早めに出発してコモ湖の西岸をドライブする。両岸の住宅はイタリアンヴィラ風<sup>(308)</sup>で美しい。戻って高速道路に入り、ミラノに行く。ダ・ヴィンチの最後の晩さんのあるサンタマリア・デッレ・グラツィエ教会を訪ねる。教会は見せて貰えたが、月曜日は全イタリアの博物館が休館だといって絵は見せて貰えなかった。この絵を見たいためミラノに来たのであるのに残念であった。その代わりにミラノのドゥオモ（大聖堂）を見て、西南端のリナーテ空港に着き、ジュネーヴで借りたレンタカーを返し、ナポリ行きアリアアの飛行機を待つ<sup>(309)</sup>。それがまた二時間遅れ、ナポリに着いたのは6時半であった。千葉兄の御親類でローマに滞在して、ポンペイの遺跡を研究して居られる大槻泉様<sup>(310)</sup>が出迎えて下さる。タクシーでサンタ・ルチア附近の予約しておいたホテルに行く。女性二人、男性三人の二組になって泊まる。夕食は大槻様に案内して戴いて、卵城の側のナポリ風料理のレストランで食べる。

### 8-2-8 カプリ島とポンペイ遺跡

7月6日、朝カプリ島行きの水の中翼船<sup>(311)</sup>に乗る。30分でカプリ島のマリナ・グランデに着く。地中海の水はものすごく青い。青の洞窟<sup>(312)</sup>行きの発動機船<sup>(313)</sup>に乗り換え青の洞窟の入口の所で、また小さなボートに乗り換え、からだをかがめてやっと通れる入口に入る。中は広く、深さ 22m、入口の水面上は狭く、低い水面下は広がっているので大部分の光は水中を透過して来るので水が青く光りすべてが青く見える。指を水につけてあげると垂れる雫がサファイアのようなものである。しかし何といっても光の量が少ないので青の洞窟の不思議な美しさを十分に味わうには 20 分以上洞内に居て眼をならさなければならぬとのこと、折からの大混雑で 5 分足らずしか留まらなかったのは残念であった。それでも青の洞窟の不思議な美しさも少しは見られた。すばらしい洞窟である。発動機船に乗り換えて、マリナ・グランデに戻り、ケーブル鉄道でカプリの町に登り、バスで島の西部のなほ高い所にあるアナカプリの町まで行き、見晴らしのよい所で地中海の青さ、水のきれいさを見て、グランデに戻り、昼食はパンやハム等を買って、船に乗ってソレントに向かう。カプリ島には夾竹桃も沢山あったが、ブーゲンビレア<sup>(314)</sup>が沢山あってそれが壁や柱に巻きついて赤いブーゲンビレアの壁や柱になっていて美しかった。

ソレントで電車に乗り、ポンペイで下車して遺跡を大槻様の説明で見学する。ポンペイは紀元 79 年にヴェスヴィオ山の噴火の為に火山灰によって埋没したものである。ポンペイも道徳が非常に乱れて居ったとのことである。それ故に神の罰で埋まったものである。火山の噴火と人間の道徳と何の関係があるかとか、もっと道徳の乱れた

町もあるとかという議論は非科学的である。

ポンペイより二千年以前、アブラハムの時にソドム・ゴモラの二つの町が、道德の乱れの故に、天から硫黄と火が降って来て滅びたと創世記にあるが、死海の辺の発掘によって、ソドム、ゴモラの町跡が現れるかも知れない<sup>(315)</sup>。ポンペイから電車でナポリに行き、特急電車でローマへ行き9時頃宿舎サヴォイに着き、スペインを廻って来た団体と合流した。

## 8-2-9 ローマ

7月7日、団体と離れ、千葉兄、大槻様、私共の友人で団体に参加しておられた松田治彦御夫婦と総勢7名で二台のタクシーでヴァチカンに行く。まずサン・ピエトロ寺院の前の広場で円形の柱廊を見る。柱のふくらみ方(エンタシスという)が悪いので美しさを損ねる。左右の円形柱廊の中心が広場に押しつけられていて、そこで見ると四列柱廊の四本の柱が重なって一本に見える。サン・ピエトロ寺院は外部も内部も豪華の一言に尽きる。物質的に金をかけて豪華なものを作っても精神が入ってなければ何にもならない。日本の歌でも、古今集、新古今集となると文学的形式は洗練されて言葉は美しくなったが、精神が抜けて来て、一方言葉遣いは幼稚であっても精神が溢れている万葉集が人を動かす力を持っているのと同じである。一旦ヴァチカンを出て城壁に沿って大部歩いてようやくヴァチカン美術館の入口に達し、途中の絵画等はほとんど素通りして、サン・ピエトロ寺院のすぐ側のシステーナ礼拝堂に入る。左右にある入口より上の壁面一杯に画かれたミケランジェロの最後の審判は、すばらしい等という言を通り越して、物凄いとでも言わなければならない位大きな威圧力をもって観る者に迫っている。罪に対するキリストの強い怒り、法王の形式主義に対するミケランジェロの烈しい怒りが迸り出ている。近寄ったり、遠退いたりしてこの絵だけを30分以上もながめた。天井画もすばらしい。曲面に画かれたものであるから実際を見るまではよくわからなかった。側壁には右側にイエスの生涯六面、左側にモーセの生涯六面の当時の巨匠による傑作があるが、ミケランジェロのものに較べて如何に迫力のない、凡作に見えることよ。芸術というものは「その中に、隠れてはいるがしかし明らかに、ある測り知れない火を持っていて、そしてその火は人間の魂に火をつけ、また火をつけることをいつまでも続ける」というものである。形は整わなくともこの火を持っているものが偉大なのである。特に信仰の火が人間の魂をよく燃やすから、絵画でも、文学でも、音楽でも信仰に基づくものに偉大なるものが多い。今度の旅行の最大の収穫はミケランジェロの最後の審判を見たことである。この感激は実物でなければえられない。美術館のヴァチカンの庭園の見える食堂で昼食をすました。タクシーでパンテオンに行く。円形の建物で丸天井の頂上に丸い穴が開いていて光を取る。周囲の壁に七つの祭壇が作りつけてあった。ミケ

ランジェロはこれは天使の作であって、人間業<sup>わざ</sup>ではないといったとのこと、内部はよく出来ているが外観はそれほどよくない。

それよりテベレ河岸<sup>ぎし</sup>に出て、ユダヤ人のシナゴーク<sup>(316)</sup>を見て、テベレ河にかけられたローマ時代の古い橋を見てカンピドーリオの丘<sup>ふもと</sup>の麓<sup>ふもと</sup>を<sup>ふもと</sup>通<sup>ふもと</sup>って、フォロ・ロマーノの遺跡<sup>いせき</sup>の西端<sup>せいたん</sup>に出た。フォロはギリシャのアゴラ<sup>(317)</sup>に相当し、市民の政治的経済的活動の中心であった。フォロ・ロマーノの角<sup>かど</sup>を曲<sup>かど</sup>がると、コロッセオが見える。有名な巨大な円形闘技場<sup>とうぎじょう</sup>である。コロッセオとは巨大という意味である。半分四階、半分三階の座席<sup>とうぎじょう</sup>に囲まれた闘技場<sup>とうぎじょう</sup>で、地下室<sup>とうぎ</sup>があ<sup>とうぎ</sup>って、そこでは闘技<sup>とうぎ</sup>に用<sup>もち</sup>いる猛獣<sup>もうじゅう</sup>を飼<sup>もち</sup>っていた。床<sup>こ</sup>が崩<sup>こ</sup>れて地下室<sup>とうぎ</sup>の壁<sup>かべ</sup>が見える。時にはここで<sup>キリスト</sup>基督<sup>キリスト</sup>信徒<sup>もうじゅう</sup>が猛獣<sup>もうじゅう</sup>に殺されたのである。ここには観光客<sup>かん</sup>が与<sup>かん</sup>える食物<sup>じき</sup>で野猫<sup>やま</sup>が住<sup>やま</sup>みついでいる。

タクシーでアッピア街道<sup>しきいし</sup>を昔<sup>しきいし</sup>の敷石<sup>しきいし</sup>のある所<sup>しきいし</sup>まで行<sup>しきいし</sup>った。紀元前三百年頃ローマの役人<sup>やくにん</sup>アッピウス<sup>あ</sup>が造<sup>あ</sup>ったもので、東方<sup>とうほう</sup>との交通<sup>とうほう</sup>上<sup>とうほう</sup>最重要<sup>とうほう</sup>の街道<sup>とうほう</sup>である。途中<sup>ちゆうちゆう</sup>カラカラ浴場<sup>よくじょう</sup>の跡<sup>あと</sup>、ドミネ・クオ・ヴァディス教会<sup>はくがい</sup>の前<sup>の</sup>を通<sup>はくがい</sup>った。ペトロ<sup>ペ</sup>が迫<sup>はくがい</sup>害<sup>の</sup>を逃<sup>はくがい</sup>れて来<sup>の</sup>て、ここでキリスト<sup>しゅ</sup>に会<sup>しゅ</sup>い、「主<sup>しゅ</sup>よ、(ドミネ)何<sup>ど</sup>処<sup>こ</sup>に(クオ)行<sup>たも</sup>き給<sup>たも</sup>うか(ヴァディス)。」と聞<sup>き</sup>いたら、「お前<sup>まへ</sup>の逃<sup>にげ</sup>げて来<sup>き</sup>たローマ<sup>ローマ</sup>に行<sup>い</sup>く」とお答<sup>こた</sup>えにな<sup>な</sup>ったので、ペトロ<sup>ペ</sup>は引<sup>ひ</sup>き返<sup>かえ</sup>して、殉<sup>じゆんきよう</sup>教<sup>きよう</sup>したとい<sup>い</sup>う伝<sup>でん</sup>説<sup>せつ</sup>の所<sup>ところ</sup>で、この教会<sup>きこう</sup>はそれ<sup>それ</sup>を記<sup>き</sup>念<sup>ねん</sup>する為<sup>ため</sup>に建<sup>た</sup>てられたのである。後<sup>のち</sup>に、ポーランド<sup>ポー</sup>の作家<sup>さ</sup>シェン<sup>シェ</sup>ケン<sup>ケン</sup>ヴィ<sup>ヴィ</sup>ッチ<sup>ッチ</sup><sup>(318)</sup>が当<sup>た</sup>時<sup>とき</sup>を題<sup>だい</sup>材<sup>ざい</sup>にし<sup>し</sup>て小<sup>せう</sup>説<sup>せつ</sup>を書<sup>か</sup>き、キリスト<sup>キ</sup>信徒<sup>りすと</sup>を迫<sup>はくがい</sup>害<sup>の</sup>したネ<sup>ネ</sup>ロ<sup>ロ</sup>は忘<sup>わす</sup>れら<sup>れ</sup>れて何<sup>なに</sup>も残<sup>のこ</sup>っていないが、迫<sup>はくがい</sup>害<sup>の</sup>された方<sup>ほう</sup>のペ<sup>ペ</sup>トロ<sup>トロ</sup>にはクオ<sup>ク</sup>ヴァ<sup>ヴァ</sup>ディス<sup>ディス</sup>教会<sup>きこう</sup>とい<sup>い</sup>う記<sup>き</sup>念<sup>ねん</sup>物<sup>ぶつ</sup>が残<sup>のこ</sup>っているとい<sup>い</sup>って、暗<sup>くら</sup>にポーランド<sup>ポー</sup>は三<sup>さん</sup>国<sup>こく</sup>に分<sup>ぶん</sup>割<sup>かく</sup>されて亡<sup>ぼう</sup>国<sup>こく</sup>の悲<sup>ひ</sup>運<sup>うん</sup>にあるが、時<sup>とき</sup>が来<sup>き</sup>れば復<sup>ふく</sup>活<sup>かく</sup>するであ<sup>あ</sup>らうとい<sup>い</sup>う事<sup>こと</sup>を示<sup>し</sup>した。第<sup>だい</sup>一<sup>いち</sup>次<sup>じ</sup>大<sup>だい</sup>戦<sup>せん</sup>後<sup>ご</sup>ポーランド<sup>ポー</sup>は独<sup>どく</sup>立<sup>りつ</sup>したが、亡<sup>ぼう</sup>国<sup>こく</sup>状<sup>じょう</sup>態<sup>たい</sup>の時<sup>とき</sup>にも、マ<sup>マ</sup>ダム<sup>ダム</sup>・キ<sup>キ</sup>ュ<sup>キュ</sup>リー<sup>リー</sup>を出<sup>い</sup>し、シ<sup>シ</sup>ョ<sup>ショ</sup>パ<sup>パ</sup>ン<sup>ン</sup><sup>(319)</sup>を出<sup>い</sup>して、強<sup>きやう</sup>国<sup>こく</sup>以<sup>い</sup>上<sup>じやう</sup>のこ<sup>こ</sup>をな<sup>な</sup>した。ア<sup>ア</sup>ッ<sup>ッ</sup>ピ<sup>ピ</sup>ア<sup>ア</sup>街<sup>街</sup>道<sup>道</sup>を少<sup>せう</sup>し戻<sup>もど</sup>り、サン<sup>サン</sup>・セ<sup>セ</sup>バ<sup>バ</sup>ス<sup>ス</sup>ティ<sup>ティ</sup>ア<sup>ア</sup>ノ<sup>ノ</sup>聖<sup>せい</sup>堂<sup>どう</sup>のカ<sup>カ</sup>タ<sup>タ</sup>コ<sup>コ</sup>ン<sup>ン</sup>ベ<sup>ベ</sup><sup>(320)</sup>を見<sup>み</sup>た。初<sup>しゅ</sup>代<sup>だい</sup>キ<sup>キ</sup>リ<sup>リ</sup>ス<sup>ス</sup>ト<sup>ト</sup>信<sup>しん</sup>徒<sup>と</sup>が文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>通<sup>つう</sup>り地<sup>ち</sup>下<sup>か</sup>で集<sup>しゅう</sup>会<sup>かい</sup>を持<sup>も</sup>ったとこ<sup>ところ</sup>である。バ<sup>バ</sup>ス<sup>ス</sup>でコ<sup>コ</sup>ロ<sup>ロ</sup>ッ<sup>ッ</sup>セ<sup>セ</sup>オ<sup>オ</sup>ま<sup>ま</sup>で戻<sup>もど</sup>り、サン<sup>サン</sup>ク<sup>ク</sup>レ<sup>レ</sup>メ<sup>メ</sup>ン<sup>ン</sup>テ<sup>テ</sup>聖<sup>せい</sup>堂<sup>どう</sup>を見<sup>み</sup>てバ<sup>バ</sup>ス<sup>ス</sup>でス<sup>ス</sup>ペ<sup>ペ</sup>イン<sup>イン</sup>階<sup>かい</sup>段<sup>だん</sup>へ行<sup>い</sup>き、ゆ<sup>ゆ</sup>っ<sup>っ</sup>くりこ<sup>こ</sup>こを見<sup>み</sup>て直<sup>す</sup>ぐ近<sup>しん</sup>く<sup>く</sup>の宿<sup>しゆく</sup>舎<sup>しゃ</sup>ホ<sup>ホ</sup>テ<sup>テ</sup>ル<sup>ル</sup>・サ<sup>サ</sup>ヴ<sup>ヴ</sup>オイ<sup>オイ</sup>に帰<sup>かえ</sup>って、千<sup>ち</sup>葉<sup>えい</sup>兄<sup>お</sup>、大<sup>お</sup>槻<sup>お</sup>様<sup>つき</sup>と暫<sup>しば</sup>く語<sup>ご</sup>り合<sup>あ</sup>って再<sup>さい</sup>会<sup>かい</sup>を約<sup>やく</sup>して別<sup>わか</sup>れた。今日<sup>けふ</sup>一<sup>いつ</sup>日<sup>にち</sup>で充<sup>ちゆう</sup>分<sup>ぶん</sup>にローマ<sup>ローマ</sup>を見<sup>み</sup>るこ<sup>こと</sup>が出来<sup>でき</sup>たのはローマ<sup>ローマ</sup>の地<sup>ち</sup>理<sup>り</sup>に詳<sup>しやう</sup>しい大<sup>お</sup>槻<sup>お</sup>様<sup>つき</sup>の適<sup>てき</sup>切<sup>けつ</sup>な案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>のおか<sup>か</sup>げであ<sup>あ</sup>って、今<sup>いま</sup>度<sup>ど</sup>の旅<sup>りょ</sup>行<sup>ぎやう</sup>の最<sup>さい</sup>大<sup>だい</sup>の収<sup>しゆ</sup>穫<sup>かく</sup>であるミ<sup>ミ</sup>ケ<sup>ケ</sup>ラ<sup>ラ</sup>ン<sup>ン</sup>ジ<sup>ジ</sup>ェ<sup>エ</sup>ロ<sup>ロ</sup>の最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>の審<sup>しん</sup>判<sup>ぱん</sup>を心<sup>こころ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>くま<sup>まで</sup>鑑<sup>かん</sup>賞<sup>しやう</sup>出来<sup>でき</sup>たこ<sup>こと</sup>は大<sup>お</sup>槻<sup>お</sup>様<sup>つき</sup>の案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>がな<sup>な</sup>け<sup>け</sup>れば出来<sup>でき</sup>な<sup>な</sup>か<sup>か</sup>ったであ<sup>あ</sup>らう。

## 8-2-10 ギリシャ

7月8日朝9時出発、レオナルド・ダ・ヴィンチ空港に行く。ギリシャのオリムピク航空の飛行機でアテネに行くのであるが、大部<sup>だいぶ</sup>遅<sup>おそ</sup>れて出発し、航空路も南寄りにとってイタリア半島も長靴<sup>ちやう</sup>の甲<sup>かた</sup>の辺<sup>へ</sup>りで越<sup>こ</sup>す位<sup>くらい</sup>であ<sup>あ</sup>って、ギリシャのペロポネソス半島も南部<sup>なんぶ</sup>で越<sup>こ</sup>えた。アテネに着<sup>き</sup>いたのは3時頃<sup>さんじころ</sup>で空港よりバスでアクロポリスを眺<sup>なが</sup>めるに

よいフィラパポスの丘に行き、まずアクロポリスの丘をよく眺め、バスにてアクロポリスに行く。アレオパゴスはアクロポリスへ登る道路の傍にある。ローマのフォロに当たるアゴラはその北側にある。使徒行伝 17 章のパウロのアゴラでの論争に引きつづいてのアレオパゴスでの演説は、当時既に出来て居ったアレオパゴスの役所の方で為されたのであろうとの説があるが、その説より、すぐ近くの演説し易い所で行われたという方が実情に近いのではないか。口語訳でアレオパゴスの評議所とあるのは、その学者の説をとって訳したのであって原文にはただアレオパゴスとだけある<sup>(321)</sup>。

いよいよアクロポリスに登るのである。アクロポリスとは町の高い所という意味で、他の町にもアクロポリスがある。学園の納骨堂のあるところ<sup>(322)</sup>を学園のアクロポリスといってもいいであろう。段を登ると右側にアテーナー・ニーケーの小さな神殿があり、左側にアウグストゥスの女婿アグリッパの像の台座だけがある。なお登るとプロピュライア（前の門）がある。6本のドリス式柱の間を通るようになっている。その右手に画廊、左手に小さな北翼がある。そこを過ぎるとパルテノンの背面と北面が見える。正面と南面はよりよく保存されて居り、パルテノンのすばらしさがよくわかる。正面と背面に各 8 本、南面と北面に各 17 本の合計 46 本のドリス式柱で囲まれ、正面と背面はなお 6 本ずつ柱があり二重になって居り、その内側が内陣<sup>(323)</sup>というかアテナ・パルテノスの像があった所である。

ドリス式は他のイオニア式、コリント式に較べて最も簡単であるが、よく出来ると力強さがある。一本一本の柱のふくらみ方（エンタシス）が申し分なく、縦みぞの幅、柱の太さと高さのつり合い、柱の間隔と太さの割合等これ以上美しくすることは出来ない程よく出来ている。真にウィンケルマンが「高貴なる単純、静かなる偉大」と言ったとおりである。同型の神殿が他にも沢山あるが、それらと較べればパルテノンが如何に優れているかわかる。

北の端にエレクトイオンという小さな神殿があり、その南にカリアティード即ち女人像柱がある。その左から二つめのはイギリスが持って行って、その代わりに複製像を返してくれたもので色が黄色がかっている。パルテノンがすばらしいのでいくらでも見ていたいが 5 時になって閉め出されたので宿舎のキングミノスホテルに行った。

7 月 9 日朝、レンタカーを借りるのに手間取って、9 時過ぎにホテルを出発して、デルフォイに向かう。私達三人と松田様夫妻と五人である。コリント街道をエレウシスまで行き、テーベに出てパルナッソス山の南斜面にあるデルフォイに着いた。デルフォイ遺跡への昇り道の所で車を駐め、ゆるい坂路を登って遺跡に入る。デルフォイの中心であるアポロの神殿は、崩れて、礎石は完全に残っているが、柱は六本残っているだけである。柱頭まであるのは一本しかなく、三分の二位のものが多い。この神殿に「汝自身を知れ」という語が記されて居ったのである。これがギリシャ文化



の基調である。これをソクラテスが己が愚かさを悟れという意味に解して、今日の学問の基礎を立てたのである。ソクラテスの弟子のカイレフォンが、デルフォイの神託を求めて、「ソフォクレスは賢い、エウリピデスはなお賢い、しかし万人の内でもソクラテスが一番賢い。」という神託を得たが、ソクラテスは自分が愚かであると知っているので、ソクラテスより賢い人を見出して神託の誤りを実証しようとして、ソクラテスの賢人遍歴が始まった。そしてその結果賢人達もソクラテスと同じく愚かであるが、賢人達は愚かであることを悟らないでいるが、ソクラテスは自分の愚かであることを知っているのだから、それだけソクラテスの方が賢いのでソクラテスが一番賢いという神託は正しかったということは有名なことである。デルフォイには世界の情報がよく集まるから、それを基とした判断は多くは正しいので、世界から重んぜられたのである。このギリシャ文化の中心であったデルフォイは是非訪れなければならないから、往復 300km 以上の強行軍を敢えて行ったのである。遺跡の片隅の木陰で弁当を食べて休んだ。雨が降り始めたので帰途についた。雨が烈しくなり、スリッパし易いので要心して運転して下さる。ギリシャの舗装道路は大理石の碎石を用いるせいか他よりスリッパし易いと見えて死亡交通事故が起こっていた。多分ギリシャの道路のすべり易さを知らない外国人であろう。ギリシャ北部への高速道路を経てアテネに帰った。

7月10日コリントに行きたかったが休養することにして手紙書きをする。午後1時宿舎を出てアテネ南部のエリニコン空港に向かう。初めの日本よりロンドンまでの飛行機の他は皆二、三時間遅れたが、こん度は日航だから遅れないだろうと思い、かつ予定の時刻に搭乗したから大丈夫と思った所、数日前カイロ行き乗客がハイジャックをしたとのことで、カイロ行き乗客の身元調査が厳重になり、一時間待っても疑いが晴れないで残留させられて一時間遅れで離陸、カイロ上空でピラミッド群を見ることが出来た。カイロは一時間遅れで離陸したが日がくれて来たので間もなく景色は見えなくなった。カラチではエンジン調整のため一時間遅れ、二時間あまり遅れで離陸し、ムンバイに着陸し、バンコクに着陸した。バンコクでは飛行機を出てロビーで休むことが出来た。バンコクを出発して一路羽田に向かう。二時間半の遅れのまま羽田には12日午前零時5分着陸、夜遅いので迎えの方々を当てにしてなかったのに、書上君<sup>(324)</sup>は税関の中まで来ていてくれて、何かと通関の世話を下さったし、税関の外では今野先生、山野上君、岡藤君等が待っていてくれたのでほんとに嬉しかった。私共三人は書上君の車で政池先生宅まで送って貰った。政池先生宅に着いたのは、午前2時であった。政池先生宅でも遅くまで待っていて下さった。遅くなったのでつもる話を切り上げて寝ることにした。

12日朝10時4分の特急で帰校した。小関兄は荷物の都合で後の列車でお帰りになった。

## 8-2-11 終わりのことば

この旅行の計画に当たって、卒業生達がこれをささやかにして偉大なる計画と言った。

私共はこの世からは忘れられているつまらないものであるが、宇宙の創造主なる神を信ずるもので我らこの宝を土の器うつわに持てりである。

我らは最大の美を求め、最高の真理を求めるものである。宇宙稀まれに見る文化の跡を探る卒業生諸君さくぎゅ<sup>(325)</sup>の愛によるこのヨーロッパ旅行は、ほんとうにささやかではあるが神につながるものとして偉大なるものであった。多くの貴とうとい収穫を得て終えることが出来て感謝である。また私共老夫婦の体力を心配して小関様こせきに御願おいして同行して戴いただいた位であったが、疲れてもしまわず元気で旅行出来て感謝にたえない。

卒業生諸君、小関様こせき、千葉様、大槻様おおつきへの心からの感謝をもってこの旅行記を終える。

(1976年8月)

## 【 註・VIII章 】

- (1) 学園内校長室<sup>お</sup>に於いて行われたという意味。読まない文字なので読み仮名は付けていない。
- (2) 鈴木ひろ（1907～1995）、鈴木<sup>まさいけ</sup>の妻。旧姓は政池。
- (3) 織物<sup>おりもの</sup>の名前。元は輸入された物だが、後に国内、特に甲斐<sup>かい</sup>（現在の山梨県）地方で生産された。
- (4) 尋常<sup>じんじょう</sup>小学校。旧制の小学校。設置当初の就業年限は4年だったが、鈴木<sup>まさいけ</sup>の在学中に6年に変更された。
- (5) 静岡県御殿場市<sup>ごてんば</sup>。
- (6) 確証はないが、静岡県駿東郡小山町<sup>すんとうぐん おやまちょう</sup>竹之下<sup>たけのした</sup>にある「宝鏡寺<sup>ほうきょうじ</sup>」のことと思われ、その住職<sup>じゅうしやく</sup>が名付け親ということだと思われる。
- (7) 吉田は現在の山梨県富士吉田市、谷村<sup>つる</sup>は同・都留市、猿橋<sup>おおつき</sup>は同・大月市のことと思われる。
- (8) 現在の山梨県大月市七保町<sup>おおつき しなな ほまち</sup>葛野<sup>かづの</sup>。鈴木が生まれた当時の住所は、山梨県北都留郡七保村<sup>つる なな ほむら</sup>大字<sup>おおあざ</sup>葛野<sup>かづの</sup>。
- (9) 神奈川県小田原市の地名。
- (10) 神奈川県足柄上郡山北町<sup>あしがらかみぐん やまきたまち</sup>。国府津<sup>こうづ</sup>から御殿場<sup>ごてんば</sup>に向かう御殿場線<sup>ごてんば</sup>沿線の町。
- (11) 現在の山北<sup>やまきた</sup>駅から御殿場<sup>ごてんば</sup>駅までは約20km。
- (12) 現在の静岡県駿東郡小山町<sup>すんとうぐん おやまちょう</sup>のことと思われる。2021年現在でも、御殿場線<sup>ごてんば</sup>の駿河小山<sup>するが おやま</sup>駅前<sup>まえ</sup>にフジボウグループの工場がある。
- (13) 企業名。
- (14) レール上を走る馬車。馬車鉄道とも。御殿場<sup>ごてんば</sup>（始発駅は別）から籠坂峠<sup>かごさかとうげ</sup>を越え大月<sup>おおつき</sup>に至る<sup>いた</sup>鉄道馬車があった。
- (15) 山中湖の南、山梨県富士吉田市<sup>とうげ</sup>にある峠<sup>とうげ</sup>。一部は静岡県との県境<sup>けんきょう</sup>となっている。最高地点は標高約1,100m。
- (16) 「籠坂峠<sup>かごさかとうげ</sup>の上」がどこかは不明だが、仮に峠<sup>とうげ</sup>の頂上<sup>ふきん</sup>附近にある「加古坂神社<sup>かごさか</sup>」を起点とすると、現在の山中湖村役場までは約2km、大月線の下吉田駅までは約15km。
- (17) 吹き降り<sup>ふきぶ</sup>。強い風とともに激しい雨が降ること。
- (18) 富士山麓<sup>さんろく</sup>の北東に広がる広大な草原の名。現在はこの中に自衛隊北富士演習場<sup>なしがはら</sup>がある。山梨県山中湖村のホームページでは、指定文化財としての富士山の所在地を山中湖村<sup>なしがはら</sup>梨ヶ原<sup>なしがはら</sup>としている。
- (19) Der Erlkönig、ゲーテの詩。日本語名は『魔王』。エルケーニヒとも。嵐の夜、父親<sup>ちち</sup>が子<sup>こ</sup>を抱いて馬を走らせるが、最後には子は死んでしまうという内容。
- (20) 鈴木<sup>つぎ</sup>の原文では「槻<sup>つぎ</sup>」。槻<sup>つぎ</sup>はケヤキ<sup>こめい</sup>の古名。
- (21) 天野隆治<sup>あまのりゅうじ</sup>の家のことだろう。
- (22) 1990年3月に廃校となり、同年4月中央区立日本橋小学校に統合された。
- (23) 東京都港区三田<sup>みた</sup>。
- (24) 神奈川県横浜市港北区<sup>こうほく</sup>。
- (25) 日本国有鉄道。

- (26) 読みは推測による。
- (27) 極めて丈夫で健康な体のこと。
- (28) ある分野の書物を集めて大きくまとめたもの。
- (29) 不明だが、川合貞一（1870～1955）のことか。
- (30) 現在ではハチ目とすることが多い。
- (31) 現在ではチョウ目とすることが多い。
- (32) 現在ではハエ目と。ハエ、蚊、アブの類。
- (33) 現在ではカメムシ目とすることが多い。セミ、カメムシの類。
- (34) 現在ではバッタ目と。
- (35) 詳細不明。トンボは現在ではトンボ目に分類される。
- (36) 現在ではトビムシ目と。
- (37) 動物が卵から孵化し、幼虫から成体に成長する過程で、その形態を変えていくこと。たとえば、サナギが蝶になることや、オタマジャクシがカエルになること。原文では「変体」と表記。
- (38) 現在の群馬県桐生市。
- (39) 旧制の工業専門学校のこと。桐生高等工業学校。
- (40) 日本の写真総合メーカー。後のコニカ、現在のコニカミノルタ。
- (41) (1897～1985)、政治家、実業家。日中関係改善に注力した。
- (42) (1897～1981)
- (43) 第八高等学校。
- (44) (1871～1935)
- (45) 硬質ゴム。硬化ゴム。
- (46) 現在の教室のこと。
- (47) 昭和元年。
- (48) 理系の学士。学士は、大学の学部を卒業した者に与えられる学位。
- (49) 1907年11月から内村が暮らした、ほぼ現在の東京都新宿区西新宿と北新宿のあたりの地名。内村がその前に住んでいた角筈（現在の西新宿や歌舞伎町の一部）の近く。内村が柏木の自宅敷地内で毎日曜に開いた集会在、柏木聖書研究会（柏木集会）。
- (50) 主たる聖書講義の前に行われる講話。
- (51) 石原兵永。
- (52) 内村の書生（住み込みで家事を手伝いながら勉強する者のこと）。ジョンは通称で、本名は福田襄三と思われる。福田家は内村が角筈に住んでいたところの隣家であり、襄三の父は牧師。1922年3月6日の内村の日記（内村鑑三全集 34巻 p.24）によれば、福田襄三は内村の娘「故ルツ子の秘蔵の赤ん坊」であり、ルツ子が亡くなった後に書かれた「ルツ子の性格」（内村鑑三全集 19巻 p.62）に登場するルツ子に懐いた隣家の子は福田襄三のことであろう。1924年12月23日の内村の日記（同 34巻 p.386～p.387）によれば、福田は内村夫妻の結婚記念日を祝う「家庭の小晩餐会」に内村夫妻、長男夫妻、姪二人、甥一人と共に参加している。この中に「福田ジョンは23歳」とあるため、1901年あるいは1902年生まれであり、1899年生まれの鈴木より

- も若干年<sup>じやっかん</sup>少と推定される。ただし、1923年7月11日の内村の日記（同34巻p.199）には「書生のジョン東北伝道旅行より帰り」との記述があることから、1924年1月27日に内村の聖書研究会に初めて出席した鈴木よりも、福田のほうが聖書研究会の中では先輩的立場だったのであろう。1923年2月18日の内村の日記（同34巻p.147）によれば、福田は内村を「小父<sup>おじ</sup>さん」と呼んでおり、両者の非常に親しい関係性がうかがい知れる。明治学院<sup>しん</sup>神学部を卒業した福田は1926年4月16日に渡米<sup>とべい</sup>した。この日の内村の日記（同35巻p.41～p.42）からは、内村が福田の渡米に対して一定の理解を示しているようにも読めるが、1926年8月17日付の内村の手紙（同39巻p.266）には、「福田のジョンは既に大神<sup>すで</sup>学者に成り、更に大学<sup>しんがく</sup>者に成らんが為<sup>な</sup>に柏木<sup>さら</sup>には塵<sup>な</sup>をかけて揚々<sup>かしわぎ</sup>として渡米<sup>ちり</sup>しました、小供<sup>よぼう</sup>の如く<sup>とべい</sup>に彼<sup>こども</sup>を愛<sup>ごと</sup>せし我<sup>われ</sup>供<sup>ら</sup>両<sup>り</sup>人<sup>りょうにん</sup>に取り<sup>しんつう</sup>ては大なる苦痛<sup>しんつう</sup>でありました」とあり、福田との別離は内村（夫妻）に多大な心痛を与えたようだ。
- (53) 宝田一蔵<sup>ほうだい</sup>の妻<sup>いづむ</sup>・宝田あいのこと。この後の久米<sup>くめ</sup>さんについては詳細不明。
- (54) イギリスで刊行されていた英語の書籍。後に鈴木が独立学園の職員にギリシャ語を教えた際にも使用した。
- (55) 東京都世田谷区の地名。
- (56) 後にハデルストンのギリシャ語文法書を翻訳した。独立学園旧職員・片山達夫の父。
- (57) 第六高等学校。岡山市にあった官立の旧制高等学校。1949年に新制の岡山大学に統合された。
- (58) イタリア語。
- (59) 召し上がった、食べたの意。
- (60) 女子高等師範<sup>しはん</sup>学校の略<sup>かんりつ</sup>。官立の旧制学校で、女子中等教員を養成した。現在のお茶の水女子大学の前身。鈴木ひろは1928年3月に東京女子高等師範学校理科を卒業。
- (61) 人文科学、社会科学に関する分野。いわゆる文系。
- (62) 自然科学に関する分野。いわゆる理系。
- (63) 湯沢<sup>ゆさわ</sup>健。独立学園創立時の理事兼講師。結核の研究者。
- (64) 鱒崎<sup>つれさき</sup> 轍<sup>おる</sup>。独立学園初期の評議員。
- (65) 横山喜之<sup>よしゆき</sup>のことだろう。横山は1924年7月、内村の呼びかけによる小国伝道<sup>おぐに</sup>に最初に参加した一人。当時は医学部生。
- (66) 不明だが、1928年11月8日に内村の司式により内村の妻の姪<sup>めい</sup>・岡田花枝と結婚した医学士・梅田薫のことか。（内村鑑三全集35巻p.383）
- (67) 1929年5月19日（日）。礼拝中の祈祷<sup>きとう</sup>は内村が担当。（内村鑑三全集35巻p.453）
- (68) 英語表記は general solution。パティキュラーソリューション（特殊<sup>とくしゆ</sup>解）の英語表記は particular solution。鈴木はパテキュラーと表記。
- (69) 柏木<sup>かしわぎ</sup>、すなわち内村邸<sup>てい</sup>の一部<sup>よげん</sup>。予言寺<sup>よげん</sup>には内村の書齋<sup>しょさい</sup>があった。内村邸には母屋<sup>おもや</sup>、予言寺<sup>よげん</sup>、集会場（今井館<sup>むね</sup>）の三棟<sup>むね</sup>があった。
- (70) 横山喜之<sup>よしゆき</sup>。
- (71) 小池<sup>なおい</sup> 兌。小国伝道に参加した後、小池は南カリフォルニア大学へ留学。翌1928年に小国伝道を行った鈴木と政池<sup>まさいけ</sup>は、前年に小池の聖書講義を聴いた小国<sup>おぐに</sup>の青年男女数名に書いてもらった寄せ書きをアメリカの小池<sup>なかい</sup>に送り、半ばホームシックだった小池を大いに元気づけ、喜ばせた。

- (72) 羽前沼沢駅のこと。沼沢は小国町の地名で、叶水や市野々方面から桜峠を越えて北東に進み、国道 113 号線に合流するあたり。鈴木の小国伝道当時の米坂線は羽前沼沢駅が終着駅で、沼沢、市野々、叶水、大石沢はこのころ津川村だった。現在の羽前沼沢駅は、米坂線で米沢方面に向かって、独立学園の最寄りである伊佐領駅の次の駅。
- (73) 小国町の地名。現在、飛泉寺の大銀杏（通称・大銀杏）のあるあたり。横川ダム建設により全世帯が移転した。
- (74) 本拠地とは別に建てられた学校。分校。
- (75) 二渡戸生まれで、二渡戸に住み、教職の最後は校長を務めた。独立学校・独立学園の支援者で、長男は独立学校の生徒だったが応召し戦死した。その他の子ども 6 人、孫 5 人が独立学園の卒業生。なお、分教場のあった市野々から独立学園までは現在の道で約 2.5km（桜峠の分岐から計測）。独立学園から大石沢川沿いを現在の道で約 2km 上ると伊藤邸があった二渡戸に至る。当時は市野々と叶水をつなぐトンネルなどなく、現在よりも道が曲がりくねっていたので、現在よりもだいぶ遠かったはずで、分教場から伊藤邸までは 5km 以上あったと思われる。
- (76) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (77) 小国駅から比較的近くの橋のたもとにあった。川沿いにあったため、1967 年の羽越水害の際は被災し、建物の半分が川に落ちた。
- (78) 染屋は屋号。政池と仲良しとなり小国伝道の継続要因となった越後屋と染屋の二人の子は、鈴木が最期に入院した際、小国病院の鈴木を見舞った。
- (79) 広くいきわたるように分けたり配ったりすること。
- (80) 小国伝道が始まった 1924 年と 2020 年では、企業物価指数（戦前基準指数）は約 505.8 倍になっていることから、企業物価指数から単純計算すれば、当時の 20 円は現在の 1 万円ほどの価値があったと考えることができる。また、初任給（大学卒程度）は、約 3,100 倍～約 4,370 倍になったという資料から単純計算すれば、当時の 20 円は現在の 6 万円～9 万円ほどの価値があったと考えることができる。また、前出の「日本円消費者物価計算機」によれば、当時の 20 円は 2019 年の 26,639 円～32,212 円となる。大きな差があり参考にならないかもしれないが、目安として記述した。
- (81) 内村関係の著書多数。独立学園初期の評議員。
- (82) 独立学園のすぐ側を流れる滝川の北側が下叶水、南側が上叶水。現在の独立学園の校舎は下叶水、新グラウンドは上叶水に位置する。
- (83) 現在の叶水小中学校、当時の叶水尋常高等小学校。尋常科と高等科とが併設されていた。
- (84) 諸説あるが、おおむね「勝れた友」の意と思われる。
- (85) 1890 年（明治 23 年）に編纂された曹洞宗の経の一つ、修証義の第三章、受戒入位にあることば。
- (86) 下叶水の、現在の津川橋付近。
- (87) 小国町の北部、朝日連峰側のこと。
- (88) 小国町の南部、飯豊連峰側のこと。
- (89) 小国町の東部、独立学園があるあたりの昔の地名（村名）。

- (90) 小国町の地名。叶水方面から子持峠を越えた先、国道 113 号線に合流するまでの東側あたり。現在の主要道路では、叶水方面から子持トンネルを越えた先から、国道 113 号線に合流するまでの右手側あたり。
- (91) 子持峠。現在は廃道。
- (92) 旧制で、尋常小学校の上にあたる学校。
- (93) 現在の山形県東置賜郡川西町。
- (94) 現在の山形県立置賜農業高等学校のことか。
- (95) 1929 年 9 月 15 日（日）の内村の日記に「小国伝道組の帰途訪問」についての記述がある。また、同年 9 月 13 日（金）の日記にも小国伝道についての記述がある。（内村鑑三全集 35 巻 p.495 ~ p.496）
- (96) 新潟県上越市。
- (97) 榊本忠雄の兄。1931 年 8 月には鈴木が榊本誠一を連れて小国伝道をした。
- (98) かつての世界最大の写真用品メーカーの名前。
- (99) Charles George Gordon (1833 ~ 1885)、イギリスの軍人のことと思われる。鈴木はゴールドンと表記。
- (100) Ulysses Simpson Grant (1822 ~ 1885)、アメリカ南北戦争時の北軍の将軍、第 18 代アメリカ合衆国大統領のことと思われる。グラントは大統領退任後、1879 年に国賓として来日。
- (101) 白黒写真を自分で暗室でプリントする際の技術。手や紙などを使って印画紙に当てる光の量を増減させることで、写真の濃淡を調整する。元々はっきり写っている家のところはなるべく光が当たらないようにし、元々はっきり写っていない浅間山のところには強く長く光を当てることで、家の部分を必要以上に濃くせずに、浅間山だけを濃く焼き付けることができる。覆い焼き、焼き込み。
- (102) この件については内村の 1929 年 9 月 25 日 ~ 9 月 28 日までの日記に集中的に言及されている。（内村鑑三全集 35 巻 p.500 ~ p.501）内村の記述によれば、内村がその手紙の差出人を退会させた。
- (103) 意味は不明。
- (104) 名古屋常治。内村門下で、鈴木の前輩。事業家。
- (105) 鈴木と同年代で、鈴木ととても親しい間柄だった。政池仁の結婚式でも司式を務めた。1934 年の基督教独立学校創立式典に出席し、祝辞を述べている。
- (106) 内村の召天は 1930 年 3 月 28 日。
- (107) 日本工業倶楽部。東京駅丸の内北口を出てすぐにある。
- (108) 俗に、金持ちのこと。
- (109) 現在は西田町という地名はなく、成田西や荻窪となっている。
- (110) 原書には泰治郎とあるが、誤植と思われる。
- (111) 神奈川県藤沢市。
- (112) 東京都杉並区。
- (113) David Livingstone (1813 ~ 1873)、イギリスの宣教師、探検家。奴隷貿易の廃止に貢献し

- た。
- (114) 内村の「独立五十年」という文章に以下の記述がある。「私は信仰の初めより独立を決心した。基督教は之を信ずるも外国宣教師の指揮の下に信ぜじと決心した。殊に外国人の金銭的援助を受けて伝道せざるべしと決心した。そして五十年後の今日に至るまで大体に於て此決心を実行し来つた。そして日本人にして基督教の伝道を助けて呉れる者は至つて少数であるが故に、実際の所、私は私自身に頼るより外他に途が無つた。饑餓に瀕した事は幾回もあつた。三度餓死の決心を為した。(後略)」(内村鑑三全集 31 巻 p.197) また、1924 年 12 月 23 日の内村の日記には、「僕の奥さんに別に取所はないが、僕と共に主義の為に今日まで三度餓死の決心を為した。それ丈は誉めてやつて貰ひたい」という内村の言葉が記されている。
- (115) 農民の労働条件やさまざまな社会問題などの改善・解決に向けて、農民自らが団結して組織的に行った運動や闘争のこと。
- (116) 数人が順番に一冊の本を読み、互いに解釈を述べあったり、論じ合ったりする会。
- (117) Edward Everett (1794 ~ 1865)、アメリカ合衆国の政治家、ハーバード大学学長。
- (118) 現代では英文学と米文学を区別するため、正確には米文学、あるいは英米文学と表記すべきと思われる。
- (119) 1-2 の註に記した通り、リンカーンの言葉という説もあるが、そうでないという説もあり、真偽は不明。
- (120) 独立学園の構内を走る町道を、畜舎を右手(北側)に見て進んで行き、県道に突き当たった左手(東側)の地区名。
- (121) 独立学園と隣接する山崎地区の住人。台湾に行っていたこともある知識人だった。
- (122) 仙人が住むところ。世俗を離れた清らかなところ。
- (123) 山形県西置賜郡飯豊町手ノ子。JR 米坂線の駅。小国駅から米沢方面に向かって 4 駅目、伊佐領駅からは 2 駅目。米沢方面からは、宇津峠の先の駅となる。
- (124) 旧姓・鈴木和子、現・今野和子。鈴木夫妻の子で、独立学園一期生。本書 PDF 版の監修者。
- (125) 渡部伊佐次家は、沢中集落にあった旧家。米坂線が羽前沼沢駅までしか開通していなかった時代、列車を利用する叶水を含む現在の小国町の東部地区(旧・津川村)の人々の足場となっていた。渡部伊佐次と渡部弥一郎とは遠縁にあたる。鈴木も小国伝道の際に何度も渡部伊佐次家に宿泊したが、それは鈴木のかのみの葉水伝道の初期からの良き理解者である渡部弥一郎の紹介による可能性が高い。なお、伊佐領駅ができた後、バスが開通するまでは、叶水を含む現在の小国町の東部地区(旧・津川村)の人々が鉄道を利用する際は伊佐領駅まで歩いた。独立学園から伊佐領駅までは、現在の道で約 9km。特に冬期は、伊佐領駅に着くと駅のすぐ近くにあった渡部伊佐次の弟・渡部好が経営していたくみあい商店で休憩や着替えをして、それから汽車に乗ることが多かった。
- (126) 羽前沼沢駅から桜峠まで、沼沢、白子沢、沢中、桜と集落が続き、桜峠を越えた先が市野々だった。現在は、沢中、桜、市野々に人は住んでおらず、集落としては残っていない。
- (127) 市野々にあった橋の名前。
- (128) 伊佐領駅近くの地名。現在、南陽市方面から独立学園へ行く際、国道 113 号線から横川ダム



- ・独立学園方面への入り口にあたる。
- (129) 創世記 11 章 31 節。
- (130) アメリカ人のペルトン (L. A. Pelton) が考案した水車。
- (131) 50 周年記念館前にコンクリート製の取水口跡が残っている。
- (132) 漆などの塗料を塗る前の、木でお椀の形を作っただけのもの。
- (133) 現在の山形県東根市関山のこと。
- (134) 1948 年の独立学園創立式で式辞を述べた大江留吉のこと。
- (135) 商売に向かない者が商売をすること。明治維新の後、武士だった者が商売などの事業に失敗したことから。
- (136) 実際は三人。
- (137) 失業者や貧しい人に仕事を与え、それによって生活できるように助けること。
- (138) James Watt (1736 ~ 1819)、イギリス (スコットランド) の技術者、発明家。実用的な蒸気機関を完成させ、産業革命に絶大な影響を与えた。
- (139) Richard Arkwright (1732 ~ 1792)、イギリス産業革命期の発明家、企業家。初の本格的な紡績機である水力紡績機を発明した。
- (140) 糸を紡ぐこと。動植物などの繊維を加工して糸にすること。
- (141) 統制経済とは、国家が経済活動を規制したり計画化したりすることで、自由な経済活動に干渉すること。
- (142) ドイツ語の Hinterland。後背地。一般に、港の背後にある陸地のこと。港や都市の経済的勢力圏であり、港湾や都市が存立する基盤となる地域のこと。d の発音表記はトとドの二つがあり、鈴木はドとしているが、広辞苑 (第 6 版) の表記に従ってヒンターラントと表記した。以後同じ。
- (143) 独立学園から現在の道で 1km あまり離れたところの土地のことと思われる。一本松と呼ばれる独立学園構内の山は、その土地と交換して入手した。
- (144) 複数の学年を一つに編成した学級。児童生徒数が少ない学校で行われる。
- (145) 恵泉女学園。
- (146) (1877 ~ 1953)、キリスト者、教育者、日本 YWCA の創始者。新渡戸稲造や津田梅子に師事。札幌でサラ・C・スミスが開設した女学校 (現・北星学園女子中学高等学校) を卒業。1898 年に渡米。帰国後、津田英学塾教授。1929 年、キリスト教主義女子教育を目指し、恵泉女学園を創立した。戦後、教育刷新委員会委員となり旧・教育基本法の制定に関わった。
- (147) 賀川豊彦 (1888 ~ 1960)、キリスト教社会運動家。1941 年 3 月、賀川と河井は他 5 名と共に、アメリカのキリスト者と平和の祈りを共に捧げるために派遣され訪米。なお、メンバー中、女性は河井のみだった。
- (148) 平時に故郷などにいる軍人が、戦時などに際して招集され、特定の場所に集まること。
- (149) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (150) 大砲などの口径の大きな火器を使って敵を攻撃する陸軍の兵。
- (151) 兵器や弾薬を製造する軍直属の工場。

- (152) 「で」みたものを、「が」みたものとする、よりわかりやすいと思われる。(陸軍の砲兵工廠がみたものと、航空本部がみたものと、海軍がみたものと、一つのものを三ヶ所がみていたものですから三倍に勘定していただけます。)
- (153) 軍隊内の部署のようなもの。歩兵・騎兵・砲兵・工兵など。
- (154) 航空技術のこと。
- (155) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。以後同様。
- (156) 代表者のこと。
- (157) 個人の良心に基づいて、戦争への参加や兵士としての義務の遂行を拒否すること。兵役拒否は国家に対する反逆行為とされ死刑などの厳罰が与えられていたが、人権(良心の自由)尊重意識の高まりにより、第一次大戦ころから欧米を中心に兵役拒否を認める国が現れた。現在、良心的兵役拒否が認められる国は、欧州を中心に30カ国ほどと言われる。
- (158) 目立つために意識的にする行為。
- (159) (1877 ~ 1968)、現・岩手県花巻市出身の無教会キリスト者、内村の弟子。小学校の訓導(教員)であった齋藤は、日露戦争の際の内村の非戦論に影響を受け、納税拒否や兵役忌避による非戦の決意を固めた。しかし、それに反対した内村は1903年12月19日に花巻の齋藤を訪問。内村の「真理と真理の応用を混同すべからず」との説得により齋藤は翻意したが、時すでに遅く、最終的に退職に追い込まれた。翌12月20日に行われた内村の講話に関する詩(作者は「参会者の一人」)が「聖書の研究」48号(内村鑑三全集12巻p.29以降)に収録されている。齋藤はたびたび内村に苺を送っており、その礼状が内村全集に多数収録されている。(内村鑑三全集33巻p.119以降)1926年に上京し内村のそばに仕え、内村が死の床についていた際には内村の隣室に泊まり日夜看病に尽くした。齋藤は宮沢賢治と親交があり、そのため宮沢の「雨ニモマケズ」の中の「デクノボー」のモデルを齋藤とする説があるが、真偽は不明。なお、原書で鈴木は齋藤と表記しており、内村は齋藤とも齋藤とも表記している。
- (160) 律法に厳格で、排他的・形式的なユダヤ教の一派。新約聖書の中でイエスに偽善者と断じられている。
- (161) (新共同訳)「ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』」(ルカによる福音書18章11節~12節)
- (162) 内村の門下生で、鈴木と年齢が近かったようである。平山の娘と鈴木は同い年。1924年3月8日付で内村が平山清という人物に宛てて「いつまでも君と霊交を続けたくあります」(内村鑑三全集39巻p.138以降)という手紙を送っているが、文中の平山と同一人物かは不明。
- (163) 多くの部分が互いにつながりあいながら、統一された全体を形成している様子。
- (164) (新共同訳)「殺してはならない。」(出エジプト記20章13節)モーセの十戒の一つ。
- (165) 様子や行動のありさま。
- (166) 1941年に山形県の上山警察所長に就任。後に山形県警本部長となったようである。内村の門下生とまで言えるかは定かでないが、教会に属しつつ内村に高い関心を持ち、警察内で内村関

- 連の聖書研究会を開いてさえいた。また、当時問題視されていた矢内原やないはらの講演会を山形で開き、  
 特高課警部補でありながらその司会を務めた。(本註は、『図書』2017年8月号、10月号に加藤典洋のりひろ  
 が寄せた「大きな字で書くこと その2」を参考にして作成した。なお、鈴木を内偵しないてい、日本ほうの方  
 が悪いから日本が負けると鈴木に言われて青い顔をして帰った(本書8-1-6参照)のが、当時小国  
 警察署に勤務していた加藤の父。)
- (167) 山形県新庄市。
- (168) この方法で。
- (169) 旧日本陸軍にあった軍事・行政。司法警察。またその任にあたった軍人。国民生活全体を監視し、思想弾圧などを行った。
- (170) 目上の者から下の者に与えること。
- (171) 天皇のことば。明治憲法下で、天皇が臣民しんみん(天皇の下にある人民)に対して発表した意思表示。ここでは軍人勅諭ちよくゆのこと。
- (172) 天上にあって万物を支配する神のこと。
- (173) 初代から先代までの、代々の君主の総称。くんしゆ
- (174) 慇懃いんぎん。丁寧ていねいで礼儀正しいこと。
- (175) ホーリネスは、キリスト教プロテスタントの一派。鈴木ひろは捕らえられていた人を米沢市よねざわ  
 から来た牧師と述べているが、治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟山形本部の記録(2010  
 年)によれば、実際は鶴岡市の西田奈津子牧師。本書6-5の註に記した米田豊よねだゆたか牧師の晩年の再  
 婚相手で、結婚後は米田奈津子となった。つるおか
- (176) 少尉しょうい・中尉ちゆういの上、少佐しょうさの下の階級。よねだ
- (177) 台湾出身の医師。内村門下で鈴木のりひろの先輩。東京で開業していた。1943年8月26日から30  
 日にかけて、医師のいない叶水地区を政池仁まさいけじんと共に訪れ、地域の方々を診察したこともある。黄  
 の娘そうび・聡美は10-2-20に登場する伊藤邦幸くにゆき医師の妻。
- (178) スパイの娘という悪口。
- (179) JR米坂線よねさか、羽前松岡駅付近うぜん。小国駅と伊佐領駅いさのりやまの間の駅。
- (180) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (181) 戦後、1948年に発足した現在の高等学校ほっそくの制度。
- (182) 1期生の入学者は10名だったが、新聞で紹介された後に6名が転入学し16名となった。し  
 かし、文部省による法人の認可が得られず廃校届を出した1年目の終わりに7名が県立高校に転  
 校し9名となった。その後、村山県知事の尽力じんりよくにより文部省の認可を得て正式に高等学校とな  
 り、最終的にはこの9名が1期生として卒業した。
- (183) (1903～1990)、英文学者、評論家ずいひつ、随筆家か。
- (184) 岩波書店から1949年に発刊された書籍。副題は「イギリスの学校生活」。独立学園高校が発  
 足した1948年の翌年の刊行であるので、厳密には「はじめから」ではなく、「ごく初期から」と  
 いうことだろう。
- (185) イギリスの富裕階級ふゆうのための私立の中等学校。古い伝統があり、生徒は寮生活を送る。
- (186) 16期生は30名、17期生は29名が入学。

(187) 西村秀夫（～ 2005）、西村董子夫妻。独立学園高校の最初の 3 年間に、高等学校としての基礎を作った。西村秀夫は、旧制第一高等学校在学中に三谷隆正、塚本虎二（共に内村の弟子）などの聖書講義を聞き、矢内原発行の聖書雑誌・嘉信を購読するようになった。東京帝大（東大）理学部（化学専攻）に入学後、東京帝大教授だった矢内原の日曜家庭集会へ入会。キリスト者・矢内原忠雄という人格に出会うことによって、自身の最も深いところで変えられる経験をした。1941 年、戦争のために大学を繰り上げ卒業となり、直ちに陸軍兵器学校へ入隊。翌年、陸軍技術中尉として中国東北部の兵器工場へ赴任し、中国人集落に住み込んだ。その後、一時帰国し、矢内原の司式で下永董子と結婚。1945 年 8 月、敗戦に際し集団自決の危機に瀕したが、友人や中国の農民に助けられて生き延びた。中国の人々が西村を助けたのは、戦中も西村が中国の人々を差別や虐待することなく同じ人間として接していたためだった。1946 年 7 月に帰国し、厚生省衛生試験所に勤務。1948 年 4 月に 29 歳で独立学園に着任し、高等学校開校時から初代教頭となった。まだ十分に教科書が普及していなかったため、謄写印刷で手作りのテキストを作り、また自由研究を重視した授業を展開するなど、高い理想と情熱を持ってゼロから始まった新制高等学校づくりに取り組んだ。並行して、地域の青年たちを対象とした聖書を学ぶ会を開くなど、積極的に地域への働きかけも行った。特に初期の財政状況が良くなかった独立学園に負担をかけたくないとの思いから、西村は三年で独立学園を去ったとも言われる。1951 年 4 月、矢内原の紹介により東大教養学部学生部助教授となり、学内で聖書集会を始めた。学生部助教授として安保闘争時の東大闘争の真ただ中に身を置き、体を張って流血を阻止した。東大闘争が始まった 1968 年以降、学生の世話をする中にほんとうの教育をたずねてきた西村の姿勢は周囲に徹底的に批判されるようになったが、西村は学生たちとの自主講座を通して障碍者や抑圧されている人々へ目を向けるようになっていった。その後、東大を退職し、北海道や東京で福祉関係の仕事に就き、北海道では北広島聖書集会を主催した。東京では社会福祉法人泉会「泉の家」の施設長（1983 年～ 1988 年）を務めた。矢内原や鈴木の記念講演会をはじめ各地の講演会や聖書集会で講演を行い、また独立学園の創立記念式でも二度講演している。妻の西村董子は、結婚前までは小学校教員だった。

(188) 馬槽は馬のえさ箱。生まれたてのキリストが寝かされた場所。

(189) 大賀一郎（1883～1965）、植物学者。内村の門下生。内村は大賀について、「大賀は（中略）余に取りては貴き一人である、而して彼れ一人を得んが為には九十九人の背信者を出しても惜しくはない」（内村鑑三全集 33 巻 p.184）とまで言っている。大賀は 1951 年、千葉市の遺跡で発掘した推定 2,000 年前のハスの種を発芽・開花させることに成功した。その花は「大賀ハス」として全国に広まっており、独立学園のグラウンド脇でも栽培されている。

(190) 村山道雄山形県知事。

(191) 退職してからの意。

(192)（1922～2012）、独立学園の音楽教師として、2 期生から 62 期生までを指導した。その他の略歴については、榎本様子、榎本忠雄の註を参照のこと。

(193) 群馬県沼田市。

(194) 借金のかた。返済できない時に差し出す物や権利など。

- (195) 収入と支出のバランスがとれ、経営が破綻しなかったことの意味と思われる。
- (196) 前出の「日本円消費者物価計算機」によれば、このインタビューが行われた 1977 年当時の 20 万円は 2019 年の 253,347 円～ 318,623 円となり、6 万円は 2019 年の 76,004 円～ 95,587 円となる。
- (197) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (198) 桜井 淳 司、1964 年～ 1965 年まで在職した、独立学園旧職員。1979 年、福島県にニューライフカレッジを設立。ニューライフカレッジは原書でも基督教独立学園年表でも 1978 年開校とあるが、実際は 1979 年開校であるので訂正した。インタビューが行われた 1977 年にはまだ開校していないにもかかわらず過去形で記されているのは、鈴木の言い間違いか編集の誤りであろう。
- (199) 桜井ちか(1855～1928)が創立した学校の一つ。1895年に設立した小規模な寄宿学校を、1898年に桜井女塾へと名称変更した。なお、桜井が1876年に創立した桜井女学校は、現在の女子学院の前身。
- (200) 独立学園の近くの叶水中学校のことと思われる。
- (201) 1999年4月から全寮制となった。
- (202) 現在は朝拝と称する。
- (203) 現在は労作教育と称する。
- (204) 夕拝の担当者が感話を記入するノート。歴代の舎生日誌は保存されている。
- (205) もとは、子と弟の意。ここでは、子や孫や弟や妹のことだろう。
- (206) 独立学園は新任教職員から校長まで全員一律給。家族手当などはあるが、校長・教頭や校務の部長などへの役職手当はない。
- (207) かつて百貨店などを全国展開していた企業。創業者の山藤 捷 七(1894～1955)は、結核療養中にクリスチャンとなり、内村鑑三の聖書講義にも出席した。1923年に神奈川県平塚市で十字屋呉服店を開業。十字屋という店名は十字架からとったもので、神と貧しい人のために働くことを目指し、奉仕に明けて奉仕に暮れるという標語を掲げた。山藤は十字屋での聖書講義を矢内原忠雄に依頼したが、多忙だった矢内原に代わって日暮勝英が担当した。矢内原が1951年(昭和26年)4月の『嘉信』に記した「信仰と商売」という文章は、十字屋と山藤に向けてのメッセージと言われる。山藤を十字屋初代社長とすると鈴木俊郎が3代目の社長を務め、日暮は旧郵政省を定年退職後、十字屋の労務部長・能力開発室長を務めた。山形駅前の山形店は1971年6月に開店したが、それ以前にも山形駅から1km余り北東の七日町で営業していた。山形県内には山形店の他に、米沢店、寒河江店があったが、最後に残った山形店も2018年に閉店した。十字屋山形店での聖書講話は、鈴木他、政池仁、日暮勝英、小関充等が担当した。鈴木と山藤に面識があったかは不明。
- (208) 原書では盤上会だが、誤植であるため訂正した。以後同じ。
- (209) 矢内原の弟子。矢内原が帝大(東大)を迫られた後、初めての講演会を企画・実施した一人。電信電話局(現NTT)員で、山形県内や仙台で勤務した。1946年、山形電気通信工事局長だった際に部下に呼びかけ、馬槽会という聖書研究会を発足させた。米沢電話局時代は局長。
- (210) 国立療養所東北新生園。宮城県登米市にある国立のハンセン病療養所。

- (211) 現在は宮城県大崎市。
- (212) 原書ではマホメッドと表記。
- (213) おそらく、金銭や生活に関する日常的な問題で内村を心配させたり<sup>わずら</sup> 煩<sup>わ</sup>わせた<sup>く</sup>くないということだろう。
- (214) おそらく、おはぎは内村家の名物で、内村家を訪問した門下生たちがよくご馳走<sup>ちそう</sup>になったの  
だろう。そのおはぎを鈴木はご馳走<sup>ちそう</sup>にならなかったようだが、鈴木<sup>ちそう</sup>の意図は不明。あるいは、す  
ぐにおはぎをご馳走<sup>ちそう</sup>なって、軽率<sup>けいそつ</sup>に借りを<sup>いまし</sup>作るべからずという<sup>いまし</sup>ような戒<sup>いまし</sup>め<sup>いまし</sup>の<sup>いまし</sup>ようなもの<sup>いまし</sup>かもし  
れない。いずれにせよ、現在では真意は不明。
- (215) John Wesley・ジョン・ウェスリー（1703～1791）が創始したキリスト教プロテスタント  
の一派。ウェスレーとも。原書ではウェスレイと表記。
- (216) (新共同訳)「すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられ  
る神の義<sup>ぎ</sup>です。そこには何の差別<sup>さべつ</sup>もありません。」(ローマの信徒への手紙 3 章 22 節)
- (217) Fellowship of Reconciliation の略。日本友和会<sup>ゆうわかい</sup>（JFOR・Japan Fellowship of  
Reconciliation）は、国際友和会<sup>ゆうわかい</sup>（IFOR・International Fellowship of Reconciliation）の  
日本支部。IFOR はオランダに本部を置く、絶対非戦を唱える国際的平和団体。1914 年の創設以  
来、一貫して非暴力による平和実現のための活動を続け、Martin Luther King Jr.（キング牧  
師）など 6 名（2022 年 2 月現在）のノーベル平和賞受賞者を輩出している。IFOR は国連 ECOSOC  
（国連経済社会理事会）および UNESCO（ユネスコ・国連教育科学文化機関）において、オブ  
ザーバーと諮問<sup>しもん</sup>のステータス（observer and consultative status）を有しており、国連機関の  
会議に参加して提言<sup>ていげん</sup>などを行っている。日本友和会<sup>ゆうわかい</sup>は 1926 年に創設されたが、戦時中の 1944 年  
に解散させられた。1976 年から 1980 年まで理事長を務めた<sup>まさいげん</sup>政池<sup>ゆうわかい</sup>仁<sup>ゆうわかい</sup>によれば、日本友和会<sup>ゆうわかい</sup>の創設  
にはヴォーリーズの努力も大きかったという。現在の日本友和会<sup>ゆうわかい</sup>は 1949 年に発足し、非暴力によ  
る愛と和解を積極的に実践し、平和を造り出す活動を続けている。鈴木は 1980 年から 1988 年ま  
で理事長を務めた。
- (218) 条約のような高度の政治性を有する問題については、極めて明白に違憲であると認められな  
い限り裁判所の審査対象外であり、内閣と国会の判断にゆだねるべきとする理論。日米安全保障  
条約が合憲か違憲かが論点となった<sup>すながわ</sup>砂川事件<sup>すながわ</sup>の審理において 1959 年に最高裁が採用した。
- (219) 鈴木はこのインタビューから約 3 年後、1980 年 8 月 15 日（20 日とする資料もあり）、軍事  
費用（防衛費）を税金として国民から<sup>ちようしゆう</sup>徴<sup>ちようしゆう</sup>収<sup>ちようしゆう</sup>することも、税金を軍事費用として消費することも  
憲法違反であるとして、国を相手取って裁判を起こした。1986 年 1 月 17 日、山形地裁米沢支部  
は違憲ではないと判決し、鈴木は敗訴した。しかし、1987 年 12 月 14 日、鈴木は山形地裁民事部  
裁判長他に「裁判官に命令する」との<sup>そじゆう</sup>訴<sup>そじゆう</sup>状<sup>そじゆう</sup>を送達した。この中で鈴木は、政府が反論しない以  
上、憲法を守る裁判に勝利したと宣言した。早期の裁判の必要を述べつつそれまで裁判を起こさ  
なかったのは、当時収入が少なかった鈴木には所得税が課税されていなかったことによる。しか  
し、この時は山梨県に残っていた山林が売れ、所得税を徴収されたため、裁判を起こすことがで  
きるようになった。
- (220) 高い次元。レベルが高いこと。

- (221) 元号とは大化、明治、令和などの暦に関する称号。日本国憲法施行と旧皇室典範廃止にともない元号使用の法的根拠は失われていたが、1979年に制定された元号法により法的根拠が再び与えられた。元号は政令（内閣が制定する命令）で定め、皇位継承の際にのみ改元する。
- (222) 靖国神社を国家管理とすることを目指した法律案。1969年に初めて提出され、1974年までに5回廃案となった。1853年以降の戦死者などを英霊として祀った靖国神社は、戦時体制の精神的支柱であり、敗戦まで軍が管理していた。しかし、戦後GHQ（連合国軍総司令部）により解体され、一宗教法人となった。廃案の背景には、政教分離規定からの逸脱、信教の自由の侵害、軍国主義復活への懸念などがあった。1978年のA級戦犯の合祀以後、靖国問題はさらに複雑化した。
- (223) 非戦は、内村が多用したことば。1894年～1995年の日清戦争を義戦（「日清戦争の義」、内村鑑三全集3巻p.104～p.112）とした内村だったが、その後自らの過ちを認め、1903年9月17日付「聖書の研究」第44号では、絶対的非戦主義の立場から日露戦争開戦への反対を主張している。（内村鑑三全集11巻p.404）
- (224) 文脈上、おそらく、軍備がなければ国は守れそうもない、という意味だと思われる。
- (225) （新共同訳）「彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。」（フィリピの信徒への手紙3章19節）
- (226) 豊臣秀吉の辞世の和歌。「つゆとをちつゆときへにしわがみかな なにわの事もゆめの又ゆめ」なお、原書には難波とあるが、浪速と記すほうが一般的なようである。
- (227) 1936年2月26日、国家改造を目指した陸軍の青年将校らが約1,500名の部隊を率いて首相官邸、大臣や政府首脳らの官邸・私邸、警視庁、新聞社などを襲撃したクーデター事件。永田町一帯が占拠され、大臣などが殺害された。翌日、戒厳令が公布され、29日に鎮圧された。しかし、事件後、軍の規律を正すという名目のもと、軍部の政治支配力が著しく強化された。
- (228) (1878～1969)、内村の門下生で、関東学院初代学院長。
- (229) 現在の秋田県鹿角市十和田大湯と思われる。
- (230) おそらく、永松銅山のことと思われる。永松銅山は日本有数の産出量を誇った銅山で、現在の山形県最上郡大蔵村にあった。明治期に発展したが、1961年に閉山。十部一峠の北側・大蔵村側に永松銅山があり、その南側・寒河江市側に幸生銅山があった。
- (231) 肥料。
- (232) 化学肥料などの有料の肥料。
- (233) 山形県東置賜郡高島町。
- (234) 報酬を受けず、自分で費用を負担して働くこと。
- (235) 現YMCA東山荘。静岡県御殿場市東山にある施設。1915年にヴォーリズによって設計され、内村も度々利用した。
- (236) ドイツ語のSonde。食道や腸などに挿入して診断や治療に用いた細い管状の器具のこと。
- (237) 鈴木は本書6-5で「影絵物語」と呼んでいる。
- (238) 誤って起こした火災。

- (239) (新共同訳)「また、シロアムの塔<sup>とう</sup>が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。」(ルカによる福音書 13 章 4 節)
- (240) (1901 ~ 1996)、医師。まだ特效薬がなく死亡率が高かった 1934 年に、東京都内で結核病院を開業した。日本キリスト教海外医療協会会長、日本シュワイツァー友の会会長などを歴任した。
- (241) Albert Schweitzer (1875 ~ 1965)、ドイツの神学者<sup>しんがく</sup>、音楽家、医師、伝道者。哲学の博士号<sup>はくし</sup>を取得し大学講師となったほか、パイプオルガン演奏とバツハ研究でも名を馳<sup>は</sup>せた。30 歳から医学を学び、アフリカでの伝道と医療活動に従事し、原始林(密林)の聖者とも呼ばれた。1955 年にノーベル平和賞を受賞。内村はシュヴァイツァー(内村はシュワイツエルと表記)の病院に何度も寄附金<sup>きふ</sup>を送付している。(内村鑑三全集 30 巻 p.524 ほか)シュバイツァー、シュワイツァーとも表記。
- (242) (1875 ~ 1964)、内村の門下生。津山基督教図書館高等学校(1950 ~ 1982)、つやま自然のふしぎ館(元・津山科学教育博物館)の創立者。
- (243) (1886 ~ 1970)、内村門下の無教会指導者。『註解新約聖書』、『旧約聖書略解』などを執筆<sup>ちゅうかい</sup>。
- (244) 独立学園旧講師。蚕糸試験場関係の公職を定年退職後、東京農業大学農学部講師、および同大農学部付属<sup>いっしゅ</sup>育種学研究所(現・財団法人進化生物学研究所)主任研究員。
- (245) 横田勝徳。独立学園旧職員。
- (246) 石原兵永<sup>ひょうえい</sup>のことか。
- (247) 講堂兼体操場。
- (248) 井上栄<sup>さかえ</sup>。戦前から独立学園の製材や田畑の仕事をした。羽越<sup>うえつ</sup>水害の前は大石沢川<sup>おおいしざわがわ</sup>の東側(独立学園側から見て、現在のパークゴルフ場脇<sup>わき</sup>の橋の先)に家があったが、水害後は西側に移転し現在<sup>いた</sup>に至る。
- (249) 円形の歯(のこぎり)を回転させて木材を切断する機械。
- (250) この言葉は独立学園の三本柱<sup>さんぼんぼしら</sup>として大切にされている。元となる内村の文章は、「聖書之研究」95 号、内村鑑三全集 15 巻 p.323 ~ p.324 に収録。
- (251) Julius Hawley Seelye・ジュユリアス・ホーリー・シーリー (1824 ~ 1895)、アマースト大学学長、牧師。新島襄<sup>にいしまじょう</sup>、内村鑑三<sup>うちむらかんぞう</sup>に、絶大な影響を与えた。本書 6-1 の註も参照のこと。
- (252) 毎年決まって支出する経費のこと。
- (253) 機械の内部の構造。組織。
- (254) 寺院などによく用いられる屋根の形。屋根の上部には二方向に、下部には四方向に勾配<sup>こうばい</sup>がある形。
- (255) 実的なものこそ美しいという意味と思われる。柳宗悦<sup>やなぎむねよし</sup>が提唱<sup>ていしょう</sup>した民芸運動で用いられた言葉の引用である可能性がある。
- (256) 台形二つと三角形二つでできている、一般的な屋根の形。
- (257) ロンドンの西、古都イトン<sup>こと</sup>にある代表的なパブリック・スクール。1440 年創立で、男子校。



- (258) 現在の北海道くどうぐん久遠郡ちょうせたな町。北海道西部の町。せたな町ちょうの隣せの瀬棚郡い今金町まかねちょうの農家などでも農業実習をしている。
- (259) 期間は最長 18 泊 19 日、費用は 10 万円強で行う。行き先、内容などの計画はもちろん、諸交渉や予約や支払いなども生徒が中心となって実施している。
- (260) (1902 ~ 1982)、東京大学名誉教授、地球物理学者。東大地震研究所で寺田とらひこ寅彦に師事。日本の地震予知計画の生みの親として知られる。
- (261) 現在の高知県。
- (262) 私利私欲しりしよくを求める心がないこと。私心ししんがないこと。
- (263) 原題は、*Grace Abounding to the Chief of Sinners* で、『天路歷程』の著者として著名なバニヤンの精神的自伝と言われる。バニヤンは、当時のイギリスで唯一正当の教派とされたアングリカン・チャーチ（英国国教会、聖公会）には属さず、別の教派の礼拝で説教をしたため逮捕された。アングリカン・チャーチに属すこと、そして説教をやめることを約束すれば禁固 6 ヶ月だったが、バニヤンはその条件を拒否。最終的には 12 年を刑務所で過ごした。その間に社会のほうに変化し、アングリカン・チャーチに属さず、説教を続けることも認められた形で釈放された。*Grace Abounding to the Chief of Sinners* は服役中ふくえきに執筆しつぱつされ、服役中の 1666 年に出版された。完成直後、依然として服役中いぜんに、代表作である『天路歷程』の執筆てんろれきていを開始しつぱつ（諸説あり）。バニヤンは 1672 年に釈放されたが、1675 年に再度 6 ヶ月間服役。『天路歷程』（前編）の出版は、二度目の釈放後の 1678 年、後編の出版は 1684 年。
- (264) (1897 ~ 1987)、昭和女子大学教授、児童文学作家。独立学園には 1959 年 3 月 17 日に来校し、第 9 回卒業式の卒業記念講演の講師を務めた。なお、これが独立学園初の卒業記念講演。その後も何度か来校し、クリスマスや創立記念式でも講師を務めた。
- (265) 中国の東北部の昔の俗称ぞくしょう。
- (266) 香川県北部の市で、県庁所在地。
- (267) 現在では一般に定年と記す。
- (268) 香川県高松市たかまつにある、瀬戸内海に突き出した巨大な溶岩台地ようがん。標高 293m の半島だが、江戸時代初期までは島だった。1934 年に国の史跡、天然記念物に指定された。
- (269) 1966 年。
- (270) 独立学園で使用されている英語の讃美歌 198 番で、1954 年版の日本語讃美歌 214 番の原曲でメロディーは同一（調は異なる）。歌詞は、未開・異教の民への宣教せんきやうという原詩のテーマから、差別的ともとれる箇所かしよを除くなどのアレンジをして、巧みに和訳されている。
- (271) 日が沈まない夜。北極・南極近くの地域で、夏至げしまたは冬至とうじの時期に、日没から日の出までの夜の間も空が薄明うすあかるい状態。
- (272) 油やロウソクに火をつけて照らす、灯台形の照明用の道具。
- (273) (1949 ~)、国際基督教大学キリスト名誉教授。
- (274) (1951 ~ 1998)、福岡女学院中学校・高等学校英語科きやうゆ教諭。当時はオックスフォード大学に留学中。他にリッチモンド大学へも留学したという資料もある。
- (275) 昔の本を、他に伝えられているものと比較、検討して、より正しい形に訂正した本。

- (276) 原書は「架空もの」と表記。脱字と思われる。
- (277) ナポレオンがエジプト遠征の際、ロゼッタという町で発見した石碑。上段はヒエログリフ（聖刻文字）、中段はデモティック（民衆文字、ヒエログリフの略書体）、下段はギリシャ文字で同じ内容の文が書かれているため、古代エジプト文字の解読の重要な手がかりとなった。
- (278) 原書では「ウエストミンスター・アベイ」と表記。以後同じ。
- (279) チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）による 1959 年刊の小説。パリとロンドンが舞台で、原題は *A Tale of Two Cities*。
- (280) 時間がかかったの意と思われる。
- (281) (1894 ~ 1979 年)、プロテスタント画家で、内村や矢内原の肖像画などを製作。内村の聖書研究会に属し、内村の勧めで東京美術学校洋画科に入学。1921 年にフランスへ留学。1927 年 6 月 20 日と 30 日に、内村（など）にパレスチナ（など）への旅行について語り、内村を喜ばせている。（内村鑑三全集 35 巻 p.199, p.203）1955 年と 66 年に独立学園に来校し講演。内村を描いた「仰瞻」という作品が「基督教独立学園のあゆみ」の p.63 に掲載されている。
- (282) (1638 ~ 1715)、ヴェルサイユ宮殿を建てたフランス王。
- (283) (1710 ~ 1774)、ルイ 14 世のひ孫であるルイ 15 世の孫で、フランス革命時のフランス王。マリー・アントワネット(1755 ~ 1793) はその妻。
- (284) Charles Louis Napoléon Bonaparte (1808 ~ 1873)、シャルル・ルイ・ナポレオン・ボナパルト。ナポレオン 1 世の弟の子。ナポレオン 1 世の第一帝政没落後に亡命したが、1848 年の二月革命に際し帰国し大統領に就任。1852 年に皇帝となり、第二帝政を築いた。1871 年普仏戦争（ドイツ諸邦とフランスとの戦争）に敗北して退位。イギリスに亡命し、そこで生涯を終えた。
- (285) 川の中にある島という意で用いられていると思われる。中州のことだろう。
- (286) 原書では「対照物」。誤植と思われる。
- (287) 領主が家臣に土地を与え、その代わりに軍役の義務を課する主従関係を中核とする制度。ヨーロッパでは 6 世紀頃から 15 世紀末ごろで、11 世紀から 13 世紀が最盛期だった。日本では、一般的には鎌倉時代から明治維新までの時代を指す。
- (288) 1386 年創立で、ドイツ最古の大学であるハイデルベルク大学のことだろう。
- (289) ドイツの高速道路網。
- (290) スイスにある標高 4,158m の山。
- (291) スイスにある標高 3,970m の山。高さ 1,800m の険しい北壁で有名。
- (292) スイスにある標高 4,099m の山。アイガーとユングフラウの間にある。
- (293) 内村の「初夢」の一節。（内村鑑三全集 14 巻 p.411）
- (294) 原書での鈴木の記事の通り、ジュネーヴ湖とも。
- (295) 原書での鈴木の記事の通り、アンブレ庭園とも。
- (296) Jean Calvin (1509 ~ 1564)、フランスの宗教改革者。カルヴァン派の祖であり、福音主義の「信仰のみ」「聖書のみ」の二大原理を堅持した。神の絶対主権を強調し、「ただ神にのみ栄光を」 *Deo soli gloria* をモットーとした。
- (297) Guillaume Farel (1489 ~ 1565)、スイスの宗教改革者。1532 年以降ジュネーブの宗教改革

- に努力し、カルヴァンを説き伏せて、その仕事に協力させた。
- (298) Théodore de Bèze (1519 ~ 1605)、フランスの人文学者、宗教改革者。1559年にカルヴァンが創設した大学の初代学長となった。カルヴァンの最も忠実な後継者と言われる。
- (299) John Knox (1514頃 ~ 1572)、スコットランドのカルヴァン主義宗教改革者。カルヴァンに師事し、スコットランドに改革派教会を設立した。ノックスに起源をもつ教会は長老派教会と呼ばれるが、信仰内容と教会制度においては改革派と基本的に同一。
- (300) Michael Servetus (1511? ~ 1553)、スペインの医学者で神学者。主にフランスで活動した。三位一体説やキリストの神性や幼児の洗礼を否定し、極端な人間中心的信仰を説いた。そのため新旧両派から異端として迫害され、カルヴァンによってジュネーブで火刑に処された。Michael Servetus はラテン語表記で、セルヴェトスとも表記される。なお、鈴木はラテン語風に原書でセルヴェトスと表記。フランス語表記では Michel Servet ミシェル・セルヴェ。
- (301) Jean-Jacques Rousseau (1712 ~ 1778)、フランスの作家・啓蒙思想家。生まれはジュネーブ。「社会契約論」などで民主主義理論を唱えて大革命のさきがけとなり、「エミール」では自由主義教育を説いた。
- (302) International Labor Organization、国際労働局。
- (303) World Health Organization、世界保健機関。
- (304) 1954年版の日本語讀美歌 74 番。「父なる神 大能」のカテゴリーに収められている。
- (305) 聖書を題材とした音楽で、独唱・重唱・合唱・管弦楽などで構成される。ハレルヤコーラスを含むヘンデル作曲のメサイアが有名。宗教的音楽劇。
- (306) 夏に花を咲かせる常緑低木。
- (307) 「こきあかいろ」とも読むようである。
- (308) イタリアの別荘風の意。
- (309) 原書ではナポリに行きとあるが、誤植であるため訂正した。
- (310) 考古学者。ドイツ人の考古学者と結婚し、2021年現在はドイツ在住。千葉真のはとこ。『エトルリアの壁画』（岩波書店、1985）の共同訳者と思われる。
- (311) 船体の下部に翼がある船。翼によって船体が水上に浮くため、水の抵抗が減り、速度が速くなる。
- (312) 原文は琅玕洞。琅玕はヒスイなどの暗緑色や青色の鉱物。洞は洞窟のこと。
- (313) エンジンで動く船。
- (314) つる性低木。
- (315) 2021年9月20日に科学誌・サイエンティフィック・リポーツ (scientific reports) に発表された研究結果によると、紀元前 1650 年から紀元前 1600 年ごろに大気中で爆発した隕石が、広島型原爆の 1,000 倍以上の威力で、死海周辺のトルエルハムという古代集落を破壊した。研究チームは、このトルエルハムが、神が硫黄の火を降らせて滅ぼしたと創世記 19 章に記されているソドムではないかと示唆しているが、現在のところ、その確証があるわけではない。(本註は、時事ドットコムニュースなどを参考にして作成した。)
- (316) ユダヤ教の礼拝堂。

- (317) 都市の広場。都市生活の中核をなし、政治や経済や文化の中心地ともなっていた。
- (318) Henryk Adam Aleksander Pius Sienkiewicz (1846 ~ 1916)、ポーランドの小説家、批評家。1905年、ノーベル文学賞を受賞。名の日本語表記は多数あるが、ここでは福音館書店刊(2000年)の表記に準じた。
- (319) Frédéric François Chopin (1810 ~ 1849)、ピアノの詩人と呼ばれたポーランド生まれの作曲家、ピアノ奏者。独立革命に失敗した母国には帰国せず、主にパリで活動した。
- (320) 古代の、地下にある墓所<sup>ほしよ</sup>。
- (321) 使徒言行録 17章 22節。口語訳にある「評議書」という語は新共同訳、聖書協会共同訳では用いられておらず、共に「アレオパゴスの真ん中」と訳されている<sup>もち</sup>。
- (322) 独立学園関係者が一本松と呼ぶところ。独立学園構内や叶水地区周辺を見渡せる高台<sup>かのみず</sup>。
- (323) 神社や寺で、神体<sup>しんたい</sup>や本尊<sup>ほんぞん</sup>を安置してあるところ。
- (324) 書上<sup>かきあげ</sup>、山野上<sup>やまのうえ</sup>、岡藤<sup>おかふじ</sup>は共に独立学園卒業生。
- (325) この「ささやかにして偉大なるヨーロッパ旅行」は、16期、17期あたりの卒業生たちが中心となって企画された。